宮城県文化財調査報告書第232集

卯月沢遺跡

平成25年3月

宮城県教育委員会
宮城県大河原土木事務所

宮城県文化財調査報告書第232集
卯月沢遺跡
平成二十五年三月
宮城県教育委員会
宮城県大河原土木事務所

卯 月 沢 遺 跡

序　　文

平成23年３月11日、Ｍ９の東北地方太平洋沖地震と巨大津波による甚大な被害を受けた私たちは、現在それを何とか乗り越え、復旧・復興へ取り組んでいます。

このような地震津波は過去にも例があり、太平洋沿岸を周期的に襲っていることが歴史的に知られていました。宮城県内でも、文献資料や埋蔵文化財から、過去の自然災害と、度重なる災害を乗り越え復興を遂げた先人たちのたくましい姿が明らかになっています。震災からの地域の復興には、安全で災害に強いまちづくり、産業の振興、人々の暮らしの再生に加えて、先人たちが苦難を克服し、営々と築き上げてきた独自の文化や文化遺産のもつ魅力、歴史の継承もまた不可欠です。

本書は、宮城県大河原土木事務所との保存協議に基づき、国道113号大内自歩道設置工事に先立って実施した伊具郡丸森町卯月沢遺跡の発掘調査報告書です。本書が広く県民の皆様や各地の研究者に活用され、地域の歴史解明の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、震災復興に係わる多忙な業務の中、遺跡の保存に理解を示され、発掘調査に際しては多大なるご協力をいただいた関係機関の方々、さらに実際の調査にあたられた皆様に対し、厚く御礼申し上げる次第です。

平成25年３月

宮城県教育委員会
教育長　髙　橋　　仁

例　　言

1．本書は、宮城県大河原土木事務所が担当する国道113号大内自歩道設置工事に伴う卯月沢遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、宮城県教育委員会が主体となり、宮城県教育庁文化財保護課が担当した。

3．本書の第２図は、国土交通省国土地理院発行の「丸森」（縮尺1/25,000）の地形図を複製して使用した。

4．本書で使用した測量原点の座標値は、世界測地系に基づく平面直角座標第Ｘ系による。なお、方位Ｎは座標北を表している。使用した測量基準点の座標は以下のとおりである。

　Ｔ－11：Ｘ＝－234901.773　　Ｙ＝－1203.016　　Ｚ＝26.359

　Ｔ－12：Ｘ＝－234915.595　　Ｙ＝－1154.002　　Ｚ＝26.650

5．本書で使用した遺構略号は以下の通りである。

SI：竪穴住居跡　SB：掘立柱建物跡　SA：柱穴列　SF：小溝状遺構群　SD：溝跡・河川跡　SE：井戸跡　SK：土坑

6．土色の記述にあたっては、「新版　標準土色帖　1996年版」（小山・竹原1996）を用いている。

7．遺構図版・遺物図版の縮尺は、それぞれスケールを付して示している。

8．遺物観察表で簡略化した表現は以下のとおりである。

(口)→口縁部　(体)→体部　(体下)→体下部　(胴)→胴部　(底)→底部　(坏)→坏部　(脚)→脚部　外→外面　内→内面

9．遺物実測図に示した塗りは、以下の特徴を表現している。

土師器の黒色処理　黒色漆　赤色漆

10. 本書の遺構の整理は、古田和誠・山中信宏・清水上政憲・大坂拓・鈴木ひとみが行い、遺物の整理は、古田・長沼雅子・長田由佳・加藤明日香・小林由美・佐藤せい子・伏見裕味子が行った。遺物の実測・トレースを古田・山中・鈴木・瀧澤恵子、土器の拓本作成を木村奈保美、土器の復元を木村・長田・鈴木・小林が担当した。

11. 遺物の写真撮影は（株)アートプロフィールに委託して行った。

12. 本書の執筆・編集は、調査担当者の協議を経て、古田が行った。

13. 本遺跡の調査成果については、平成24年度宮城県遺跡調査発表会でその内容の一部を公表しているが、本書と内容が異なる場合には、本書がこれに優先する。

14. 発掘調査の記録や出土品は宮城県教育委員会が保管している。

目　　次

序文
例言
目次
調査要項

第１章　遺跡の概要……1
　１．遺跡の位置と地理的環境……1
　２．周辺の遺跡……1

第２章　調査に至る経緯と方法……3
　１．調査に至る経緯……3
　２．調査の経過……4
　３．調査の方法……4

第３章　発掘調査……5
　１．基本層序……5
　２．発見された遺構と遺物……7
　　(1) ＩA区……7
　　A．竪穴住居跡……7　B．掘立柱建物跡……19　C．小溝状遺構群……21
　　D．土坑……21　E．その他の出土遺物……26
　　(2) ＩB区……26
　　A．竪穴住居跡……26　B．掘立柱建物跡・柱穴列……34　C．小溝状遺構群……38
　　D．河川跡……38　E．井戸跡……40　F．土坑……41
　　(3) Ⅱ区……41
　　A．溝跡……41　B．河川跡……41　C．その他の出土遺物……44

第４章　総括……45
　１．遺物……45
　　(1) SI5竪穴住居跡出土土器……45
　　(2) SK23土坑出土土器……46
　２．遺構……47
　　(1) 遺構の年代と特徴……47
　　A．竪穴住居跡……47　B．掘立柱建物跡……49　C．小溝状遺構群……50
　　D．河川跡……50　E．井戸跡……50　F．土坑……51

(2) 遺構の変遷……51
(3) 7世紀後葉～8世紀初頭の集落について……53
3．まとめ……54

引用文献
写真図版
報告書抄録

挿図目次

第1図　卯月沢遺跡の位置……1
第2図　卯月沢遺跡と周辺の遺跡……2
第3図　調査区の位置……3
第4図　基本層序……5
第5図　遺構配置図……6
第6図　SI4竪穴住居跡と出土土器……8
第7図　SI5竪穴住居跡……9
第8図　SI5竪穴住居跡出土土器（1）……10
第9図　SI5竪穴住居跡出土土器（2）……11
第10図　SI7・8竪穴住居跡と出土土器……12
第11図　SI9竪穴住居跡出土土器……13
第12図　SI9・10竪穴住居跡……14
第13図　SI11竪穴住居跡……16
第14図　SI11竪穴住居跡出土土器……17
第15図　SI12竪穴住居跡……18
第16図　SI12竪穴住居跡出土土器……19
第17図　SB19・25掘立柱建物跡……20
第18図　SB60・61掘立柱建物跡と出土土器……20
第19図　SF2小溝状遺構群出土土器……21
第20図　SF2小溝状遺構群……22
第21図　SK13土坑……22
第22図　SK14・15・23土坑と出土遺物……23
第23図　SK23土坑出土土器……24
第24図　SK24・59土坑と出土土器……25
第25図　ⅠA区遺構確認面出土土器……26
第26図　SI29・31竪穴住居跡……27
第27図　SI29・31竪穴住居跡と出土土器……28
第28図　SI32竪穴住居跡……29
第29図　SI35A竪穴住居跡……31
第30図　SI35A竪穴住居跡と出土土器……32
第31図　SI35B竪穴住居跡と出土土器……33
第32図　SB53・54・65建物跡、SA63柱穴列と出土土器……35
第33図　SB55・56・57・66掘立柱建物跡と出土土器……37
第34図　SD33河川跡と出土土器……39
第35図　SE26井戸跡、SK41土坑と出土土器……40
第36図　SK62土坑……41
第37図　SD18溝跡、SD20・21・22河川跡……42
第38図　SD20・21・22河川跡とその他の出土土器……43
第39図　7世紀後葉～8世紀初頭の主な土器……48
第40図　主な遺構の遺構期と重複関係……52
第41図　Ⅰ期・Ⅱ期の主な遺構の分布……52

表目次

第1表　調査経過表……4
第2表　SI35竪穴住居跡の変遷……30
第3表　土坑属性表……44
第4表　各遺構の遺物出土状況……45
第5表　竪穴住居跡属性表……49
第6表　掘立柱建物跡属性表……50

写真図版目次

写真図版1　遺跡遠景・ⅠA区全景・SI4竪穴住居跡……59
写真図版2　ⅠA区竪穴住居跡、土坑……60
写真図版3　ⅠA区住居跡、建物跡、土坑、小溝状遺構群……61
写真図版4　ⅠA区土坑、ⅠB区全景、竪穴住居跡……62
写真図版5　SI35竪穴住居跡……63
写真図版6　ⅠB区掘立柱建物跡、河川跡……64
写真図版7　ⅠB区住居跡、井戸跡、土坑、Ⅱ区全景、溝跡、河川跡……65
写真図版8　SI4・5竪穴住居跡出土土器……66
写真図版9　SI7・8・9・11竪穴住居跡出土遺物……67
写真図版10　SI12、SB61、SF2、SK14・23出土遺物……68
写真図版11　SK24・59、ⅠA区遺構確認面、SI29・31・35出土遺物……69
写真図版12　SB57、SD33、SE26、SK41、Ⅱ区出土遺物と7世紀後葉～8世紀初頭の主な土器……70

調　査　要　項

遺 跡 名：卯月沢遺跡（宮城県遺跡地名表登載番号10151）　遺跡記号：WE

所 在 地：宮城県伊具郡丸森町大内字卯月沢

調査原因：国道113号大内自歩道設置工事に伴う発掘調査

調査主体：宮城県教育委員会

調査担当：宮城県教育庁文化財保護課

調査協力：宮城県大河原土木事務所　丸森町教育委員会

調査期間：確認調査　　Ⅰ区　平成23年１月27日、２月３日・４日　　Ⅱ区　４月18日～20日

本発掘調査　第１次調査　平成23年11月７日～12月28日、平成24年２月６日～３月16日

第２次調査　平成24年４月９日～６月13日

調査面積：確認調査　　約260㎡

本発掘調査　約730㎡

調 査 員：確認調査　　Ⅰ区　千葉直樹・山口淳、伊藤博道（丸森町教育委員会）

Ⅱ区　大沼真人・初鹿野博之・三浦秋司・大坂拓

本発掘調査　第１次調査（平成23年度）

豊村幸宏・齋藤圭一・山中信宏・須藤貴宏・村上裕次・清水上政憲

古田和誠・濱中一道・鈴木啓司、荒井優作（丸森町教育委員会）

第２次調査（平成24年度）

大友邦彦・山中信宏・村上裕次・清水上政憲・古田和誠・大坂拓

荒井優作（丸森町教育委員会）

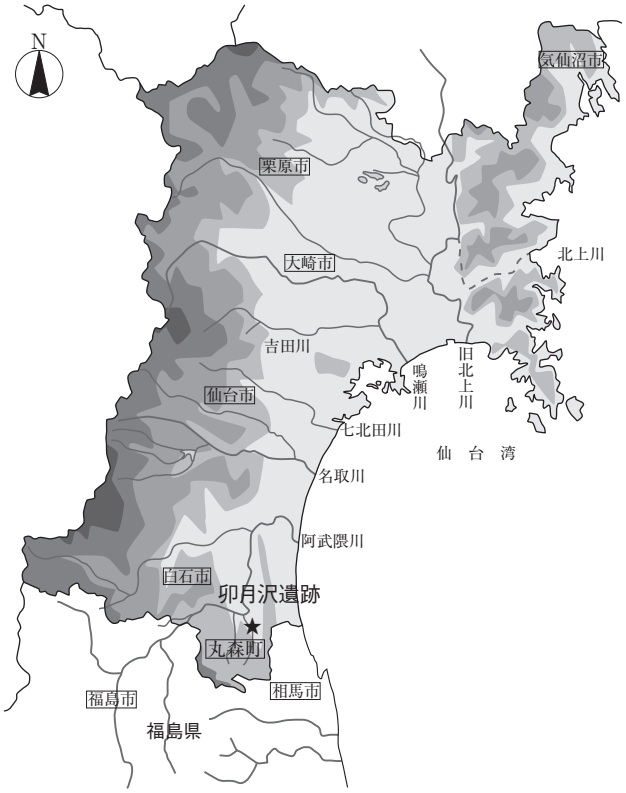
作 業 員：天野幸枝・折笠映喜・福山すみ子・目黒そよ・天野民子・天野剛弘・酒井たみ子

渡辺忠夫・大河内さとみ・目黒一・畑慶市・預幡拓・安保祐花・八島孝誌・斉藤倫郎

第１章　遺跡の概要

１．遺跡の位置と地理的環境

卯月沢遺跡は宮城県伊具郡丸森町大内字卯月沢に所在する。宮城県南東端の丸森町は、南を阿武隈山地、東を亘理地塁山地、北西を角田丘陵性山地、北を角田丘陵に囲まれた角田盆地の南端に位置する（第１図）。阿武隈山地に源を発する阿武隈川は、角田盆地をほぼ南北に流下し、仙台湾に注いでいる。この阿武隈川の支流の一つである雉子尾川は、福島県境から丸森町南部を南北に２分し、部分的に沖積低地を形成しながら阿武隈川に合流している。本遺跡の所在する大内地区一帯には雉子尾川によって形成された沖積低地が南北に細長く広がり、その東西には標高100～200mの丘陵がそれを挟むように連なっている。本遺跡は雉子尾川と丘陵の間の沖積低地に立地している（第２図）。遺跡は東西295m、南北225mほどの広がりをもつ。標高は約24～27mで、雉子尾川との比高差は約５mである。現況は水田・畑・道路・資材置場である。



第１図　卯月沢遺跡の位置

２．周辺の遺跡

卯月沢遺跡周辺には縄文時代から近世にかけての遺跡が分布している（第２図）。

縄文時代の遺跡は阿武隈山地から樹枝状に延びた丘陵端部に点在している。本遺跡北東の七夕遺跡（３）では、縄文時代中期の遺物包含層が確認されている（丸森町教育委員会1968）。

弥生時代の遺跡数はわずかである。台町古墳群（15）・台町遺跡（17）・伊手遺跡（30）で石包丁が採集されているが、遺構は発見されていない（宮城県教育委員会1992）。

古墳時代になると遺跡数が増加し、阿武隈山地の丘陵端部には古墳が分布する。台町古墳群（15）は阿武隈山地から舌状に張り出した丘陵端部に分布し、主軸長33mの前方後円墳と径５～25mの円墳174基が発見されている（志間1954・1955・1961、宮城県教育委員会1991）。103号墳では土器をささげ持った女性埴輪の他、形象埴輪、円筒埴輪が出土している。主体部形態や出土遺物の検討から、古墳群の築造時期は５世紀中頃から７世紀初頭と考えられている。

古代になると雉子尾川の沖積低地に集落が形成されるようになる。石神遺跡（４）では、奈良・平安時代の竪穴住居跡５軒、火葬墓と考えられる土壙１基が発見されている（宮城県教育委員会1980）。

番号	遺跡名	立地	種別	時代	番号	遺跡名	立地	種別	時代	番号	遺跡名	立地	種別	時代
1	卯月沢遺跡	自然堤防	集落	古代	11	河原遺跡	丘陵麓	散布地	弥生	21	原町遺跡	自然堤防	散布地	古代
2	七夕西遺跡	自然堤防	集落	古墳、古代	12	町史跡　金山城跡	丘陵	城館	中世	22	船渡道遺跡	沖積平野	条里跡	古代
3	七夕遺跡	丘陵	集落	縄文中	13	下田辺横穴墓群	丘陵斜面	横穴墓	古墳後	23	前並遺跡	自然堤防	散布地	古墳中・後、奈良
4	石神遺跡	自然堤防	集落	古代	14	長泉寺境内経塚	丘陵斜面	経塚	近世	24	中原遺跡	自然堤防	散布地	古墳中
5	砂田遺跡	丘陵麓	散布地	古代	15	町史跡　台町古墳群	丘陵	古墳、散布地	縄文、弥生、古墳中・後	25	松崎遺跡	丘陵麓	散布地	縄文中
6	中平遺跡	自然堤防	集落	古代	16	台町館跡	丘陵	城館	中世	26	日照田遺跡	丘陵	散布地	縄文中
7	山王遺跡	丘陵斜面	散布地	縄文晩	17	台町遺跡	丘陵麓	散布地	縄文、弥生	27	根切遺跡	丘陵麓	散布地	古墳中
8	熊ノ入遺跡	丘陵麓	散布地	縄文、古代	18	袋遺跡	自然堤防	散布地	奈良、平安	28	柳ノ目遺跡	丘陵	散布地	古代
9	熊ノ入B遺跡	丘陵斜面	散布地	縄文	19	上片山古墳群	丘陵	円墳	古墳中・後	29	冥護山館跡	丘陵	城館	中世
10	塚田古墳群	段丘	古墳	古墳後	20	小富士山南古墳群	丘陵	円墳	古墳中・後	30	伊手遺跡	丘陵斜面	散布地	弥生、古代

第２図　卯月沢遺跡と周辺の遺跡

中平遺跡（６）では、奈良・平安時代の竪穴住居跡１軒、火葬墓と考えられる土壙１基、小溝状遺構群１面が発見されている（宮城県教育委員会1979）。また、本遺跡の約６km北に位置する角田市角田郡山遺跡では、遺跡南半部を区画する大溝内部で、掘込地業・壺地業を伴う礎石建物跡７棟や掘立柱建物跡６棟が東西方向３列に配置された倉庫群が発見され、この一帯が伊具郡衙の正倉院に位置付けられている（齋藤2009）。

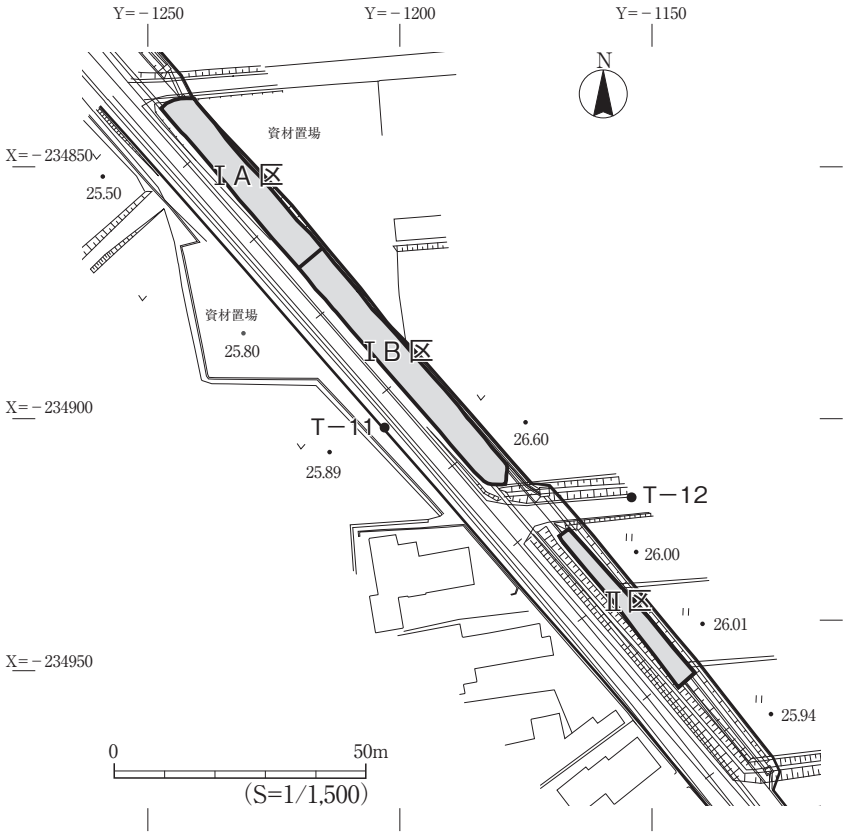
中世から近世の遺跡には、金山城跡（12）、台町館跡（16）、冥護山館跡（29）がある。また、本遺跡の約４km北西に位置する大古町遺跡では、掘立柱建物跡・井戸跡で構成される中・近世の集落が発見されており、井戸跡から伊達家の家紋である三引両紋が描かれた漆器片口椀や高札に使用されたと考えられる折敷が出土している（丸森町教育委員会2003・2004）。

第２章　調査に至る経緯と方法

１．調査に至る経緯

国道113号線は、宮城県南部と福島県相馬市を結ぶ幹線道路であり、交通量は増加の一途をたどっている。特に小・中学校の通学路であり徒歩や自転車による通行量が多い大内地区では、道路幅が狭く、歩道がないことから危険な状況にあった。そのため、宮城県では平成15年度から大内地区の自歩道設置工事を進めてきた。平成22年度になって、本遺跡の中央を北西～南東方向に走る国道113号大内自歩道設置工事計画が大河原土木事務所から提示された。そこで、大河原土木事務所、宮城県教育委員会、丸森町教育委員会の３者が対応について協議を行い、遺跡内に係る工事対象域の確認調査を実施することとした。

確認調査は丸森町教育委員会が主体で、宮城県教育委員会が協力した。対象範囲のほぼ中央を農道が横断していることから、北西側をⅠ区、南東側をⅡ区と区分し（第３図）、平成23年１月27日、２月３・４日にⅠ区、平成23年４月18日～４月20日にⅡ区の確認調査を実施した。その結果、Ⅰ区で竪穴住居跡６軒、Ⅱ区北半部で溝跡１条、河川跡２条などを検出した。Ⅱ区の南側約1/3の部分は、自然堆積層のみで、遺構・遺物は確認されなかった。



第３図　調査区の位置

これらの確認調査の結果を受けて、再度大河原土木事務所、宮城県教育委員会、丸森町教育委員会の３者で協議を行ったが、計画変更は困難と判断されたことから、やむをえず遺構が検出された約730㎡の範囲について、宮城県教育委員会が主体となり記録保存を目的とした本発掘調査を実施することとした。

２．調査の経過

発掘調査は平成23年度から24年度にかけて第１表のような経過で行われた。本発掘調査の概要は以下のとおりである。

第１表　調査経過表

	平成23年												平成24年					
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月
確認調査	Ⅰ区			Ⅱ区														
１次調査											ⅠA区			ⅠA区 Ⅱ区				
２次調査															ⅠB区			ⅠA区

(1) 第１次調査（平成23年度）

第１次調査は平成23年11月７日～12月28日と平成24年２月６日～３月16日の期間に分けて行った。なお、調査区は調査の進行上、Ⅰ区中央の湿地より北側をⅠA区、南側をⅠB区と便宜的に区分した。11月７日に調査を開始し、11月28日までに、調査区全体の重機による表土剥ぎとⅠA区、Ⅱ区の遺構検出を終えた。ⅠA区で竪穴住居跡、小溝状遺構群など遺構が多く分布しており、平成23年内はⅠA区を対象に調査を進めた。11月29日から遺構の精査を開始し、厳寒期に入るため12月28日で調査を一時中断し、平成24年２月６日から調査を再開した。大河原土木事務所からの要請でⅡ区から着手し、Ⅱ区終了後にⅠA区の調査に着手した。ⅠA区では約250㎡について精査を行い、竪穴住居跡８軒、掘立柱建物跡２棟、土坑５基、小溝状遺構群１面などを検出した。なお、ⅠA区北部で幅1.5m、長さ４mの深掘区を設定し、基本層Ⅵ層以下について調査したが遺構・遺物は認められなかった。また、Ⅱ区（約125㎡）では、河川跡２条、溝跡１条などを検出した。ⅠA区と比較して古代の遺構の密度が希薄であった。

(2) 第２次調査（平成24年度）

平成24年４月９日にⅠB区（約350㎡）とⅠA区北西部の調査を開始し、ⅠB区では竪穴住居跡６軒、掘立柱建物跡７棟、土坑９基、井戸跡１基、河川１条などを検出した。ⅠA区では、新たに掘立柱建物跡２棟、土坑１基を検出した。６月13日に全ての調査を終了した。

３．調査の方法

調査区や遺構の平面図作成は、調査区周辺の４級基準点（T－11・12）を基準とし、電子平板を利用して行った。基準点の国家座標は例言に示したとおりである。SI11竪穴住居跡の土器出土状況は縮尺1/10、遺構の断面図は縮尺1/20で実測した。写真撮影には35㎜一眼レフデジタルカメラ（1,210万画素）を使用した。

遺構は記録保存のため完掘したが、河川跡については調査区壁・路肩崩落の恐れがあることから、安全を考慮して部分的な断割り調査にとどめた。

第３章　発掘調査

１．基本層序

調査区は遺跡の中央に位置し、標高約26～27ｍの沖積低地に立地する。調査区北西部が最も高く、そこから東南にかけて緩やかに傾斜する。調査区は自歩道設置工事に伴う調査のため北西～南東方向に長く設定されており、長さ約150ｍにわたる。現代の道路建設・開田による切土や耕作により調査区の大半で旧表土（Ⅲ層）が削平されている。Ⅰ区とⅡ区では堆積状況が異なり、ＩＡ・ＩＢ区の境は湿地である。調査地点における層序は概ね以下のとおりである（第４図）。

Ⅰ層：現道建設時や開田時の盛土。厚さは約30～70㎝である。

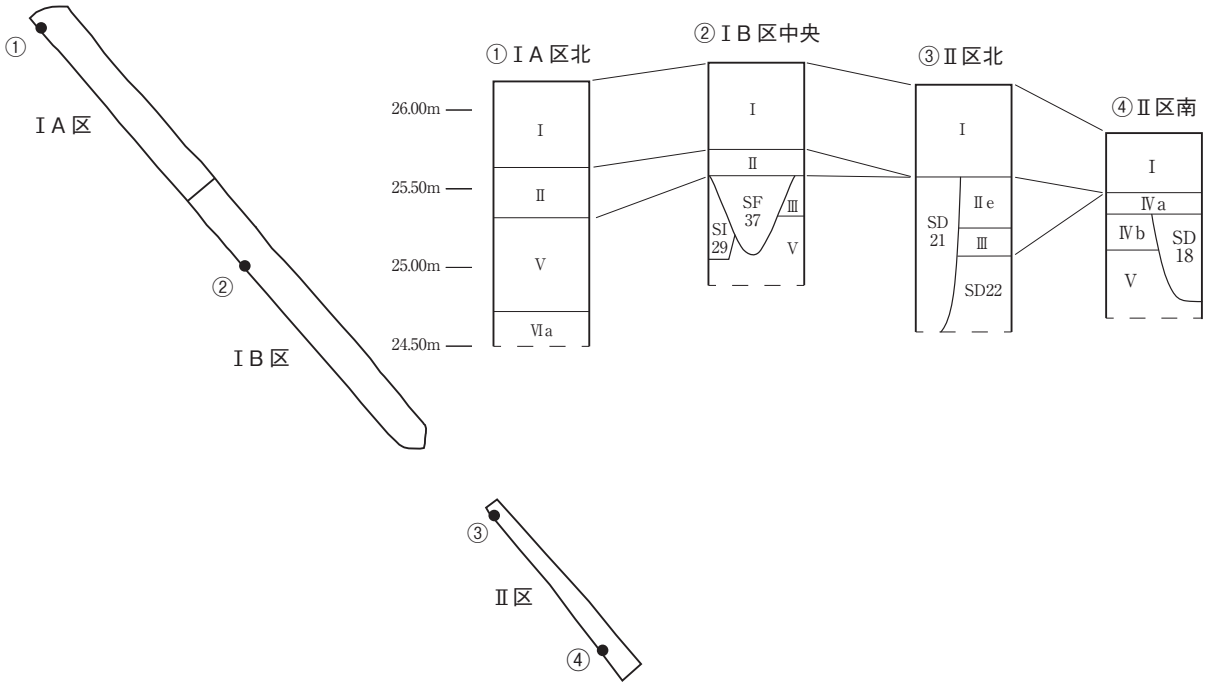
Ⅱ層：盛土直下の堆積層であり、４層に分けられる。Ⅱa層は黄灰色シルト、Ⅱb層は暗灰黄色シルト、Ⅱc層は黄褐色シルト、Ⅱd層は暗褐色シルト・粘土質シルトの旧耕作土、Ⅱe層は暗褐色粘土質シルトでⅡ区北でみられる。

Ⅲ層：暗褐色粘土質シルトの自然堆積層で、中世以降の旧表土である。ＩＢ区とⅡ区の一部で認められたが、それ以外の調査区では後世に削平されて残存していない。厚さは約10～20㎝である。

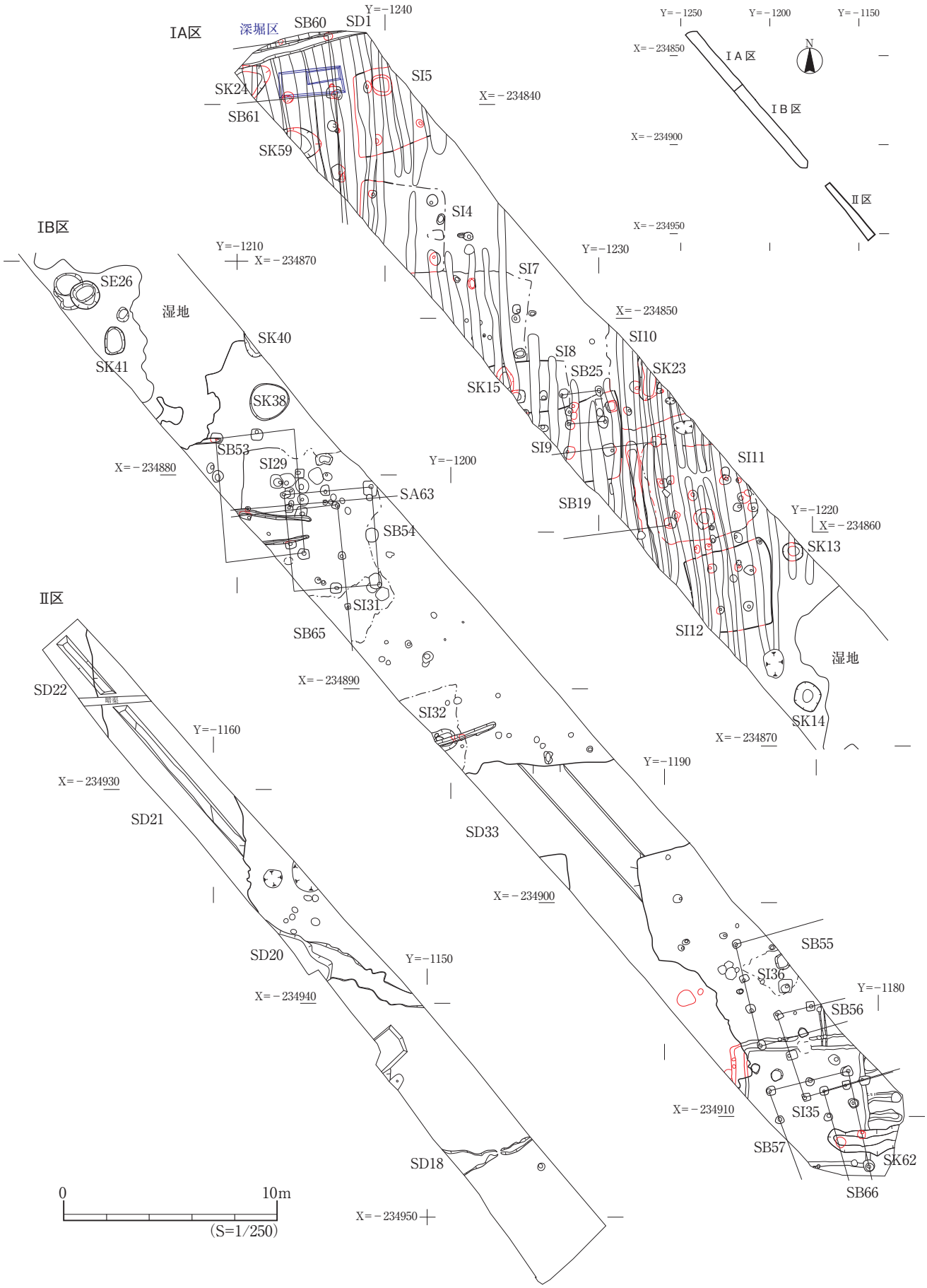
Ⅳ層：にぶい黄褐色シルトで、SD20・22河川跡の氾濫を起源とする層と考えられる。Ⅱ区のみに分布し、２層に分けられる。Ⅳa層は炭化物粒をまばらに含み、Ⅳb層は古代の土師器、須恵器が少量出土する。

Ⅴ層：地山。にぶい黄褐色シルト・粘土質シルトの自然堆積層である。本層上面が遺構確認面である。

Ⅵ層：Ⅴ層以下の自然堆積層をまとめた。地点により異なる。Ⅵa層はにぶい黄褐色粘土質シルトの自然堆積層で、Ⅰ区に分布する。Ⅵb層は暗オリーブ灰土の自然堆積層で、ＩＡ・ＩＢ区境の湿地に分布する。Ⅵc層は灰色粘土の自然堆積層で、Ⅱ区に分布する。



第４図　基本層序


IA区
深堀区
SB60
SD1
Y=−1240
SI5
SK24
SB61
SK59
X=−234840
SI4
IB区
Y=−1210
X=−234870
SE26
湿地
SK41
SK40
SK38
SB53
SI29
X=−234880
Y=−1200
SA63
SB54
SI31
SB65
II区
SD22
Y=−1160
X=−234930
SD21
SD20
Y=−1150
X=−234940
SD18
X=−234950
SI7
SI8
SB25
SK15
SI9
SB19
SI10
SK23
SI11
SI12
Y=−1230
X=−234850
Y=−1220
X=−234860
SK13
湿地
SK14
X=−234870
Y=−1190
SI32
SD33
X=−234900
SB55
SI36
Y=−1180
SB56
X=−234910
SI35
SB57
SK62
SB66
Y=−1250
Y=−1200
Y=−1150
X=−234850
X=−234900
X=−234950
IA区
IB区
II区
N
0
10m
(S=1/250)

第５図　遺構配置図

２．発見された遺構と遺物

検出された遺構には、竪穴住居跡14軒、掘立柱建物跡11棟、溝跡４条、小溝状遺構群２面、河川跡３条、井戸跡１基、土坑15基などがあり（第５図）、出土遺物には土師器、須恵器、中世陶器、かわらけ、漆器、石製品、鉄製品、鉄滓などがある。以下、調査区ごとに記述する。

(1) ＩA区

検出された遺構には、竪穴住居跡８軒、掘立柱建物跡４棟、溝跡１条、小溝状遺構群１面、土坑６基などがあり、土師器、須恵器、石製品、鉄製品などが出土している。以下、主要なものについて説明する。

A．竪穴住居跡

【SI4竪穴住居跡】（第６図）

ＩA区北に位置し、南西側が調査区外に延びる。東半部は床面が削平されており、掘方埋土のみ検出している。

〔重複関係〕SI7竪穴住居跡より新しく、SF2小溝状遺構群より古い。

〔平面形・規模〕全体の平面形は不明であるが、東西3.9m、南北3.8mで隅丸方形とみられる。

〔方向〕西辺でみるとＮ－2°－Ｅである。

〔壁〕西辺と北辺西側で残存している。壁高は最も残りのよい北辺西側で床面から５㎝ある。

〔床面〕西半で残存している。灰黄褐色粘土質シルトの掘方埋土上面を床としている。

〔柱穴〕主柱穴は住居平面形の対角線上にP1～P3の３個を確認している。柱穴掘方は径30～52㎝の円形または不整円形で、深さは２～10㎝である。柱穴掘方埋土は、焼土ブロック、炭化物を含むにぶい黄褐色粘土質シルトである。いずれの柱穴でも柱痕跡を確認しており、径12～14㎝の円形である。柱痕跡の堆積土は焼土粒、炭化物を含む暗褐色・黒褐色粘土質シルトである。

〔カマド〕住居東辺中央に付設されている。燃焼部は底面が痕跡的に残存している。煙道の長さは0.6mで、煙出しピットと煙道の一部を確認している。煙出しピットは径40㎝の円形で、深さは14㎝である。

〔周溝〕検出していない。

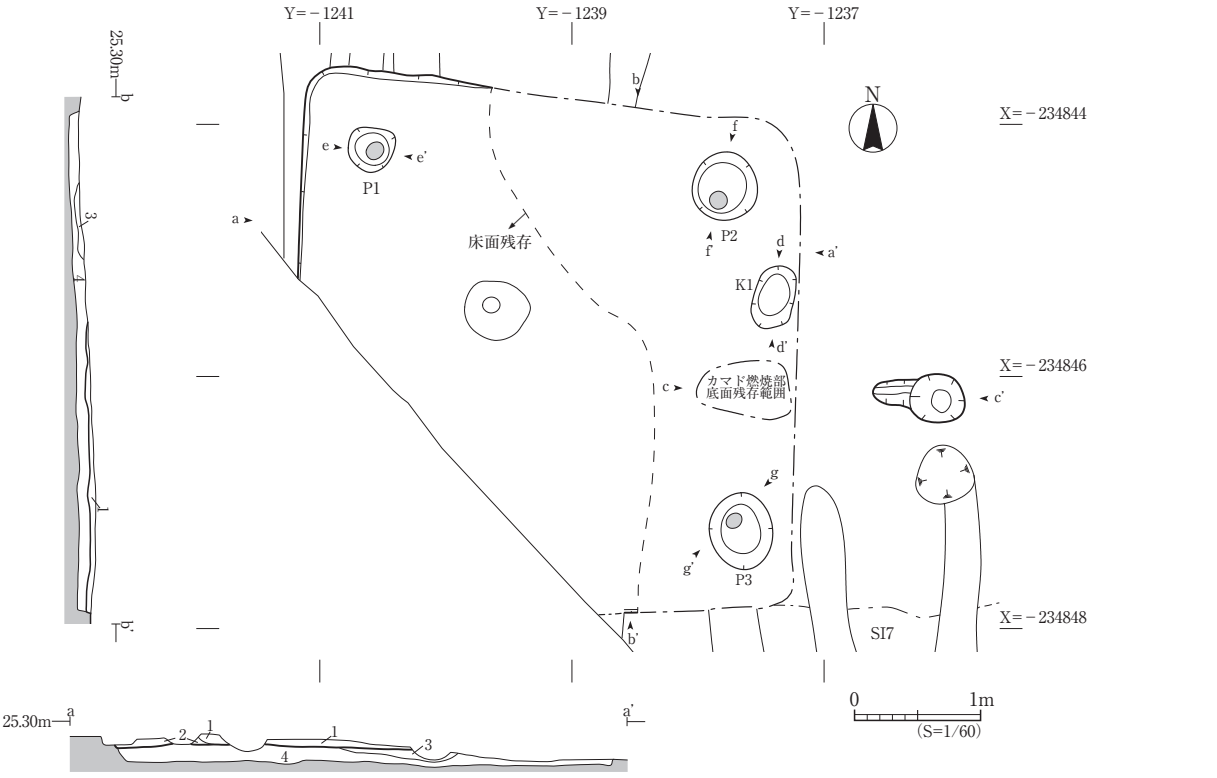
〔貯蔵穴〕カマドの左側に貯蔵穴とみられる土坑K1がある。平面形は長軸43㎝、短軸31㎝の楕円形で、深さは５㎝である。堆積土は焼土、炭化物を含むにぶい黄褐色粘土質シルトで、人為堆積である。

〔堆積土〕２層に分けられ、いずれも自然堆積である。１層は炭化物、一部に焼土ブロックを含むにぶい黄褐色粘土質シルトである。２層は地山小ブロック、炭化物ブロックをわずかに含むにぶい黄褐色粘土質シルトである。

〔出土遺物〕掘方埋土から非ロクロ調整の土師器坏（第６図１）が出土している。その他に床面から非ロクロ調整の土師器坏の破片が出土している。

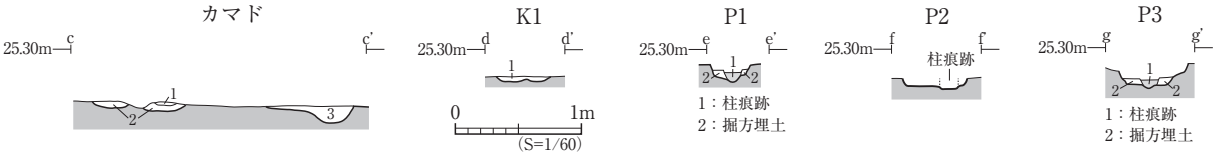
【SI5竪穴住居跡】（第７～９図）

ＩA区北に位置し、北東側が調査区外に延び、南東隅がSF2小溝状遺構群で壊されている。床面は南東隅を除く全面で残存している。



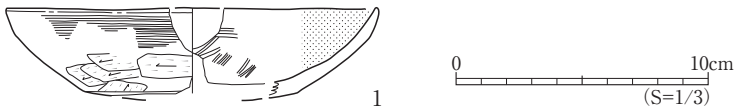
a－a'・b－b'

層	土　色	土　性	備　考
1	にぶい黄褐色（10YR4/3）	粘土質シルト	黄褐色粘土質シルト・炭化物含む。一部に焼土ブロック含む。自然堆積。
2	にぶい黄褐色（10YR4/3）	粘土質シルト	黄褐色粘土質シルト小ブロック・炭化物わずかに含む。自然堆積。
3	灰黄褐色（10YR4/2）	粘土質シルト	焼土小ブロック・炭化物ブロック多く含む。掘方埋土。
4	灰黄褐色（10YR4/2）	粘土質シルト	炭化物多く含む。粘土小ブロックわずかに含む。掘方埋土。



c－c'・d－d'

遺構	層	土　色	土　性	備　考
カマド	1	灰褐色（7.5YR4/2）シルト	シルト	炭化物ブロック・焼土ブロック多く含む。燃焼部機能時の堆積。
	2	にぶい黄褐色（10YR4/3）	粘土質シルト	炭化物粒・焼土ブロック含む。燃焼部機能時の堆積。
	3	暗褐色（10YR3/3）粘	粘土質シルト	炭化物ブロック・焼土粒多く含む。煙道機能時の堆積。
K1	1	にぶい黄褐色（10YR4/3）	粘土質シルト	焼土含む。人為堆積。



No.	器　種	層	法量（cm）			特　徴	残存	写真	登録番号
			口径	底径	器高				
1	土師器　坏	掘方埋土	(14.8)	—	—	外：ヨコナデ・ヘラケズリ　内：ヘラミガキ＋黒色処理　磨滅激しい	一部	8－1	Po1

第６図　SI4竪穴住居跡と出土土器

〔重複関係〕SF2小溝状遺構群より古い。

〔平面形・規模〕全体の平面形は不明であるが、東西3.5m以上、南北約3.9mで、不整な方形とみられる。

〔方向〕西辺でみるとN－4°－W、南辺でみるとE－16°－Nである。

〔壁〕西辺・北辺・南辺で一部残存しており、ほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は最も残りのよい南辺中央で床面から12㎝ある。

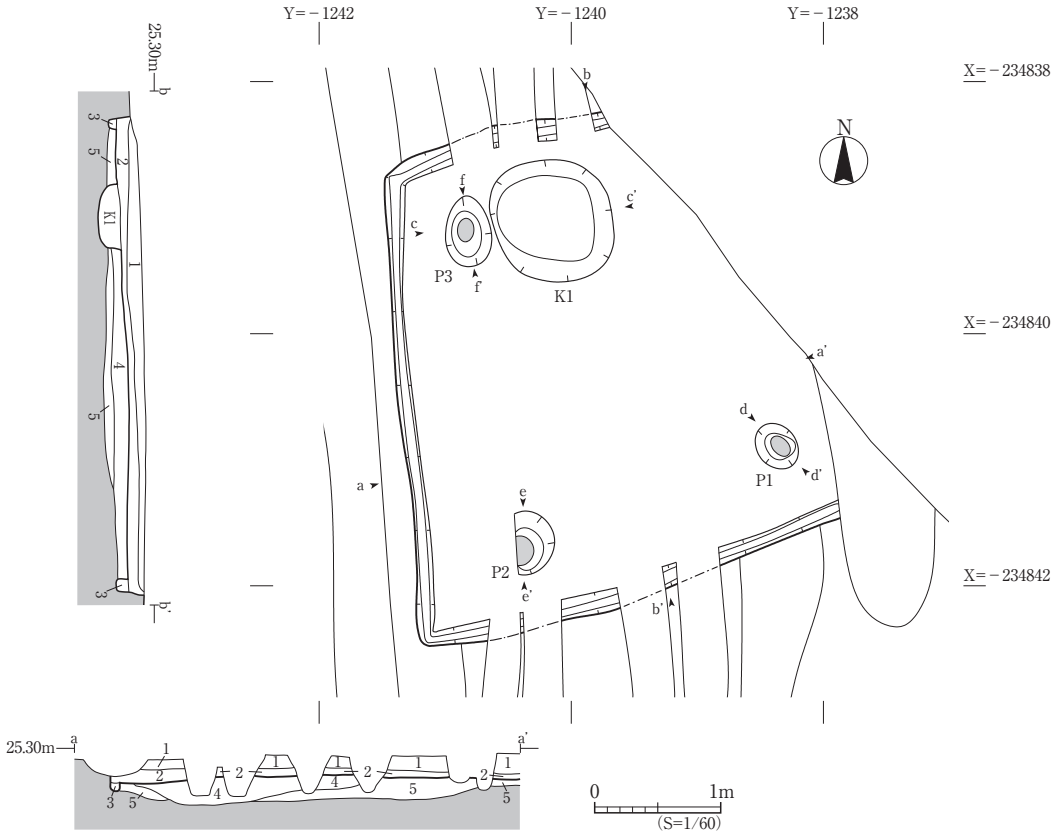
〔床面〕白色粘土ブロック、炭化物ブロックを含む暗褐色粘土質シルトの掘方埋土上面を床としてい

る。床面は北側がやや低く、中央から北側に緩やかに傾斜している。

〔柱穴〕主柱穴は住居平面形の対角線上にP1～P3の３個を確認している。柱穴堀方は径38～50㎝の円形または楕円形状である。柱穴掘方埋土は地山ブロック、白色粘土ブロック、炭化物粒を含む暗褐色粘土質シルトである。いずれの柱穴でも柱痕跡を確認しており、径16～18㎝の円形である。柱痕跡の堆積土は地山ブロック、白色粘土ブロックをわずかに含む暗褐色粘土質シルトである。

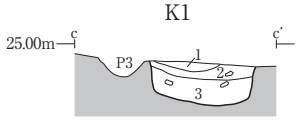
〔カマド〕不明である。

〔周溝〕各辺で確認している。上幅９～10㎝、下幅５～12㎝、深さ８～12㎝で、断面形はＵ字状である。堆積土は地山ブロックを多く含む暗褐色粘土質シルトで、人為堆積である。



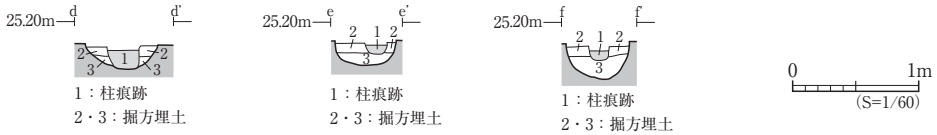
a－a'・b－b'

層	土　色	土　性	備　考
1	暗褐色（10YR3/3）	粘土質シルト	焼土粒少量含む。自然堆積。
2	暗褐色（10YR3/4）	シルト質粘土	地山ブロック含む。白色粘土ブロック少量含む。焼土粒まばらに含む。自然堆積。
3	暗褐色（10YR3/3）	粘土質シルト	地山ブロック多く含む。周溝堆積土。人為堆積。
4	暗褐色（10YR3/4）	粘土質シルト	白色粘土ブロック・炭化物ブロック多く含む。地山ブロック・焼土ブロック含む。掘方埋土。
5	暗褐色（10YR3/3）	シルト質粘土	地山ブロック多く含む。白色粘土ブロックまばらに含む。掘方埋土。



K1（c－c'）

層	土　色	土　性	備　考
1	暗褐色（10YR3/3）	シルト	白色粘土粒・炭化物少量含む。自然堆積。
2	黒褐色（10YR3/2）	粘土質シルト	炭化物多く含む。比熱した粘土ブロック（カマド構築土か）含む。人為堆積。
3	暗褐色（10YR3/4）	粘土質シルト	炭化物・白色粘土ブロック少量含む。人為堆積。



1：柱痕跡
2・3：掘方埋土

1：柱痕跡
2・3：掘方埋土

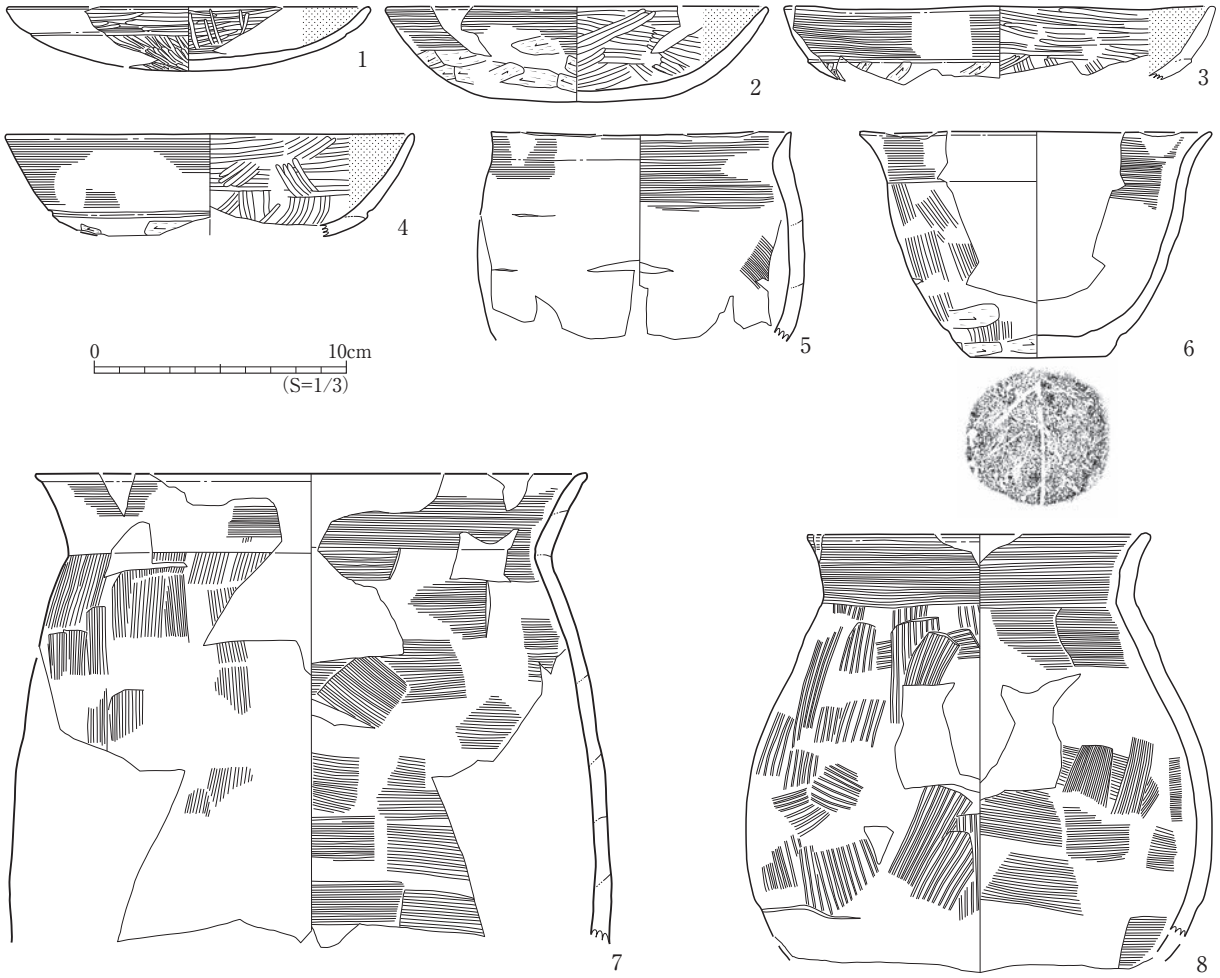
1：柱痕跡
2・3：掘方埋土

第７図　SI5竪穴住居跡

〔その他の施設〕北側中央で土坑K1を確認している。径86cmの不整円形で、深さは床面から36cmである。堆積土は３層に分けられ、１層は自然堆積、２・３層は人為堆積である。１層は白色粘土粒、炭化物を少量含む暗褐色シルトである。２層は炭化物を多く含み、カマド構築土とみられる被熱した粘土ブロックを含む黒褐色粘土質シルトである。３層は炭化物、白色粘土ブロックを少量含む暗褐色粘土質シルトである。

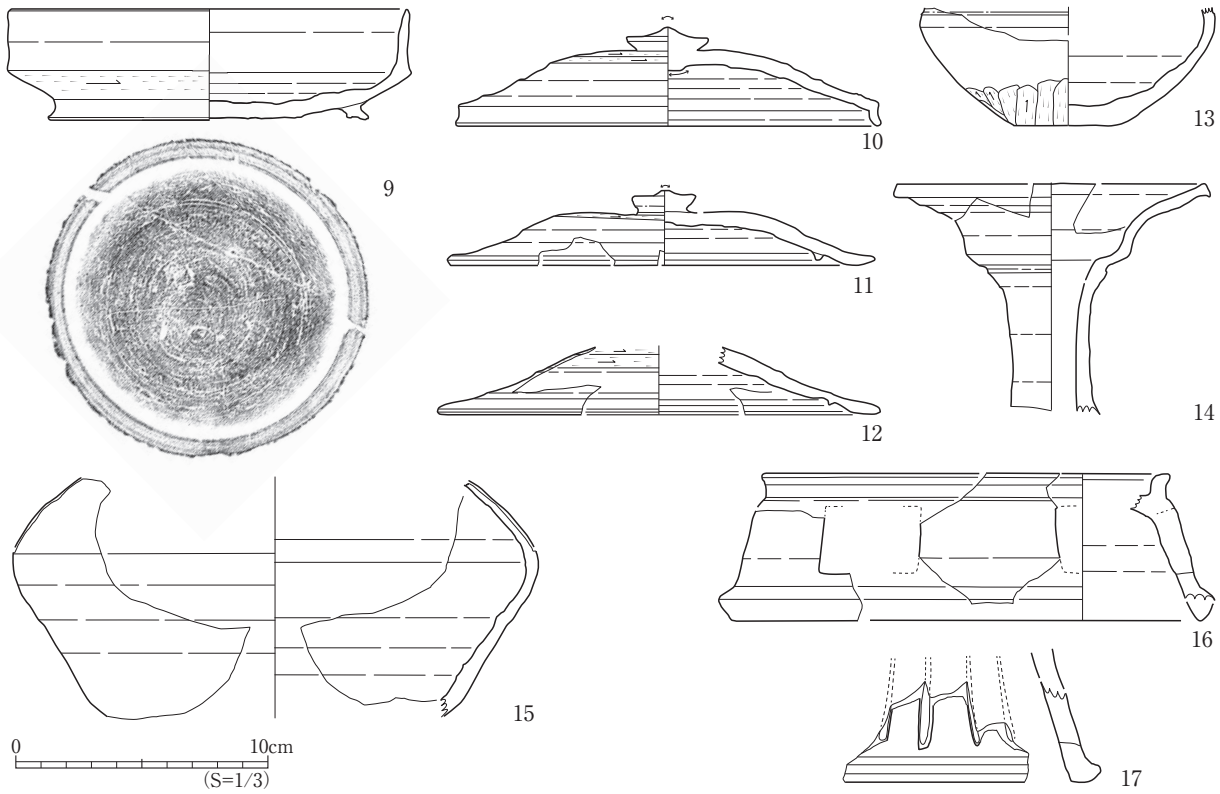
〔堆積土〕２層に分けられ、いずれも自然堆積である。１層は焼土粒を少量含む暗褐色粘土質シルトである。２層は白色粘土、地山ブロック、焼土粒を含む暗褐色シルト質粘土である。

〔出土遺物〕堆積土から非ロクロ調整の土師器坏（第８図１～３）・鉢（第８図５・６）、須恵器高台坏（第９図９）・蓋（第９図10・12）・壺（第９図13）・甕（第９図14）・円面硯（第９図16）、K1堆積土から非ロクロ調整の土師器甕（第８図７・８）、須恵器壺（第９図15）、掘方埋土から非ロクロ調整の土師器坏（第８図４）、須恵器蓋（第９図11）・円面硯（第９図17）が出土している。



No.	器　種	層	法量（cm）			特　徴	残存	写真	登録番号
			口径	底径	器高				
1	土師器　坏	堆積土	(14.5)	—	(2.6)	外：ヨコナデ・ヘラケズリ→ヘラミガキ　内：ヘラミガキ＋黒色処理	1/4	8－4	Po2
2	土師器　坏	堆積土	(15.1)	—	(3.8)	外：ヨコナデ→ヘラケズリ　内：ヘラミガキ＋黒色処理	1/2	8－5	Po3
3	土師器　坏	堆積土	(17.1)	—	—	外：ヨコナデ→ヘラケズリ　内：ヘラミガキ＋黒色処理	一部	8－3	Po4
4	土師器　坏	掘方埋土	(16.2)	—	—	外：ヨコナデ・ヘラケズリ　内：ヘラミガキ＋黒色処理	一部	8－2	Po5
5	土師器　鉢	堆積土	11.9	—	—	外：(口) ヨコナデ　(体) 磨滅激しい　内：ヨコナデ・ヘラナデ	一部	8－7	Po7
6	土師器　鉢	堆積土	(13.9)	5.4	9.0	外：(口) ヨコナデ　(体) ハケメ→ヘラケズリ　底面：木葉痕あり　内：ヨコナデ	1/5	8－6	Po6
7	土師器　甕	K1堆積土	(21.8)	—	—	外：ハケメ→ヨコナデ　内：ヨコナデ・ヘラナデ	一部	8－8	Po9
8	土師器　甕	K1堆積土	(13.5)	—	—	外：ハケメ→ヨコナデ　内：ヨコナデ→ヘラナデ	一部	8－9	Po8

第８図　SI5竪穴住居跡出土土器（1）



No.	器種	層	法量（cm）			特徴	残存	写真	登録番号
			口径	底径	器高				
9	須恵器　高台坏	堆積土	16.0	12.7	4.4	外：ロクロナデ→回転ヘラケズリ→高台貼付→ロクロナデ　底面：切り離し不明、ヘラ記号「×」 内：ロクロナデ→底部ナデ	7/8	8－10	Po10
10	須恵器　蓋	堆積土	16.8	—	3.9	外：ロクロナデ→回転ヘラケズリ→つまみ貼付→ロクロナデ　内：ロクロナデ つまみ頂部・天井部内面に使用痕あり	1/2	8－11	Po11
11	須恵器　蓋	掘方埋土	(16.9)	—	3.0	外：ロクロナデ→回転ヘラケズリ→つまみ貼付→ロクロナデ　内：ロクロナデ→カエリ貼付→ロクロナデ　つまみ頂部に使用痕あり、重ね焼き痕跡あり	1/4	8－12	Po12
12	須恵器　蓋	堆積土	(19.6)	—	—	外：ロクロナデ→回転ヘラケズリ　内：ロクロナデ→カエリ貼付→ロクロナデ　重ね焼き痕跡あり	一部	8－13	Po13
13	須恵器　壺	堆積土	—	4..2	—	外：ロクロナデ→手持ちヘラケズリ、横位沈線　底面：切り離し不明　内：ロクロナデ	一部	8－14	Po14
14	須恵器　甕	堆積土	(12.2)	—	—	外：ロクロナデ→横位沈線　内：ロクロナデ	一部	8－15	Po16
15	須恵器　壺	K1堆積土	—	—	—	内外：ロクロナデ	一部	8－16	Po15
16	須恵器　円面硯	堆積土	(16.1)	(18.6)	(5.8)	内外：ロクロナデ→方形の透かし（６単位）	一部	8－17	Po17
17	須恵器　円面硯	掘方埋土	—	—	—	内外：ロクロナデ→縦位の細長い透かし	一部	8－18	Po18

第９図　SI5竪穴住居跡出土土器（2）

【SI7竪穴住居跡】（第10図）

ＩＡ区中央に位置し、西側が調査区外に延びる。北西部をSI4竪穴住居跡、南側をSI8竪穴住居跡に壊されている。床面は削平されており、掘方埋土のみ検出している。

〔重複関係〕SI4・SI8竪穴住居跡、SF2小溝状遺構群より古い。

〔平面形・規模〕全体の平面形は不明である。規模は東西5.5m以上、南北4.4m以上である。

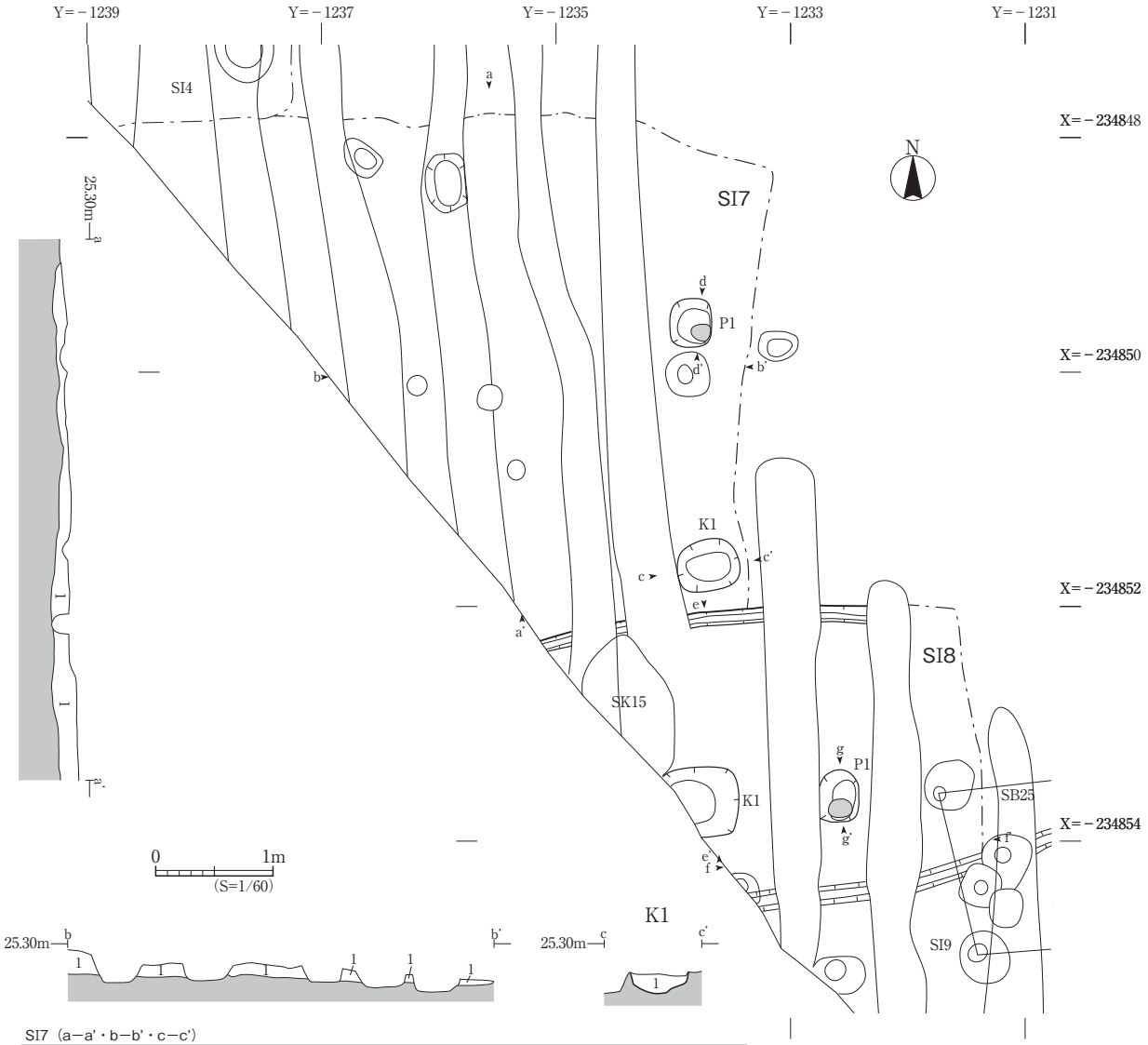
〔方向〕不明である。

〔床面〕床面は残存しておらず、にぶい黄褐色粘土質シルトの掘方埋土のみ残存している。

〔柱穴〕柱穴P1を住居北東部で確認している。柱穴掘方は直径約40cmの不整円形である。柱穴掘方埋土は炭化物粒、白色粘土ブロックを含むにぶい黄褐色粘土質シルトである。柱痕跡は直径16cmの円形である。柱痕跡の堆積土は焼土、炭化物を含む暗褐色粘土質シルトである。

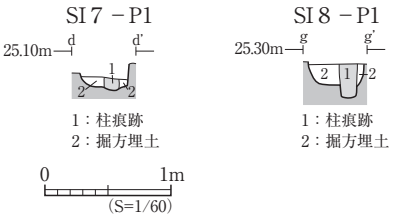
〔カマド〕不明である。

〔その他の施設〕東南隅で土坑K1を確認している。K1は長軸52cm、短軸42cmの楕円形で、深さは20cm

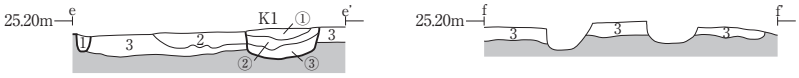


SI7（a－a'・b－b'・c－c'）

遺構		層	土　色	土　性	備　考
SI7		1	にぶい黄褐色（10YR4/3）	粘土質シルト	炭化物粒・黒褐色土小ブロック含む。掘方埋土。
	K1	1	灰黄褐色（10YR4/2）	シルト質粘土	焼土小ブロック・炭化物粒わずかに含む。自然堆積。



SI 8



SI8（e－e'・f－f'）

遺構		層	土　色	土　性	備　考
SI8		1	暗褐色（10YR3/4）	粘土質シルト	地山小ブロック・炭化物粒・焼土粒含む。周溝内堆積土。人為堆積。
		2	暗褐色（10YR3/3）	粘土質シルト	地山小ブロック・焼土ブロック含む。炭化物少量含む。掘方埋土。
		3	暗褐色（10YR3/4）	粘土質シルト	地山小ブロック多く含む。焼土ブロック・炭化物粒少量含む。下部に白色粘土ブロック含む。掘方埋土。
	K1	①	黒褐色（10YR3/2）	粘土質シルト	地山小ブロック多く含む。焼土粒含む。人為堆積。
		②	暗褐色（10YR3/3）	粘土質シルト	炭化物ブロック多く含む。人為堆積。
		③	暗褐色（10YR3/3）	粘土質シルト	地山小ブロック・炭化物含む。人為堆積。

No.	器　種	遺構・層	法量（cm）			特　徴	残存	写真	登録番号
			口径	底径	器高				
1	土師器　坏	SI7・P1柱痕跡	(15.8)	—	(4.5)	外：(口) ヨコナデ　(体下～底) ヘラケズリ→ヘラミガキ　内：ヘラミガキ＋黒色処理	1/4	9－1	Po19
2	須恵器　盤	SI8・掘方埋土	(15.8)	—	—	外：ロクロナデ→回転ケズリ　内：ロクロナデ	一部	9－2	Po20

第10図　SI7・8竪穴住居跡と出土土器

である。堆積土は焼土粒、炭化物を少量含む灰黄褐色シルト質粘土で、人為堆積である。

〔出土遺物〕P1の柱痕跡から非ロクロ調整の土師器坏（第10図１）が出土している。

【SI8竪穴住居跡】（第10図）

ＩＡ区中央に位置し、西側が調査区外に延びる。南側をSI9竪穴住居跡に壊されている。床面は削平されており、掘方埋土のみ検出している。

〔重複関係〕SI7竪穴住居跡より新しく、SI9竪穴住居跡、SK15土坑、SF2小溝状遺構群より古い。

〔平面形・規模〕全体の平面形は不明である。規模は東西3.5m以上、南北2.1m以上である。

〔方向〕北辺でみるとE－5°－Nである。

〔床面〕床面は残存しておらず、暗褐色粘土質シルトの掘方埋土のみ残存している。

〔柱穴〕主柱穴とみられる柱穴P1を住居北東部で確認している。柱穴堀方は長軸44cm、短軸33cmの不整楕円形で、深さは28cmである。柱穴堀方埋土は地山小ブロックを含み、焼土粒を少量含む暗褐色粘土質シルトである。柱痕跡は径18cmの円形である。柱痕跡の堆積土は地山小ブロック、白色粘土ブロックを少量含む暗褐色粘土質シルトである。

〔カマド〕不明である。

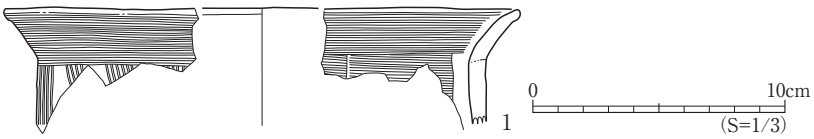
〔周溝〕北辺で確認している。上幅11～15cm、下幅４～６cm、深さ７～13cmで、断面形はＵ字状である。堆積土は地山小ブロック、炭化物粒、焼土粒を含む暗褐色粘土質シルトで、人為堆積である。

〔その他の施設〕西側中央で土坑Ｋ1を確認している。西側が調査区外に延びるが、楕円形状とみられ、長軸65cm以上、短軸60cmで、深さは床面から30cmである。堆積土は３層に分けられ、いずれも人為堆積である。１層は地山小ブロックを多く含む黒褐色粘土質シルト、２・３層は炭化物を含む暗褐色粘土質シルトである。

〔出土遺物〕掘方埋土から須恵器盤（第10図２）が出土している他、非ロクロ調整の土師器坏・高坏、内面にカエリのある須恵器蓋などの破片が出土している。

【SI9竪穴住居跡】（第11・12図）

ＩＡ区中央に位置し、西側が調査区外に延びる。北東部で床面が削平されている。



No.	器種	層	法量（cm）			特徴	残存	写真	登録番号
			口径	底径	器高				
1	土師器　甕	K1堆積土	(20.5)	—	—	外：ハケメ→ヨコナデ　内：ヨコナデ・ヘラナデ	一部	9－3	Po21

第11図　SI9竪穴住居跡出土土器

〔重複関係〕SI8・10竪穴住居跡より新しく、SB19・25掘立柱建物跡、SF2小溝状遺構群より古い。

〔平面形・規模〕全体の平面形は不明である。東西4.3m以上、南北約4.1mである。

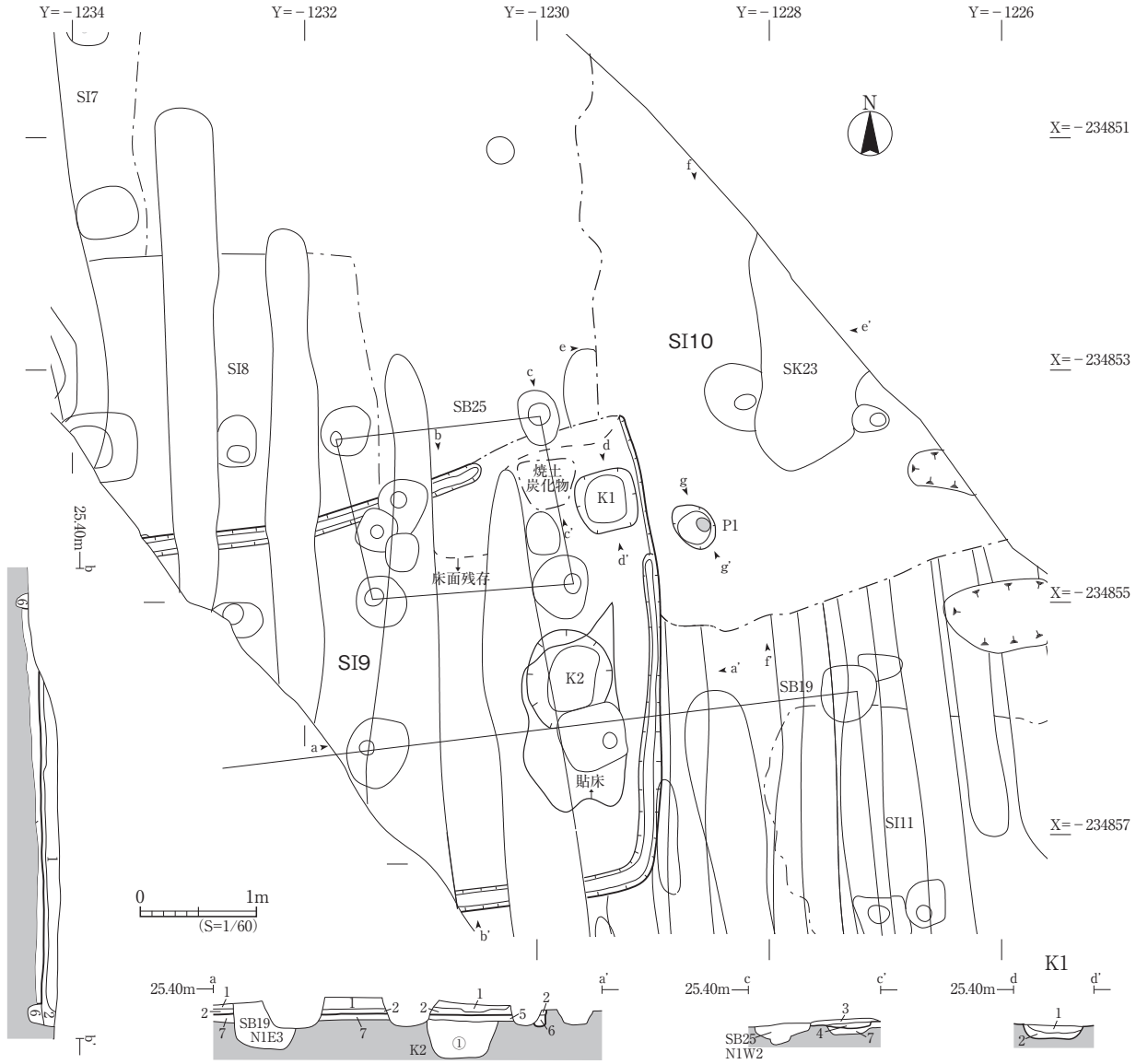
〔方向〕東辺でみるとＮ－6°－Ｗである。

〔壁〕東辺と南辺の一部で残存している。壁高は最も残りのよい南辺西側で床面から９cmある。

〔床面〕暗褐色粘土質シルトの掘方埋土上面を床としている。K2の上面付近で一部貼床されている。

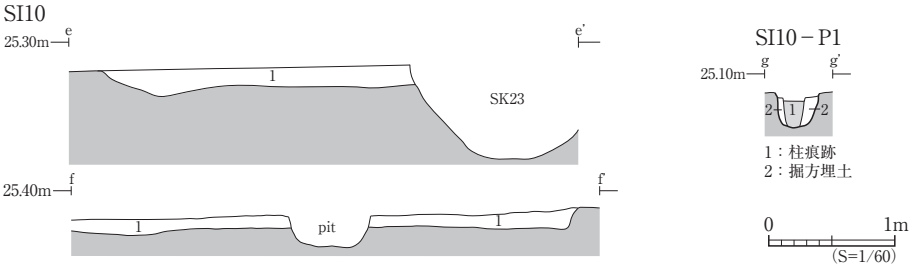
〔主柱穴〕検出していない。

〔カマド〕住居北辺の東寄りに付設されていたものとみられる。燃焼部に堆積したとみられる焼土・



SI9（a－a'・b－b'・c－c'・d－d'）

遺構		層	土　色	土　性	備　考
SI9		1	暗褐色（10YR3/4）	粘土質シルト	地山ブロック含む。焼土粒・炭化物粒まばらに含む。自然堆積。
		2	暗褐色（10YR3/4）	粘土質シルト	地山ブロック多く含む。自然堆積。
		3	暗褐色（10YR3/4）	粘土質シルト	地山小ブロック・焼土ブロック多く含む。自然堆積。
		4	暗褐色（10YR3/3）	粘土質シルト	焼土ブロック・炭化物多く含む。地山小ブロック含む。カマド機能時堆積か。
		5	灰黄褐色（10YR5/2）	粘土	地山ブロック・焼土粒・炭化物粒少量含む。しまりあり。貼床。
		6	暗褐色（10YR3/3）	粘土質シルト	地山ブロック多く含む。周溝内堆積土。人為堆積。
		7	暗褐色（10YR3/3）	粘土質シルト	地山ブロック多く含む。白色粘土小ブロック・炭化物極少量含む。掘方埋土。
	K2	①	暗褐色（10YR3/3）	粘土質シルト	地山ブロック多く含む。白色粘土ブロック・炭化物少量含む。人為堆積。
	K1	1	暗褐色（7.5YR3/3）	粘土質シルト	炭化物ブロック・焼土ブロック含む。人為堆積。
		2	暗褐色（10YR3/3）	粘土質シルト	焼土粒含む。人為堆積。



SI10（e－e'・f－f'）

遺構	層	土　色	土　性	備　考
SI10	1	暗褐色（10YR3/3）	粘土質シルト	白色粘土ブロック含む。炭化物わずかに含む。掘方埋土。

第12図　SI9・10竪穴住居跡

炭化物粒の薄層の分布のみを確認している。底面は浅く窪む。顕著な焼面は認められない。

〔貯蔵穴〕住居北東隅に貯蔵穴とみられる土坑K1を確認している。平面形は一辺が52㎝の隅丸方形で、深さは13㎝である。堆積土は２層に分けられ、いずれも人為堆積である。１層は炭化物ブロック、焼土ブロックを含む暗褐色粘土質シルトである。２層は焼土粒を含む暗褐色粘土質シルトである。

〔周溝〕南辺・北辺・東辺の一部で確認している。上幅14～16㎝、下幅６～20㎝、深さ６～14㎝で、断面形はU字状である。堆積土は地山ブロックを多く含む暗褐色粘土質シルトで、人為堆積である。

〔その他の施設〕住居東南部の貼床の下で土坑K2を確認している。平面形は長軸83㎝以上、短軸73㎝の楕円形で、深さは33㎝である。堆積土は地山ブロックを多く含み、炭化物をまばらに含む暗褐色粘土質シルトで、人為堆積である。

〔堆積土〕２層に分けられ、いずれも自然堆積である。１層は地山ブロックを含み、焼土粒、炭化物粒をまばらに含む暗褐色粘土質シルト、２層は地山ブロックを多く含む暗褐色粘土質シルトである。

〔出土遺物〕K1堆積土から非ロクロ調整の土師器甕（第11図１）・無底式の甑が出土している。その他に、床面直上から非ロクロ調整の土師器坏の破片が出土している。

【SI10竪穴住居跡】（第12図）

ⅠA区南に位置し、北東側が調査区外に延びる。床面は削平されており、掘方埋土のみ検出している。

〔重複関係〕SI9竪穴住居跡、SF2小溝状遺構群、SK23土坑より古い。

〔平面形・規模〕全体の平面形は不明である。東西3.3m以上、南北5.1m以上である。

〔方向〕不明である。

〔床面〕床面は残存しておらず、白色粘土ブロックを含み、炭化物をわずかに含む暗褐色粘土質シルトの掘方埋土のみ残存している。

〔柱穴〕主柱穴とみられる柱穴P1を住居南西部で確認している。柱穴掘方は長軸43㎝、短軸32㎝の楕円形である。柱穴掘方埋土は、白色粘土ブロックを多く含む暗褐色粘土質シルトである。柱痕跡は径16㎝の円形である。柱痕跡の堆積土は白色粘土ブロックを含み、炭化物粒をわずかに含む暗褐色粘土質シルトである。

〔カマド〕不明である。

〔出土遺物〕掘方埋土から土師器、須恵器の小破片が少量出土している。

【SI11竪穴住居跡】（第13・14図）

ⅠA区南に位置し、北東側が調査区外に延びる。床面は削平されており、掘方埋土のみ検出している。

〔重複関係〕SB19掘立柱建物跡、SF2小溝状遺構群より古い。

〔平面形・規模〕東西約4.7m、南北約4.6mで、隅丸方形とみられる。

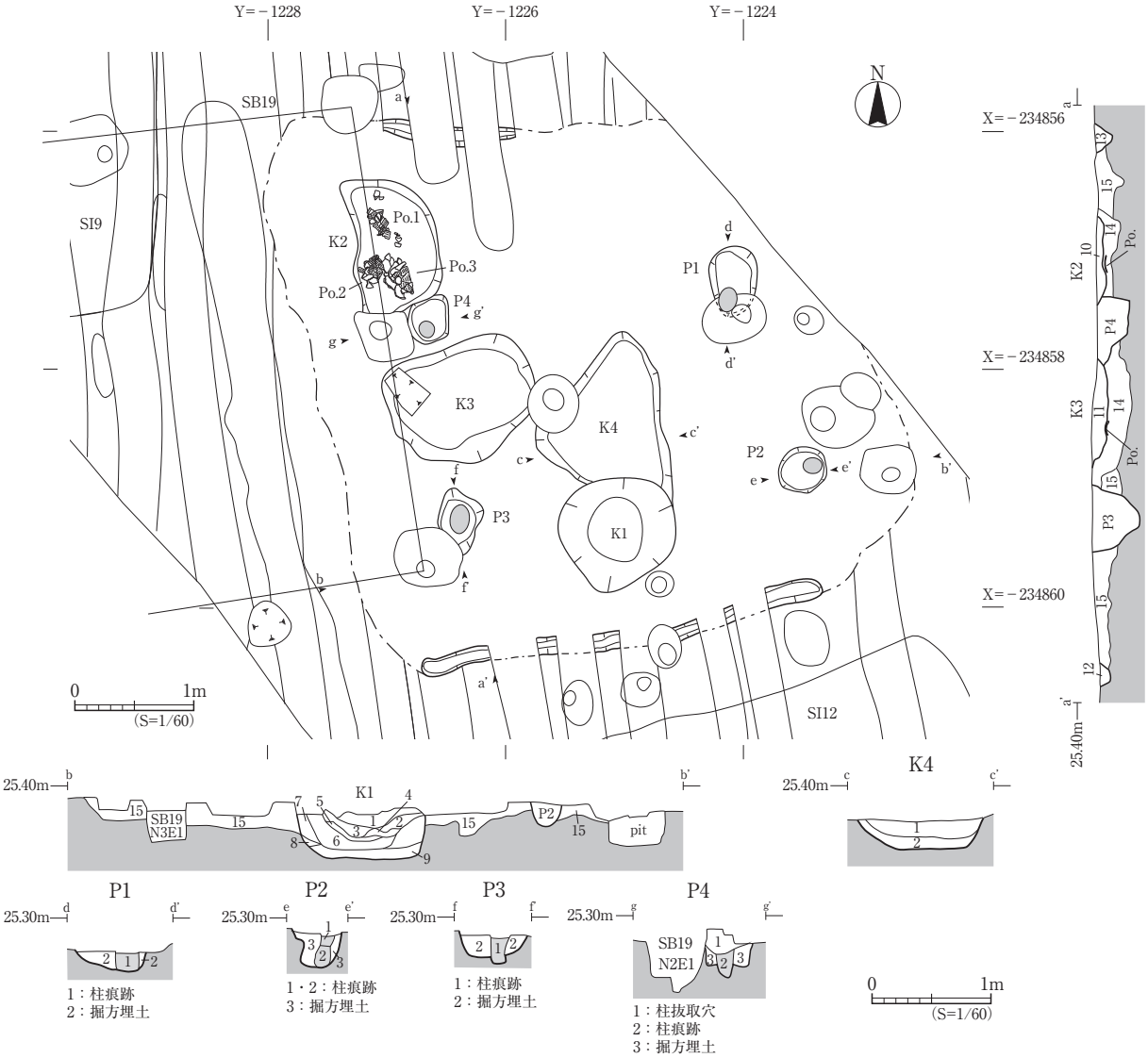
〔方向〕不明である。

〔床面〕床面は残存しておらず、掘方埋土のみ残存している。掘方埋土は２層に分けられ、１層はにぶい黄橙色粘土質シルト小ブロックを多量に含み、炭化物をわずかに含むにぶい黄褐色粘土質シルト、２層は地山ブロックをやや多く含む褐色粘土質シルトである。

〔柱穴〕主柱穴は住居対角線上にP1～P4を確認している。柱穴掘方は径36～60㎝の不整円形である。

柱穴掘方埋土は地山小ブロックを多く含む灰黄褐色・にぶい黄褐色粘土質シルトである。いずれの柱穴でも柱痕跡を確認しており、径14～18cmの円形である。柱痕跡の堆積土は地山小ブロック、炭化物粒、焼土粒をわずかに含むにぶい黄褐色粘土質シルトである。

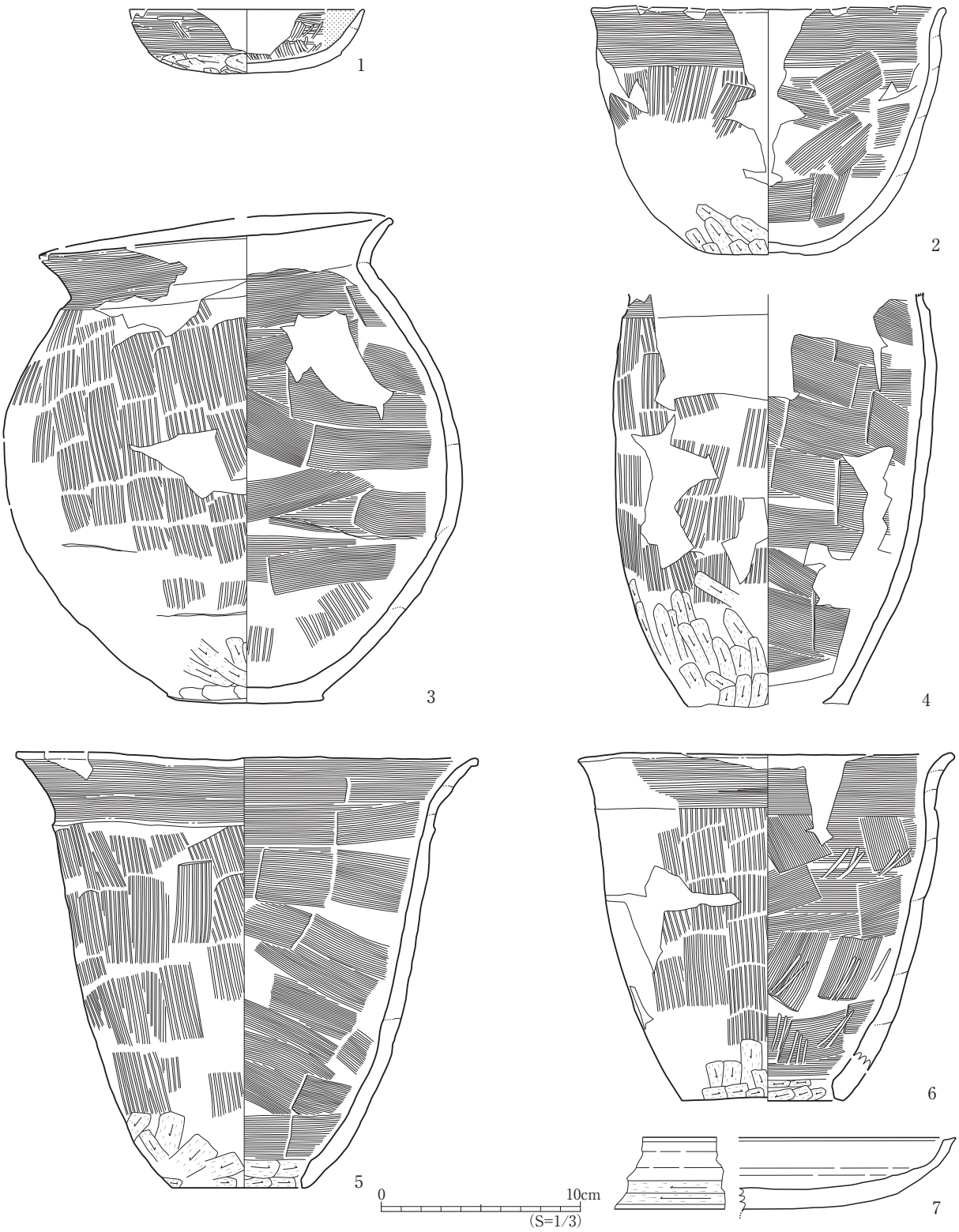
〔カマド〕不明である。



a－a'・b－b'・c－c'

遺構		層	土　色	土　性	備　考
SI11	K1	1	暗褐色（10YR3/3）	粘土質シルト	炭化物・焼土小ブロックわずかに含む。自然堆積。
		2	黒褐色（10YR3/2）	粘土質シルト	焼土ブロック多く含む。炭化物含む。自然堆積。
		3	暗褐色（10YR3/3）	粘土質シルト	炭化物・焼土小ブロックわずかに含む。自然堆積。
		4	暗褐色（10YR3/4）	粘土質シルト	炭化物・焼土小ブロックわずかに含む。自然堆積。
		5	暗褐色（10YR3/3）	粘土質シルト	炭化物・焼土小ブロック含む。自然堆積。
		6	暗褐色（10YR3/4）	粘土質シルト	しまりややあり。自然堆積。
		7	にぶい黄褐色（10YR4/3）	粘土質シルト	灰黄褐色粘土質シルト多く含む。炭化物粒含む。自然堆積。
		8	にぶい黄褐色（10YR4/3）	粘土質シルト	灰黄褐色粘土質シルト小ブロック少量含む。自然堆積。
		9	灰黄褐色（10YR4/2）	粘土質シルト	地山小ブロックやや多く含む。炭化物粒少量含む。自然堆積。
	K2	10	暗褐色（10YR3/2）	粘土質シルト	炭化物片・小礫含む。自然堆積。
	K3	11	暗褐色（10YR3/3）	粘土質シルト	炭化物片・焼土粒・焼けた小礫やや多く含む。自然堆積。
		12	灰黄褐色（10YR4/2）	粘土質シルト	地山小ブロック含む。周溝堆積土。人為堆積か。
		13	灰黄褐色（10YR4/2）	粘土質シルト	地山小ブロック・炭化物片含む。周溝堆積土。人為堆積か。
		14	にぶい黄褐色（10YR4/3）	粘土質シルト	にぶい黄橙色粘土質シルト小ブロック多量に含む。炭化物粒わずかに含む。掘方埋土。
		15	褐色（10YR4/4）	粘土質シルト	地山ブロックやや多く含む。掘方埋土。
	K4	1	暗褐色（10YR3/3）	粘土質シルト	灰白色粘土小ブロック少量含む。人為堆積。
		2	にぶい黄褐色（10YR4/3）	粘土質シルト	灰白色粘土小ブロックわずかに含む。人為堆積。

第13図　SI11竪穴住居跡



No.	器種	層	法量（cm）			特　徴	残存	写真	登録番号
			口径	底径	器高				
1	土師器　坏	K3堆積土	(11.8)	—	(3.2)	外：ヨコナデ→ヘラケズリ→ヘラミガキ　内：ヘラミガキ+黒色処理	1/2	9－4	Po22
2	土師器　鉢	掘方埋土	(17.6)	(5.0)	(12.4)	外：(口) ヨコナデ（体）ハケメ・ヘラケズリ　内：ヨコナデ→ヘラナデ	1/4	9－5	Po23
3	土師器　甕	K3堆積土	(17.9)	7.5	24.7	外：(口) ヨコナデ（胴）ハケメ→ヘラケズリ　内：(口) ヨコナデ（胴）ハケメ→ヘラナデ	7/8	9－7	Po24
4	土師器　甕	K2堆積土	—	—	—	外：(口) ヨコナデ（胴）ハケメ→ヘラケズリ　内：ヘラナデ　Po.2	一部	9－6	Po25
5	土師器　甑	K2堆積土	23.0	7.3	21.9	外：(口) ヨコナデ（胴）ハケメ→ヘラケズリ　内：(口) ヨコナデ（胴）ヘラナデ→ヘラケズリ　Po.3	完形	9－8	Po26
6	土師器　甑	K2堆積土	18.7	8.1	17.3	外：(口) ヨコナデ（胴）ハケメ→ヘラケズリ　内：(口) ヨコナデ（胴）ヘラナデ→ヘラケズリ・ヘラミガキ　Po.1	9/10	9－9	Po27
7	須恵器　高盤	P4柱痕跡	—	—	—	外：ロクロナデ→回転ケズリ→脚部貼付→ロクロナデ　内：ロクロナデ	一部	9－10	Po28

第14図　SI11竪穴住居跡出土土器

〔周溝〕北辺・南辺の一部で確認している。上幅14～24cm、下幅６～10cm、深さ６～15cmで、断面形はＵ字状である。堆積土は地山小ブロックを含む灰黄褐色粘土質シルトで、人為堆積とみられる。

〔その他の施設〕南側中央で土坑K1・K4、北西部で土坑K2・K3を確認している。

K1は径約101cmの不整円形で、深さは42cmである。断面形は逆台形状である。堆積土は９層に分けられ、いずれも自然堆積である。１～６層は焼土、炭化物を含む暗褐色粘土質シルト、７～９層は地山ブロックを含むにぶい黄褐色・灰黄褐色粘土質シルトである。

K2は長軸113cm、短軸60cmの不整楕円形で、深さは９cmである。断面形は皿状である。堆積土は炭化物片、小礫を含む暗褐色粘土質シルトで、自然堆積である。

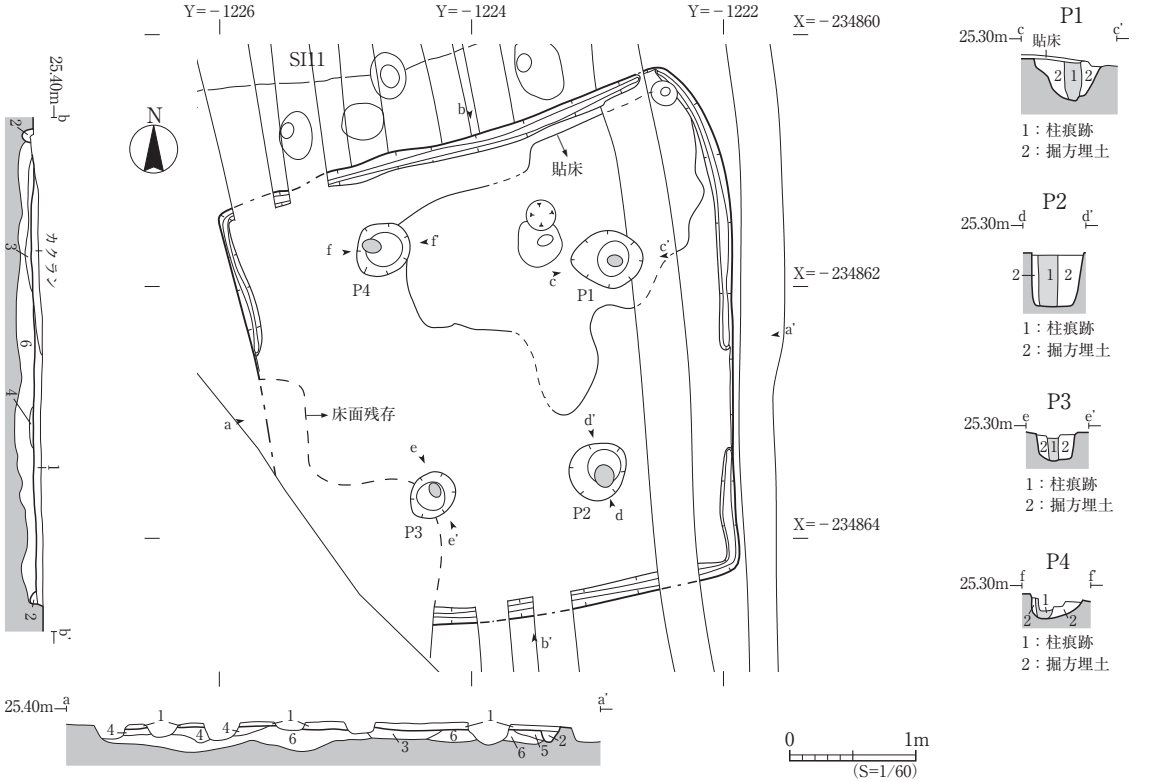
K3は長軸124cm、短軸99cmの不整楕円形で、深さは13cmである。断面形は皿状である。堆積土は、炭化物、焼土粒、焼けた小礫をやや多く含む暗褐色粘土質シルトで、自然堆積である。

K4は南側がK1に切られるが、長軸151cm以上、短軸100cmの不整楕円形とみられる。断面形は逆台形である。堆積土は灰白色粘土小ブロックを含むにぶい黄褐色・暗褐色粘土質シルトで、人為堆積である。

〔出土遺物〕K2堆積土から非ロクロ調整の甕（第14図４）・甑（第14図５・６）、K3堆積土から非ロクロ調整の土師器坏（第14図１）・甕（第14図３）、掘方埋土から非ロクロ調整の土師器鉢（第14図２）、P4柱痕跡から須恵器高盤（第14図７）が出土している。

【SI12竪穴住居跡】（第15・16図）

ＩＡ区南に位置し、南西側が調査区外に延びる。床面は南西部が一部削平されている。



層	土　色	土　性	備　考	層	土　色	土　性	備　考
1	にぶい黄褐色（10YR4/3）	粘土質シルト	炭化物わずかに含む。自然堆積。	4	暗褐色（10YR3/3）	粘土質シルト	炭化物・焼土粒含む。掘方埋土。
2	にぶい黄褐色（10YR4/3）	シルト質粘土	周溝堆積土。人為堆積か。	5	にぶい黄褐色（10YR4/3）	シルト質粘土	地山小ブロック含む。掘方埋土。
3	暗灰黄色（2.5Y5/2）	シルト質粘土	貼床。	6	にぶい黄褐色（10YR4/3）	シルト質粘土	焼土粒含む。掘方埋土。

第15図　SI12竪穴住居跡

〔重複関係〕SF2小溝状遺構群より古い。

〔平面形・規模〕平面形は不整方形で、東西3.9m、南北3.8mである。

〔方向〕東辺でみるとN－9°－Wである。

〔壁〕ほとんど残存しておらず、壁高は最も残りのよい南辺で４㎝ある。

〔床面〕暗褐色粘土質シルト・にぶい黄褐色シルト質粘土の掘方埋土上面を床としており、北東部は一部貼床されている。床面はほぼ平坦である。

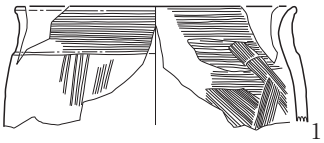
〔柱穴〕主柱穴は住居対角線上にP1～P4を確認している。柱穴掘方は径32～54㎝の円形状で、深さは14～20㎝である。柱穴掘方埋土は炭化物をわずかに含むにぶい黄褐色粘土質シルトである。いずれの柱穴でも柱痕跡を確認しており、径10～16㎝の円形である。柱痕跡の堆積土はにぶい黄褐色粘土質シルトである。

〔カマド〕不明である。

〔周溝〕東辺と西辺の一部を除く各辺で確認している。上幅10～14㎝、下幅６～８㎝、深さ８～10㎝で、断面形はU字状である。堆積土はにぶい黄褐色シルト質粘土で、人為堆積とみられる。

〔堆積土〕堆積土は炭化物をわずかに含むにぶい黄褐色粘土質シルトで、自然堆積である。

〔出土遺物〕堆積土から非ロクロ調整の土師器鉢（第16図１）・坏、須恵器蓋が出土している。



0　10cm
(S=1/3)

No.	器種	層	法量（cm）			特徴	残存	写真	登録番号
			口径	底径	器高				
1	土師器　鉢	堆積土	(11.0)	—	—	外：ハケメ→ヨコナデ　内：ヨコナデ→ヘラナデ	一部	10－1	Po29

第16図　SI12竪穴住居跡出土土器

B．掘立柱建物跡

【SB19掘立柱建物跡】（第17図）

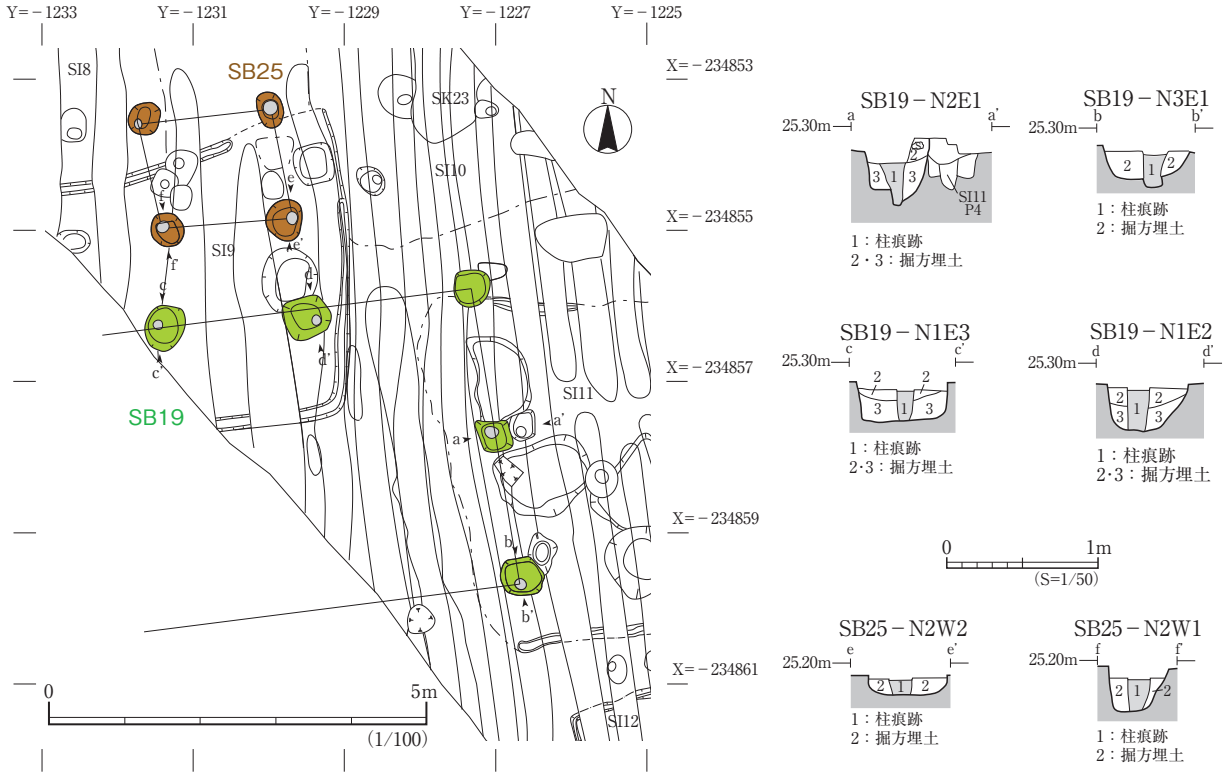
ＩＡ区南に位置する東西２間以上、南北２間の建物である。柱穴は５箇所で検出しており、このうち４箇所で柱痕跡を確認している。SI9・11竪穴住居跡より新しく、SF2小溝状遺構群より古い。規模は北側柱列で総長約4.2m以上、柱間寸法は2.1m等間、東側柱列で総長約4.0m、柱間寸法は2.0m等間である。建物の方向は東側柱列でみるとN－9°－Wである。柱穴掘方は一辺40～62㎝の隅丸方形で、深さは24～34㎝である。柱穴掘方埋土は地山小ブロックを含む暗褐色粘土質シルト～粘土を主体としている。柱痕跡は径14～18㎝の円形である。柱穴掘方埋土から非ロクロ調整の土師器坏の破片が少量出土している。

【SB25掘立柱建物跡】（第17図）

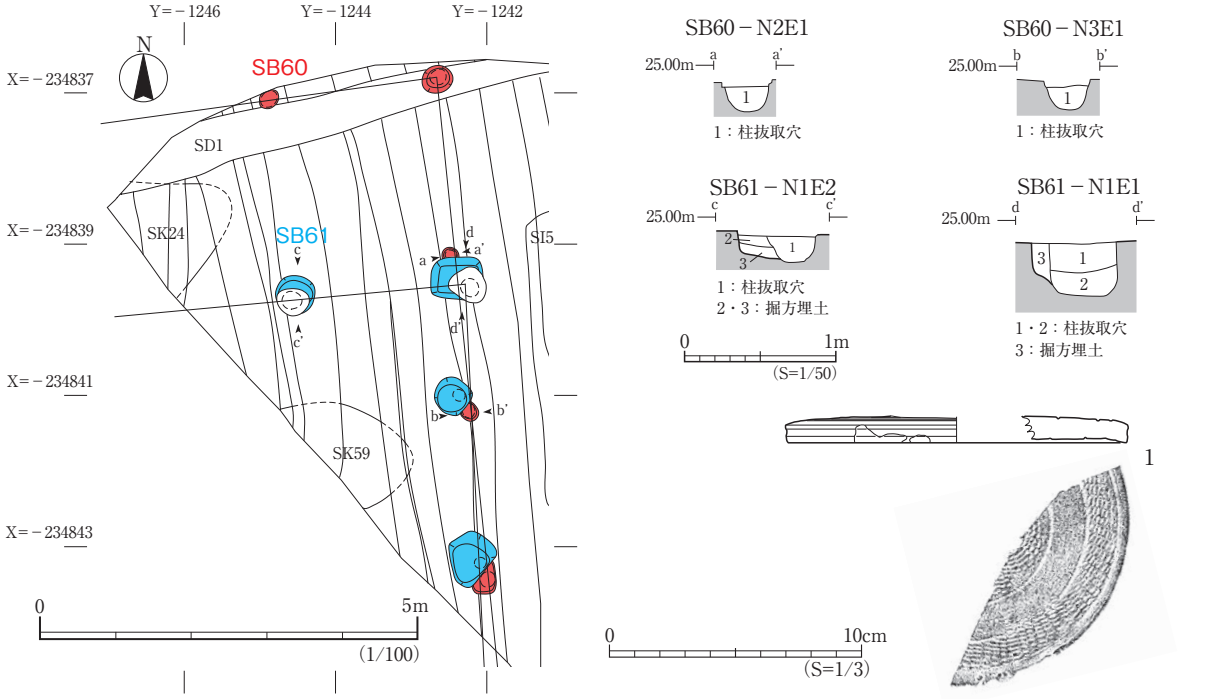
ＩＡ区南に位置する東西１間、南北１間の建物である。柱穴は４箇所で検出しており、全てで柱痕跡を確認している。SI8・9竪穴住居跡より新しく、SF2小溝状遺構群より古い。規模は北側柱列で総長1.8m、西側柱列で総長1.5mである。建物の方向は東側柱列でみるとN－9°－Wである。柱穴掘方は一辺42～48㎝の円形または不整円形で、深さは13～30㎝である。柱穴掘方埋土は地山小ブロック、炭化物を含む暗褐色粘土質シルトである。柱痕跡は径13～18㎝の円形である。柱穴掘方埋土から非ロクロ調整の土師器坏の破片が少量出土している。

【SB60掘立柱建物跡】（第18図）

ＩＡ区北に位置する東西２間以上、南北３間以上の建物である。SB61掘立柱建物跡、SD1溝跡、SF2小溝状遺構群より古い。柱穴は５箇所で検出しているが、いずれも残存状況が悪い。全ての柱穴



第17図　SB19・25掘立柱建物跡



No.	器種	遺構・層	法量（cm）			特　徴	残存	写真	登録番号
			口径	底径	器高				
1	須恵器　蓋か	SB61・N2E1掘方埋土	(13.4)	—	—	外：ロクロナデ→平行沈線　内：ロクロナデ→平行沈線→櫛歯状工具による押引き	一部	10－2	Po30

第18図　SB60・61掘立柱建物跡と出土土器

掘方底面で円形の柱押圧痕跡を確認し、３箇所で柱抜取穴を確認している。規模は北側柱列で総長2.2ｍ以上、東側柱列で総長6.7ｍ以上、柱間寸法は北から2.3ｍ・2.1ｍ・2.3ｍである。建物の方向は東側柱列でみるとＮ－6°－Ｗである。柱穴は径24～40㎝の不整円形で、深さは６～14㎝である。柱穴掘方埋土は地山小ブロックを含む暗褐色粘土質シルトである。遺物は出土していない。

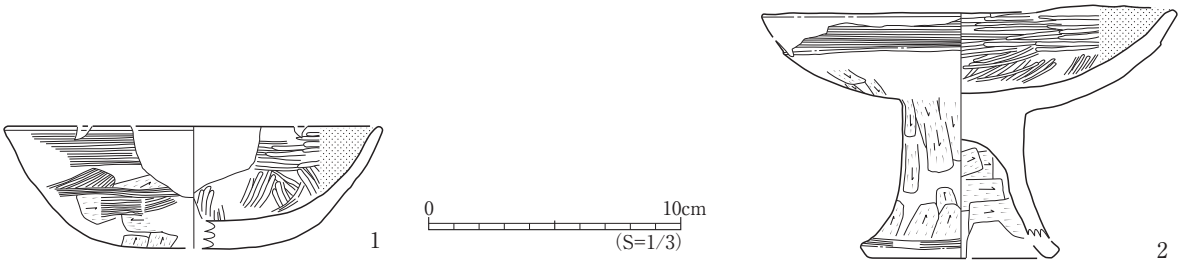
【SB61掘立柱建物跡】（第18図）

ＩＡ区北に位置する東西１間以上、南北２間以上の建物である。SB60掘立柱建物跡より新しく、SF2小溝状遺構群より古い。柱穴は４箇所で検出しており、全てで柱抜取穴を確認し、柱穴掘方底面で円形の柱押圧痕跡を確認している。規模は北側柱列で総長2.2ｍ以上、東側柱列で総長3.7ｍ以上、柱間寸法は北から1.5ｍ・2.2ｍである。建物の方向は東側柱列でみるとＮ－3°－Ｗである。柱穴は一辺が49～68㎝の隅丸方形で、深さは10～36㎝である。柱穴掘方埋土は炭化物粒を含む暗褐色粘土質シルトである。柱穴掘方埋土から須恵器蓋（第18図１）が出土している。

Ｃ．小溝状遺構群

【SF2小溝状遺構群】（第19・20図）

ＩＡ区全体に位置し、南北方向にほぼ平行して延びる小溝跡群である。方向をわずかに違え重複するものがあり２時期の変遷がみられるが、いずれもSI4・5・7・8・9・10・11・12竪穴住居跡、SB19・25・60・61掘立柱建物跡、SK13・15・23・24・59土坑より新しく、SD1溝跡より古い。溝は0.1ｍ～0.7ｍ間隔で35条確認しており、上幅22～75㎝、深さは10～45㎝である。断面形はU字状である。方向はおおよそＮ－4°－Ｗである。遺物は非ロクロ調整の土師器坏（第19図１）・高坏（第19図２）の他に、底部が回転糸切り無調整の土師器坏、須恵器坏・甕の破片などが出土している。



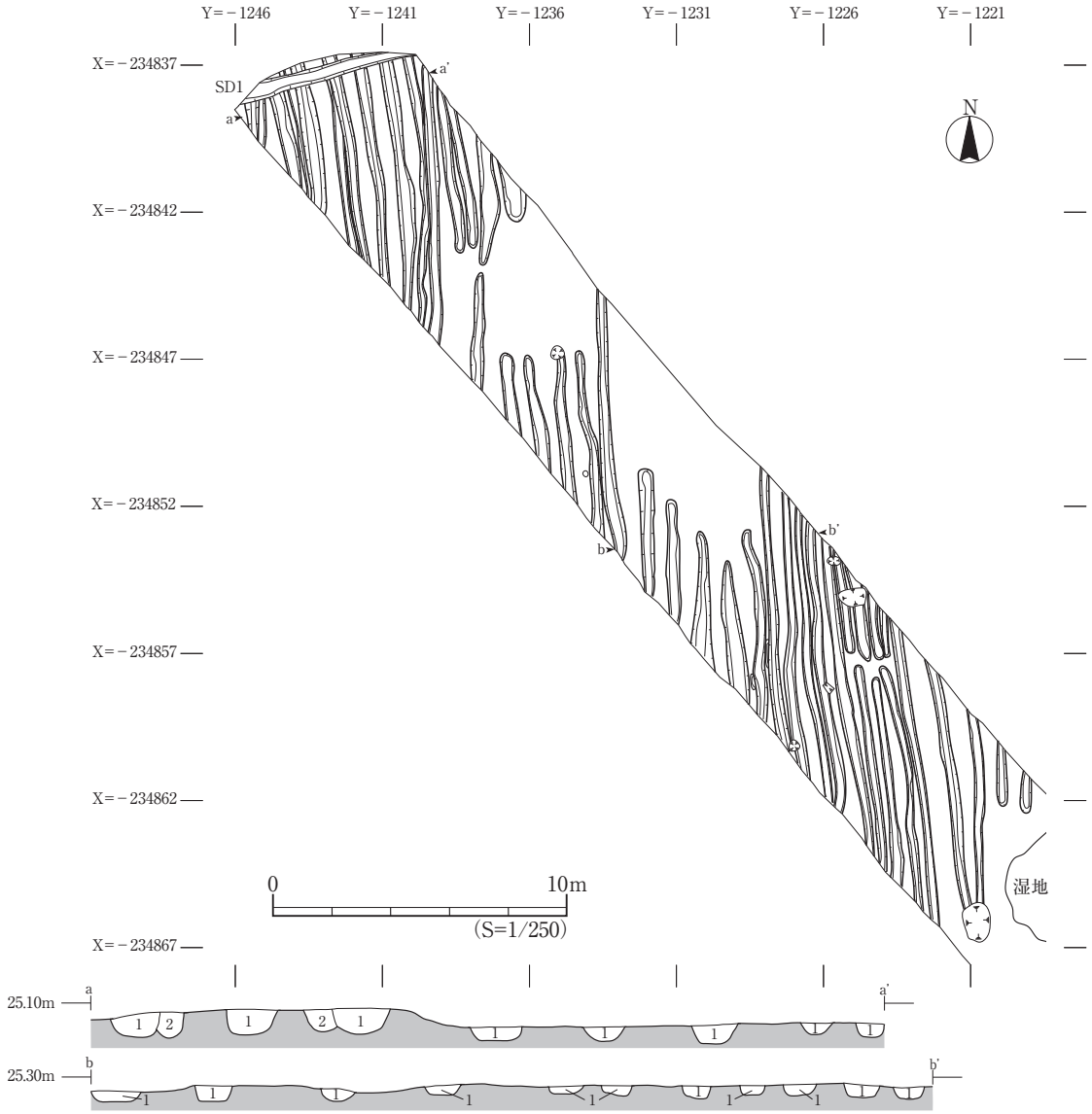
No.	器種	層	法量（cm）			特　徴	残存	写真	登録番号
			口径	底径	器高				
1	土師器　坏	堆積土	(14.8)	—	4.9	外：ヘラナデ→ヨコナデ・ヘラケズリ　内：ヘラミガキ＋黒色処理	一部	10－3	Po31
2	土師器　高坏	堆積土	16.3	7.3	10.0	外：ヨコナデ・ヘラケズリ　内：(坏) ヘラミガキ＋黒色処理　(脚) ヘラケズリ	8/9	10－4	Po32

第19図　SF2小溝状遺構群出土土器

Ｄ．土坑

【SK13土坑】（第21図）

ＩＡ区南に位置する。SF2小溝状遺構群より古い。径92㎝の不整円形で、深さは25㎝である。断面形は逆台形状である。堆積土は３層に分けられ、いずれも人為堆積である。１・２層は木炭粒、焼土ブロックを含む暗褐色・にぶい黄褐色粘土質シルト、３層は地山ブロック、木炭粒を含むにぶい黄褐色シルト質粘土である。堆積土から須恵器高台坏の破片や鉄滓が出土している。

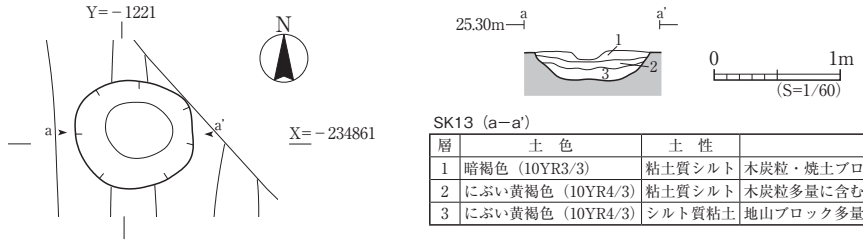


SF2（a－a'・b－b'）

層	土　色	土　性	備　考
1	暗褐色（10YR3/4）	シルト	炭化物・地山粒わずかに含む。自然堆積。
2	暗褐色（10YR3/3）	シルト	炭化物わずかに含む。自然堆積。

0　1m
(S=1/60)

第20図　SF2小溝状遺構群



SK13（a－a'）

層	土　色	土　性	備　考
1	暗褐色（10YR3/3）	粘土質シルト	木炭粒・焼土ブロック多量に含む。人為堆積。
2	にぶい黄褐色（10YR4/3）	粘土質シルト	木炭粒多量に含む。焼土粒わずかに含む。人為堆積。
3	にぶい黄褐色（10YR4/3）	シルト質粘土	地山ブロック多量に含む。木炭粒わずかに含む。人為堆積。

第21図　SK13土坑

【SK14土坑】（第22図）

ⅠA区南端に位置する。長軸142㎝、短軸127㎝の不整楕円形で、深さは22㎝である。断面形は皿状である。堆積土は２層に分けられ、いずれも人為堆積である。１層は炭化物ブロック、地山ブロックを含む暗褐色粘土質シルト、２層は炭化物粒、地山ブロックを含むにぶい黄褐色粘土質シルトである。

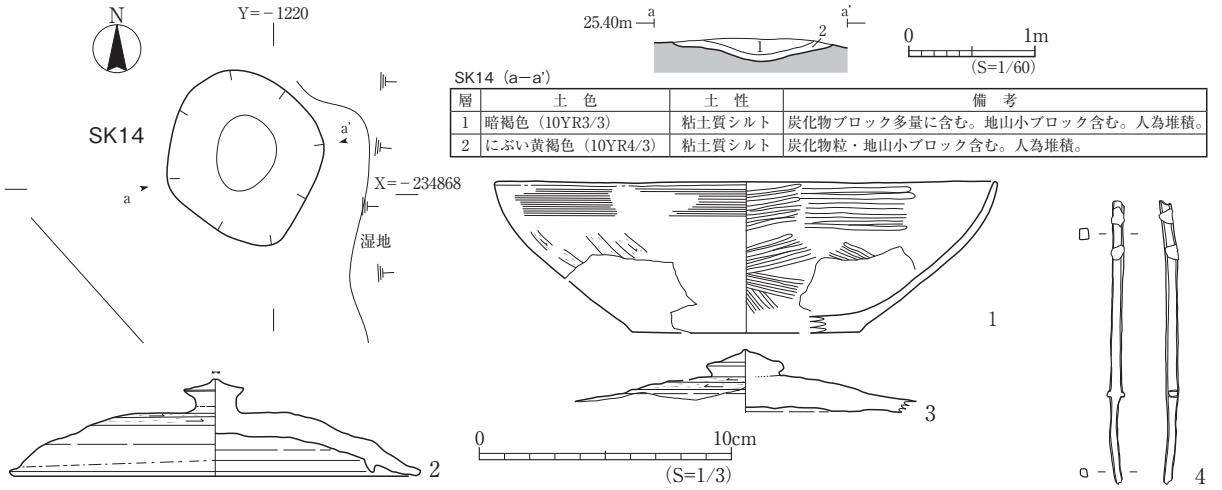
堆積土から非ロクロ調整の土師器坏（第22図１）、須恵器蓋（第22図２）、鉄鏃（第22図４）、遺構確認面から須恵器蓋（第22図３）が出土している。

【SK15土坑】（第22図）

ⅠA区中央に位置する。SI8竪穴住居跡より新しく、SF2小溝状遺構群より古い。南西側が調査区外に延びるが、長軸116cm以上、短軸68cm以上で、楕円形とみられる。深さは50cmで、断面形は逆台形状である。堆積土は２層に分けられ、いずれも人為堆積である。１層は地山小ブロックを含み、炭化物粒、焼土粒を少量含む黒褐色粘土質シルトである。２層は地山ブロックを多く含む暗褐色粘土質シルトである。堆積土から非ロクロ調整の土師器坏が出土している。

【SK23土坑】（第22・23図）

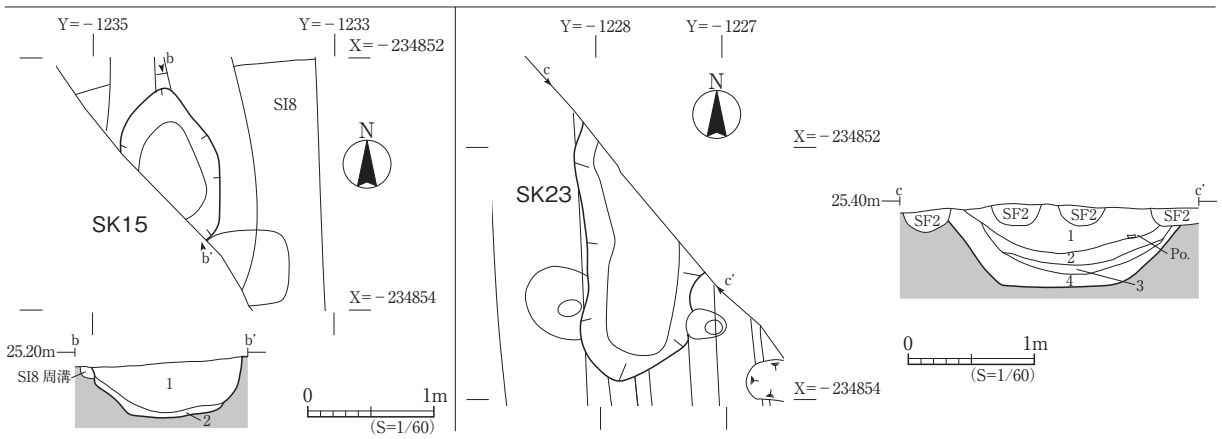
ⅠA区中央に位置する。SI10竪穴住居跡より新しく、SF2小溝状遺構群より古い。SI10竪穴住居跡



SK14（a－a'）

層	土　色	土　性	備　考
1	暗褐色（10YR3/3）	粘土質シルト	炭化物ブロック多量に含む。地山小ブロック含む。人為堆積。
2	にぶい黄褐色（10YR4/3）	粘土質シルト	炭化物粒・地山小ブロック含む。人為堆積。

No.	器種	遺構・層	法量（cm）			特　徴	残存	写真	登録番号
			口径	底径	器高				
1	土師器　坏	SK14・堆積土	(19.8)	—	(5.9)	外：(口) ヨコナデ　(体～底) ヘラケズリ　摩耗激しい　内：ヘラミガキ（黒色処理不明）	一部	—	Po33
2	須恵器　蓋	SK14・堆積土	16.4	—	3.8	外：ロクロナデ→回転ヘラケズリ→つまみ貼付→ロクロナデ　重ね焼き痕跡あり 内：ロクロナデ→カエリ貼付→ロクロナデ→ナデ（天井部付近）　つまみ頂部に使用痕あり	2/3	10－5	Po34
3	須恵器　蓋	SK14・確認面	—	—	—	外：ロクロナデ→回転ヘラケズリ→つまみ貼付→ロクロナデ　内：ロクロナデ	一部	10－6	Po35
4	鉄鏃	SK14・堆積土	—	—	—	長頸鏃、先端折れ、現存長11.1cm	一部	10－7	F01

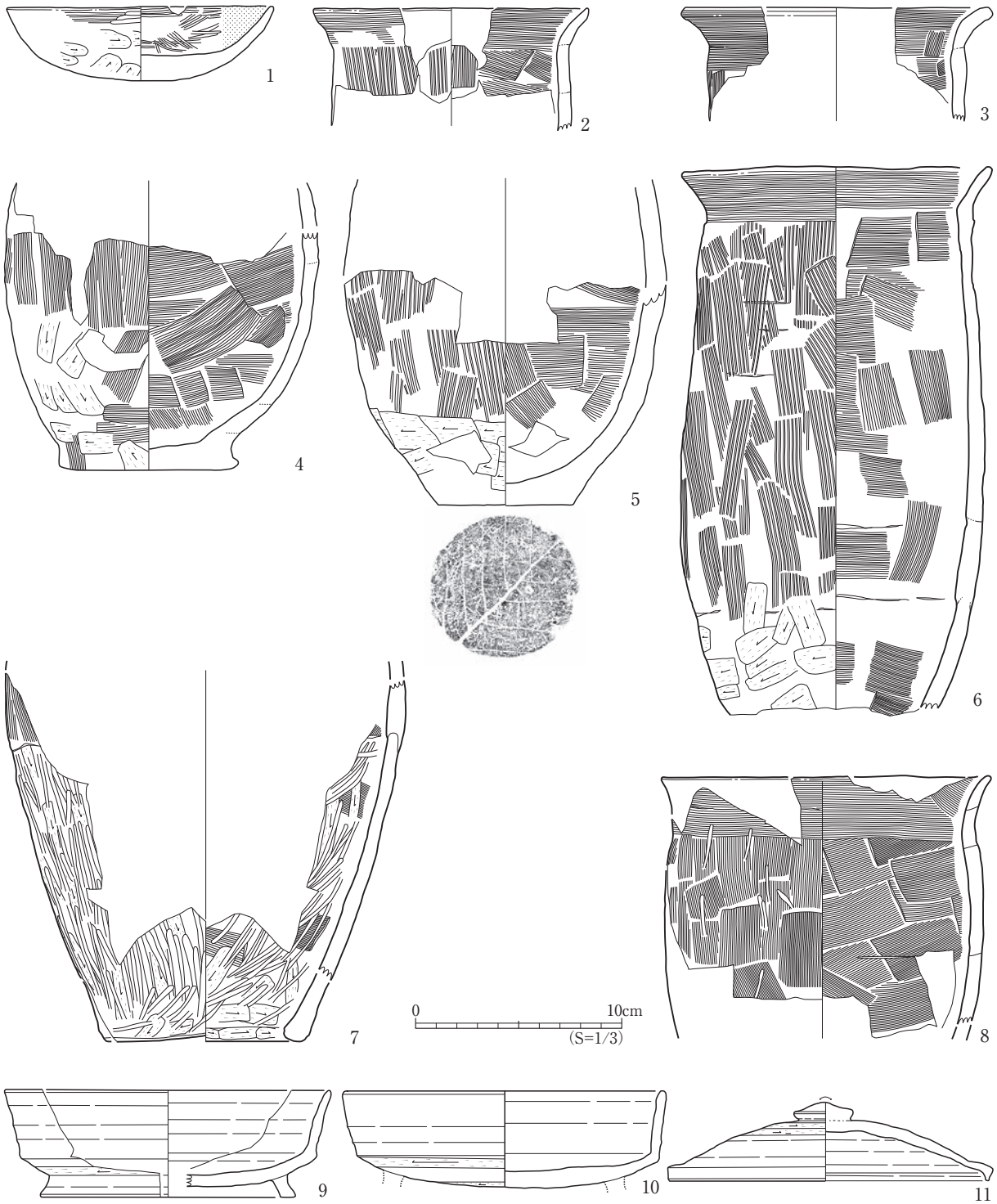


SK15・SK23（b－b'・c－c'）

遺構	層	土　色	土　性	備　考
SK15	1	黒褐色（10YR3/2）	粘土質シルト	地山小ブロック含む。焼土粒・炭化物粒少量含む。人為堆積。
	2	暗褐色（10YR3/3）	粘土質シルト	地山ブロック多く含む。人為堆積。

遺構	層	土　色	土　性	備　考
SK23	1	暗褐色（10YR3/3）	粘土質シルト	焼土粒含む。炭化物少量含む。人為堆積。
	2	暗褐色（10YR3/4）	粘土質シルト	炭化物含む。人為堆積。
	3	暗褐色（10YR3/3）	粘土質シルト	焼土粒・炭化物粒含む。人為堆積。
	4	にぶい黄褐色（10YR4/3）	粘土質シルト	地山ブロック含む。人為堆積。

第22図　SK14・15・23土坑と出土遺物



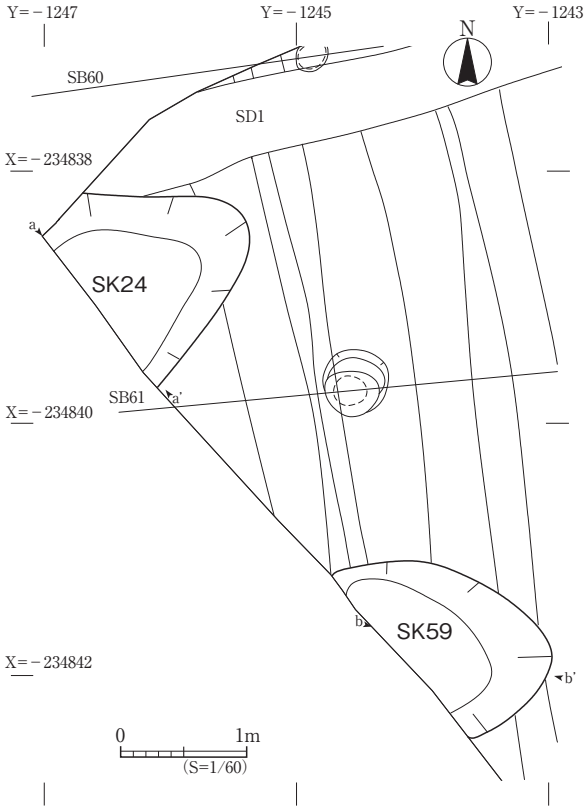
No.	器種	層	法量（cm）			特　徴	残存	写真	登録番号
			口径	底径	器高				
1	土師器　坏	1・2層	(12.9)	—	3.6	外：ヨコナデ→ヘラケズリ→ヘラミガキ　内：ヘラミガキ＋黒色処理	3/4	10－8	Po36
2	土師器　甕	1・2層	(13.3)	—	—	外：ヨコナデ→ヘラケズリ　内：ヘラナデ→ヨコナデ	一部	10－9	Po37
3	土師器　甕	1・2層	(14.8)	—	—	外：ハケメ→ヨコナデ　内：ヘラナデ→ヨコナデ	一部	10－10	Po38
4	土師器　甕	1・2層	—	6.5	—	外：ハケメ→ヘラケズリ　内：ヘラナデ	一部	10－12	Po39
5	土師器　甕	1・2層	—	8.0	—	外：ヘラナデ→ヘラケズリ　底面：木葉痕あり　内：ヘラナデ	一部	10－13	Po40
6	土師器　甕	4層	14.9	－	—	外：(口) ヨコナデ　(胴) ハケメ→ヘラケズリ　内：ヨコナデ→ヘラナデ	一部	10－15	Po41
7	土師器　甑	1・2層	—	(9.7)	—	外：ヘラナデ→ヘラケズリ→ヘラミガキ　内：ヘラナデ→ヘラケズリ→ヘラミガキ	一部	10－11	Po42
8	土師器　甕	1・2層	(15.9)	—	—	外：ヘラナデ→ヨコナデ→ヘラミガキ　内：ヘラナデ→ヨコナデ	一部	10－14	Po43
9	須恵器　高台坏	1・2層	(15.8)	(12.4)	5.3	外：ロクロナデ→回転ケズリ→高台貼付→ロクロナデ　内：ロクロナデ	1/3	10－16	Po44
10	須恵器　高台坏	1・2層	(15.6)	—	—	外：ロクロナデ→回転ケズリ→高台貼付→ロクロナデ　内：ロクロナデ　高台ハガレ	一部	10－17	Po45
11	須恵器　蓋	1・2層	13.6	—	3.8	外：ロクロナデ→回転ケズリ→つまみ貼付→ロクロナデ　内：ロクロナデ　つまみ頂部に使用痕あり	5/6	10－18	Po46

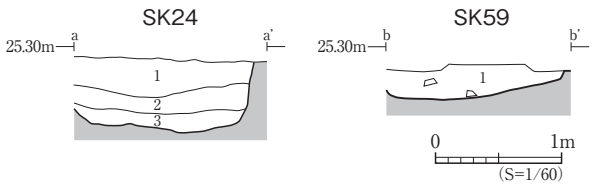
第23図　SK23土坑出土土器

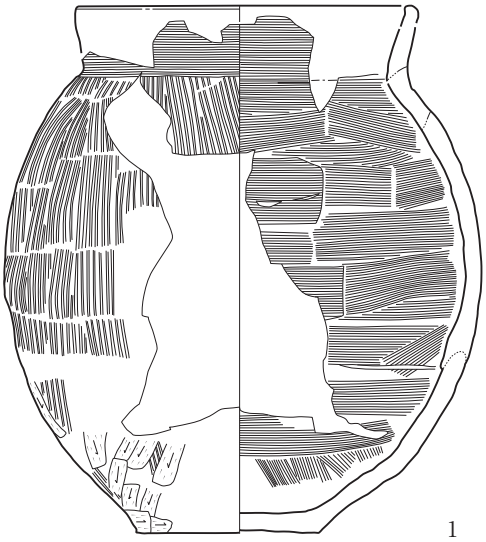
廃絶後の窪みを掘り込んで構築されている。北東側が調査区外に延びるため全体の平面形は不明であるが、長軸150cm以上、短軸90cm以上で、不整楕円形とみられる。深さは56cmで、断面形は逆台形である。堆積土は４層に分けられ、いずれも人為堆積である。１～３層は焼土粒、炭化物小ブロックを含む暗褐色粘土質シルト、４層は地山ブロックを含むにぶい黄褐色粘土質シルトである。堆積土１・２層から、非ロクロ調整の土師器坏（第23図１）・甕（第23図２～５・8）・甑（第23図７）、須恵器高台坏（第23図９・10）・蓋（第23図11）、堆積土４層から非ロクロ調整の土師器甕（第23図６）が出土している。

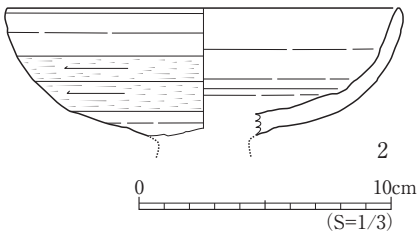
【SK24土坑】（第24図）

ＩＡ区北西端に位置する。SF2小溝状遺構群、SD1溝跡より古い。西側が調査区外に延びるため平面形は不明で、長軸166cm以上、短軸138cm以上である。深さは89cmで、断面形は逆台形である。堆積土は３層に分けられる。１・２層は焼土、炭化物粒、地山ブロックを含む褐色粘土質シルトで人為堆積である。３層は地山ブロック、酸化鉄を多く含む暗褐色粘土で自然堆積とみられる。堆積土１層から非ロクロ調整の土師器甕（第24図１）が出土している。









SK24・SK59（a－a'・b－b'）

遺構	層	土　色	土　性	備　考
SK24	1	褐色（10YR4/4）	粘土質シルト	焼土・炭化物・地山ブロック含む。人為堆積。
	2	褐色（10YR4/4）	シルト質粘土	焼土・炭化物・地山ブロック少量含む。人為堆積。
	3	暗褐色（10YR3/4）	粘土	地山ブロック・酸化鉄多く含む。自然堆積か。
SK59	1	暗褐色（10YR3/4）	粘土質シルト	炭化物片・地山ブロック含む。人為堆積。

No.	器種	遺構・層	法量（cm）			特　徴	残存	写真	登録番号
			口径	底径	器高				
1	土師器　甕	SK24・１層	(13.4)	(7.4)	(20.9)	外：(口) ヨコナデ　(体) ハケメ→ヘラケズリ　底面：木葉痕あり　内：ヨコナデ・ヘラナデ	5/6	11－1	Po47
2	須恵器　高坏	SK59・堆積土	15.6	—	—	外：ロクロナデ→回転ケズリ→脚部貼付→ロクロナデ　内：ロクロナデ	一部	11－2	Po48

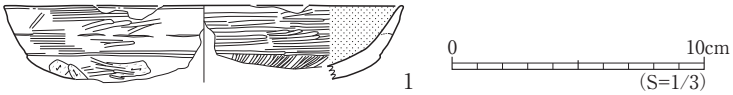
第24図　SK24・59土坑と出土土器

【SK59土坑】（第24図）

ＩＡ区北に位置する。SF2小溝状遺構群より古い。西側が調査区外に延びるが、長軸150㎝以上、短軸125㎝以上で、楕円形とみられる。深さは26㎝で、断面形は皿状である。堆積土は炭化物片、地山ブロックを含む暗褐色粘土質シルトで、人為堆積である。堆積土から須恵器高坏（第24図２）が出土している他、非ロクロ調整の土師器坏・無底式の甑の破片が出土している。

Ｅ．その他の出土遺物

遺構確認の段階で出土した主な遺物には、非ロクロ調整の土師器坏（第25図１）がある他、ロクロ調整の土師器、須恵器の破片が認められる。



No.	器種	層	法量（cm）			特　徴	残存	写真	登録番号
			口径	底径	器高				
1	土師器　坏	遺構確認面	(15.8)	—	—	外：ヨコナデ・ヘラケズリ→ヘラミガキ　内：ヘラミガキ＋黒色処理	一部	11－3	Po49

第25図　ＩＡ区遺構確認面出土土器

(2)　ＩＢ区

検出された遺構には、竪穴住居跡６軒、掘立柱建物跡７棟、柱穴列１列、溝跡２条、小溝状遺構群１面、河川跡１条、井戸跡１基、土坑９基などがあり、土師器、須恵器、かわらけ、中世陶器、鉄滓などが出土している。以下、主要なものについて説明する。

Ａ．竪穴住居跡

【SI29竪穴住居跡】（第26・27図）

ＩＢ区北に位置し、北東・南西側が調査区外に延びる。床面は削平されており、掘方埋土のみ検出している。東側の残存状況が特に悪い。

〔重複関係〕SI31竪穴住居跡より新しく、SB53・54・65掘立柱建物跡、SA63柱穴列、SF37小溝状遺構群より古い。

〔平面形・規模〕東西6.3m以上、南北約6.8mで、平面形は方形とみられる。

〔方向〕西辺でみるとＮ－3°－Ｗである。

〔床面〕床面は残存しておらず、掘方埋土のみ残存している。掘方埋土は黒褐色・暗褐色粘土質シルトで、３層に分けられる。

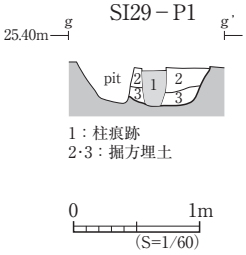
〔柱穴〕主柱穴とみられる柱穴P1・P2を住居北西・南西で確認している。P2は残存状況が悪く、掘方の底面付近のみを確認している。P1の柱穴掘方は径63㎝の不整円形で、深さは30㎝である。柱穴掘方埋土は炭化物粒をわずかに含む暗褐色粘土質シルトである。柱痕跡は径19㎝の円形である。

〔カマド〕北辺中央に付設されており、径41㎝の不整円形の焼面のみを確認している。

〔貯蔵穴〕カマドの右側で貯蔵穴とみられる土坑K1を確認している。K1は長軸78㎝、短軸約50㎝の不

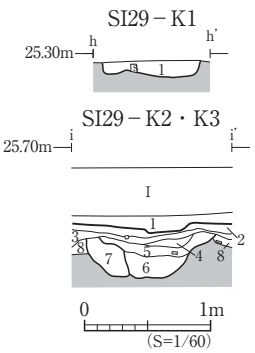
a－a'・b－b'・c－c'・d－d'・e－e'・f－f'

遺構	層	土　色	土　性	備　考
SI29	1	暗褐色（10YR3/3）	粘土質シルト	地山小ブロック・炭化物片やや多く含む。焼土粒少量含む。住居内堆積土。自然堆積。
	2	黒褐色（10YR2/2）	粘土質シルト	炭化物片多く含む。機能時堆積。
	3	黒褐色（10YR3/2）	粘土質シルト	焼土小ブロック・地山小ブロック多く含む。燃焼部底面を貼り直した土か。
	4	暗褐色（10YR3/3）	粘土質シルト	地山小ブロック多く含む。炭化物片やや多く含む。焼土粒少量含む。周溝内堆積土。人為堆積。
	5	暗褐色（10YR3/3）	粘土質シルト	地山小ブロック多く含む。炭化物片少量含む。周溝内堆積土。人為堆積。
	6	黒褐色（10YR3/2）	粘土質シルト	地山粒・炭化物片多く含む。掘方埋土。
	7	暗褐色（10YR3/3）	粘土質シルト	地山粒多く含む。炭化物粒やや多く含む。掘方埋土。
	8	暗褐色（10YR3/4）	粘土質シルト	地山小ブロック多く含む。炭化物粒・片少量含む。掘方埋土。
SI31	9	暗褐色（10YR3/4）	粘土質シルト	地山小ブロック・炭化物片やや多く含む。住居内堆積土。自然堆積。
	10	黒褐色（10YR2/2）	粘土質シルト	地山小ブロック多く含む。炭化物片・粒やや多く含む。SI31に伴うピット。人為堆積。
	11	黒褐色（10YR3/2）	粘土質シルト	地山小ブロック多く含む。周溝内堆積土。人為堆積。
	12	黒褐色（10YR3/2）	粘土質シルト	地山粒多く含む。掘方埋土。人為堆積。
	13	黒褐色（10YR3/2）	粘土質シルト	地山粒やや多く含む。地山小ブロック多く含む。掘方埋土。
	14	黒褐色（10YR3/2）	粘土質シルト	地山小ブロック非常に多く含む。層下部に灰黄褐色粘土質シルト層状に含む。掘方埋土。
	15	暗褐色（10YR3/3）	粘土質シルト	地山小ブロック多く含む。炭化物粒わずかに含む。掘方埋土。
	16	暗褐色（10YR3/4）	粘土質シルト	地山小ブロック非常に多く含む。掘方埋土。
	17	暗褐色（10YR3/3）	粘土質シルト	地山小ブロック多く含む。炭化物粒やや多く含む。掘方埋土。
	18	黒褐色（10YR3/2）	粘土質シルト	地山粒多く含む。炭化物粒少量含む。掘方埋土。
	19	暗褐色（10YR3/3）	粘土質シルト	地山小ブロック多く含む。掘方埋土。
SI32	20	黒褐色（10YR3/2）	粘土質シルト	炭化物・焼土・地山小ブロックを多く含む。住居内堆積土。人為堆積。
	21	にぶい黄褐色（10YR4/3）	粘土質シルト	焼土・炭化物少量含む。掘方埋土。



1：柱痕跡
2・3：掘方埋土

第26図　SI29・31竪穴住居跡

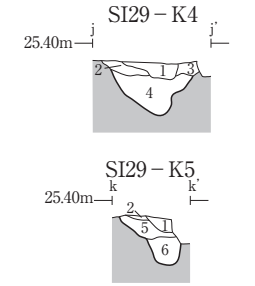


SI29－K1（h－h'）

遺構		層	土　色	土　性	備　考
SI29	K1	1	暗褐色（10YR3/3）	粘土質シルト	焼土・炭化物多く含む。地山小ブロック含む。人為堆積。

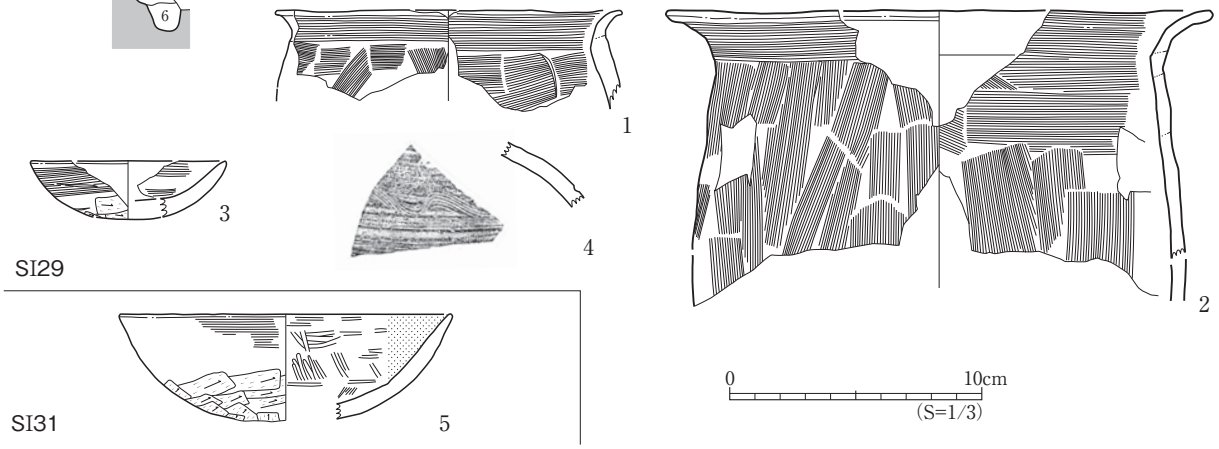
SI29－K2・K3（i－i'）

遺構		層	土　色	土　性	備　考
SI29		1	暗褐色（10YR3/3）	粘土質シルト	炭化物ブロック少量含む。自然堆積。SI29住居内堆積土。
		2	暗褐色（10YR3/4）	粘土質シルト	白色粘土ブロック多く含む。炭化物粒含む。SI29掘方埋土。
		3	暗褐色（7.5YR3/3）	粘土質シルト	炭化物・焼土ブロック多く含む。SI29掘方埋土。
	K2	4	暗褐色（10YR3/3）	粘土質シルト	白色粘土ブロック・炭化物粒含む。焼土粒少し含む。K2堆積土。人為堆積。
		5	暗褐色（10YR3/3）	粘土質シルト	白色粘土ブロック・地山ブロック・焼土粒・炭化物含む。K2堆積土。人為堆積。
		6	黒褐色（10YR2/3）	粘土質シルト	炭化物・焼土ブロック含む。地山小ブロック少量含む。K2堆積土。人為堆積。
	K3	7	黒褐色（7.5YR2/2）	粘土質シルト	地山ブロック多く含む。焼土ブロック・炭化物含む。K3堆積土。人為堆積。
		8	にぶい黄褐色（10YR4/3）	粘土質シルト	地山ブロック主体。白色粘土ブロック・焼土粒少量含む。SI29掘方埋土。



SI29－K4・K5（j－j'・k－k'）

遺構		層	土　色	土　性	備　考
SI29		1	暗褐色（10YR3/3）	粘土質シルト	炭化物ブロック・地山小ブロック含む。焼土粒少量含む。SI29掘方埋土。
		2	暗褐色（10YR3/4）	粘土質シルト	炭化物粒・地山小ブロック含む。SI29掘方埋土。人為堆積。
		3	暗褐色（7.5YR3/4）	粘土質シルト	焼土ブロック含む。下部に地山ブロック含む。SI29掘方埋土か。人為堆積。
	K4	4	暗褐色（10YR3/4）	粘土質シルト	地山ブロック多く含む。K4堆積土。人為堆積。
	K5	5	暗褐色（10YR3/4）	粘土質シルト	焼土ブロック・地山ブロック含む。K5堆積土。人為堆積。
		6	暗褐色（10YR3/4）	粘土質シルト	地山ブロック多く含む。焼土粒含む。K5堆積土。人為堆積。



No.	器種	遺構・層	法量（cm）			特　徴	残存	写真	登録番号
			口径	底径	器高				
1	土師器　甕	SI29・掘方埋土	(13.8)	—	—	外：ヘラナデ→ヨコナデ　内：ヨコナデ・ヘラナデ	一部	11－7	Po53
2	土師器　甕	SI29・遺構確認面	(21.5)	—	—	外：ヘラナデ→ヨコナデ　内：ヨコナデ・ヘラナデ	一部	11－6	Po54
3	ミニチュア土器	SI29・遺構確認面	(7.7)	—	2.3	外：ヨコナデ・ヘラケズリ　内：ヨコナデ・ヘラナデ	1/3	11－5	Po55
4	須恵器　壺	SI29・遺構確認面	—	—	—	外：ロクロナデ→平行沈線→櫛歯状沈線　内：ロクロナデ	破片	11－8	Po56
5	土師器　坏	SI31・掘方埋土	(13.2)	—	—	外：ヨコナデ・ヘラケズリ　内：ヘラミガキ＋黒色処理	1/3	11－13	Po57

第27図　SI29・31竪穴住居跡と出土土器

整楕円形で、深さは13cmである。断面形は皿状である。堆積土は焼土、炭化物を多く含む暗褐色粘土質シルトで、人為堆積である。

〔周溝〕住居北西隅で一部確認している。上幅12～24cm、下幅４～15cm、深さ４～14cmである。断面形はU字状である。堆積土は地山粒を多く含む暗褐色粘土質シルトで、人為堆積とみられる。

〔その他の施設〕住居中央で焼面を確認している。平面形は径48cmの不整円形である。また、住居北東隅で土坑K2・K3、住居中央南で土坑K4・K5を掘方埋土の下から検出している。K2は径約50cmの円形とみられ、深さ30cmである。堆積土は３層に分けられ、いずれも人為堆積である。K3はK2に壊され平面形は不明で、深さは28cmである。堆積土は黒褐色粘土質シルトで、人為堆積である。K4は長軸74cm以上、短軸54cmの楕円形で、深さは30cmである。堆積土は暗褐色粘土質シルトで、人為堆積である。K5は長軸73cm、短軸54cmの不整楕円形で、深さ36cmである。堆積土は暗褐色粘

土質シルトで、人為堆積である。

〔出土遺物〕確認面で非ロクロ調整の土師器甕（第27図２）、ミニチュア土器（第27図３）、須恵器壺（第27図４）、掘方埋土から非ロクロ調整の土師器甕（第27図１）が出土している。

【SI31竪穴住居跡】（第26・27図）

ＩＢ区中央に位置し、西側が調査区外に延びる。床面は削平されており、掘方埋土のみ検出している。

〔重複関係〕調査区西壁でみるとSI32竪穴住居跡より新しく、SI29竪穴住居跡、SB54・65掘立柱建物跡より古い。

〔平面形・規模〕全体の平面形は不明である。東西3.8m以上、南北2.6m以上である。

〔方向〕不明である。

〔床面〕床面は残存しておらず、黒褐色・暗褐色粘土質シルトの掘方埋土のみ残存している。

〔主柱穴〕〔カマド〕不明である。

〔出土遺物〕掘方埋土から非ロクロ調整の土師器坏（第27図５）・甕の破片が少量出土している。

【SI32竪穴住居跡】（第28図）

ＩＢ区中央に位置し、西側が調査区外に延びる。床面は削平されており、掘方埋土のみ検出している。

〔重複関係〕SI31竪穴住居跡、ＳＤ44溝跡、SK45土坑より古い。

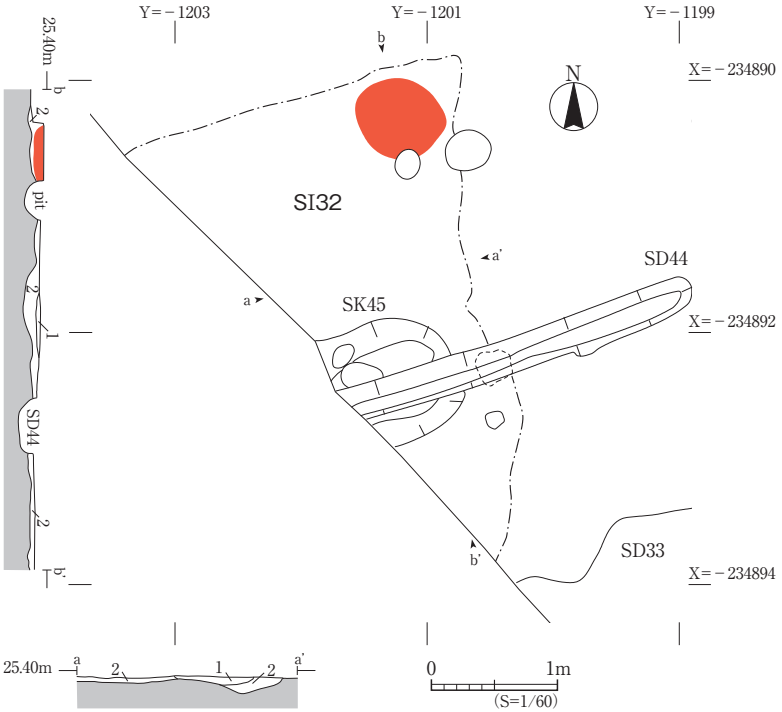
〔平面形・規模〕全体の平面形は不明であり、東西2.9m以上、南北4.0m以上である。

〔方向〕不明である。

〔床面〕床面は残存しておらず、灰黄褐色・にぶい黄褐色粘土質シルトの掘方埋土のみ残存している。

〔主柱穴〕〔カマド〕不明である。

〔その他の施設〕住居北東隅で焼面を検出している。平面形は径約70cmの不整円形である。



層	土　色	土　性	備　考
1	灰黄褐色（10YR6/2）	粘土質シルト	炭化物・酸化鉄少量含む。掘方埋土。
2	にぶい黄褐色（10YR4/3）	粘土質シルト	焼土・炭化物少量含む。掘方埋土。

第28図　SI32竪穴住居跡

〔出土遺物〕掘方埋土から土師器の小破片が少量出土している。

【SI35竪穴住居跡】（第29～31図）

ＩＢ区南端に位置し、SB55・56・57・66掘立柱建物跡、SD33河川跡、SK62土坑より古い。SI35は西辺を約60cm、北辺を約50cm拡張し、改築されている（SI35A→SI35B）。以下、SI35AとSI35Bに分けて説明する。

【SI35A竪穴住居跡】（第29・30図）

SI35Aは、床面全面の嵩上げ（２期）、部分的な貼床（３期）、カマドの作り替え（４期）などの改修が行われている（第２表）。以下では違いがわかる項目については、時期ごとに説明する。

第２表　SI35竪穴住居跡の変遷

遺構	時期	主な改修	床面	柱穴	カマド	付属施設
SI35A	１期	—	掘方埋土	P1・P2	東辺旧カマド	K3・X1
	２期	床面全面の嵩上げ	貼床		東辺旧カマド	K2
	３期	部分的な貼床	貼床		東辺旧カマド	
	４期	カマド作り替え	貼床		東辺新カマド	—
SI35B	—	西辺・北辺の拡張 カマド作り替え	SI35Aの床面 拡張部は不明	壁柱穴	北辺カマド	K1

SI35Aは北東隅と南西部が調査区外に延びる。床面は南東部で残存している。

〔平面形・規模〕東西5.6m、南北5.6mで、平面形は方形とみられる。

〔方向〕東辺でみるとN－3°－Wである。

〔床面〕１期は掘方埋土上面を床としている。２期は全体を貼床し、床面を嵩上げしている。３期は住居南東部を部分的に貼床している。

〔柱穴〕主柱穴とみられる柱穴P1を住居北西、P2を住居北東で確認している。P1では柱痕跡・柱抜取穴を確認している。柱穴掘方は径48㎝の不整円形で、深さは61㎝である。柱穴掘方埋土は炭化物を少量含む暗褐色粘土質シルトである。柱痕跡は径17㎝の円形である。柱痕跡の堆積土は炭化物を少量含む黒褐色粘土質シルトである。柱穴底面付近では10㎝大の小礫が柱痕跡を囲むような状況が認められ、根巻石とみられる。P2はSB57掘立柱建物跡で壊されており詳細は不明である。また、南東主柱穴についてはSK62土坑・SB66掘立柱建物跡で壊されたと考えられる。

〔カマド〕東辺で新旧２つのカマドを確認している。４期にカマドの位置を北へ約90㎝移している。

１～３期の旧カマドは、新カマド構築時にカマド本体が壊されたとみられ、燃焼部底面と煙道のみ残存している。燃焼部は床面全体の嵩上げや部分的な貼床に合わせて２回作り直されている。煙道は長さ1.6mから1.3mに作り直されている。作り直された煙道の先端には、非ロクロ調整の土師器甕の口縁部から胴部にかけての破片（第30図１）が据えられており、埋め戻した土の崩れ止めに利用されたと考えられる。

４期の新カマドは、SI35Bの周溝に切られており、改築時にカマド本体が壊されたとみられ、燃焼部底面と煙道のみ残存している。煙道の長さは1.6mで、先端は径47㎝のピット状になる。

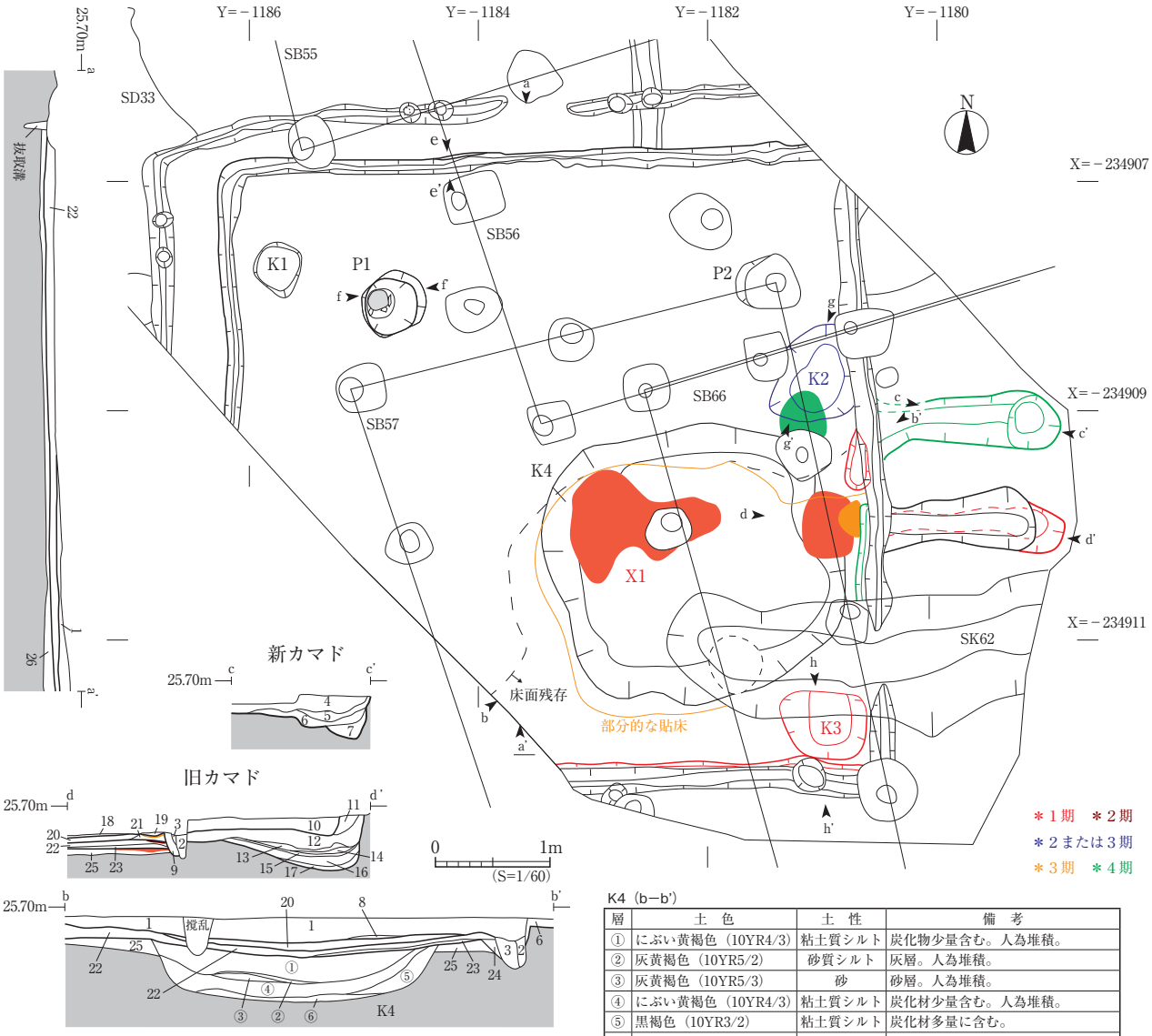
〔周溝・抜取溝〕西辺・北辺で改築時の抜取溝を確認し、東辺・北辺・南辺で部分的に周溝を確認している。

抜取溝は上幅10～22㎝、下幅３～９㎝、深さ７～18㎝で、断面形はU字状である。抜取溝の堆積土は炭化物をやや多く含む暗褐色粘土質シルトで、人為堆積である。

周溝は、SI35Bの周溝や抜取溝で大半が壊されており、残存状況が悪い。１期の周溝を新カマド付近と南辺で確認している。また、カマドの作り替えに伴う４期の周溝を旧カマド付近で一部確認している。

〔貯蔵穴〕貯蔵穴とみられる土抗K2をカマドの左側、土抗K3をカマドの右側で確認している。

K2は嵩上げ後の床面で検出しており、新カマド燃焼部焼面に切られることから、２または３期に属する。東側がSI35Bの周溝に切られるが、長軸89㎝、短軸65㎝以上で、楕円形とみられる。深さは20㎝で、断面形は逆台形である。堆積土は２層に分けられ、いずれも人為堆積である。１層は炭化物を多量に含み、焼土ブロック、地山ブロックを含む黒褐色粘土質シルト、２層は地山ブロックを多く含み、炭化物粒をわずかに含む暗褐色粘土質シルトである。



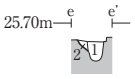
K4（b－b'）

層	土　色	土　性	備　考
①	にぶい黄褐色（10YR4/3）	粘土質シルト	炭化物少量含む。人為堆積。
②	灰黄褐色（10YR5/2）	砂質シルト	灰層。人為堆積。
③	灰黄褐色（10YR5/3）	砂	砂層。人為堆積。
④	にぶい黄褐色（10YR4/3）	粘土質シルト	炭化材少量含む。人為堆積。
⑤	黒褐色（10YR3/2）	粘土質シルト	炭化材多量に含む。
⑥	暗褐色（10YR3/3）	粘土質シルト	焼土粒・炭化材多く含む。人為堆積。

a－a'·b－b'·c－c'·d－d'

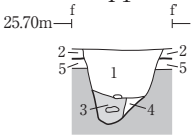
遺構	層	土　色	土　性	備　考
SI35B	1	黒褐色（10YR3/2）	粘土質シルト	地山小ブロック・焼土粒・炭化物粒少量含む。人為堆積。
	2	黒褐色（10YR3/2）	粘土質シルト	焼土粒・炭化物粒含む。地山ブロック少量含む。SI35B壁材痕跡。
	3	暗褐色（10YR3/3）	粘土質シルト	地山ブロック含む。焼土粒・炭化物粒少量含む。SI35B周溝掘方埋土。
SI35A	4	暗褐色（10YR3/3）	粘土質シルト	地山ブロック含む。炭化物粒少量含む。新カマド煙道内堆積土。人為堆積か。
	5	にぶい黄褐色（10YR4/3）	粘土質シルト	炭化物粒極少量含む。新カマド煙道崩落土か。
	6	黒褐色（10YR2/2）	粘土質シルト	炭化物・焼土多く含む。新カマド煙道～燃焼部内堆積土。機能時の堆積か。
	7	黒褐色（10YR3/2）	粘土質シルト	地山ブロック・炭化物多く含む。新カマド煙道内堆積土。自然堆積。
	8	暗褐色（10YR3/3）	粘土質シルト	炭化物・焼土粒多く含む。住居機能時の堆積か（４期）。
	9	にぶい黄褐色（10YR4/3）	シルト質粘土	炭化物・焼土粒多く含む。周溝堆積土（４期）。
	10	にぶい黄褐色（10YR4/3）	粘土質シルト	地山ブロック主体。旧カマド煙道内堆積土。人為堆積か。
	11	褐色（10YR4/4）	粘土質シルト	ローム主体。旧カマド煙道部奥壁を作り直した際の埋土。人為堆積。
	12	暗褐色（10YR3/3）	粘土質シルト	被熱したロームブロック・炭化物多く含む。旧カマド煙道崩落土か。
	13	黒色（10YR2/1）	粘土質シルト	炭化物層。旧カマド煙道内機能時の堆積。
	14	暗褐色（10YR3/3）	粘土質シルト	被熱したロームブロック・炭化物多く含む。旧カマド煙道崩落土か。
	15	黒色（10YR2/1）	粘土質シルト	炭化物層。旧カマド煙道内機能時の堆積。
	16	にぶい黄褐色（10YR4/3）	粘土質シルト	地山ブロック主体。旧カマド煙道内堆積土。
	17	黒色（10YR2/1）	粘土質シルト	炭化物層。旧カマド煙道内機能時の堆積。
	18	暗褐色（10YR3/3）	粘土質シルト	炭化物・焼土粒多く含む。旧カマド燃焼部内機能時の堆積。
	19	黒褐色（10YR3/2）	粘土質シルト	焼土粒・炭化物粒多量に含む。旧カマド燃焼部内機能時の堆積。
	20	にぶい黄褐色（10YR4/3）	粘土質シルト	しまり強い。部分的な貼床（３期）。
	21	暗褐色（10YR3/3）	粘土質シルト	炭化物粒・焼土粒多量に含む。旧カマド燃焼部内機能時の堆積（２期）。
	22	にぶい黄褐色（10YR4/3）	粘土質シルト	しまり強い。貼床（２期）。全体を嵩上げ。
	23	暗褐色（10YR3/3）	粘土質シルト	炭化物粒・焼土粒多量に含む。旧カマド燃焼部内機能時の堆積（１期）。
	24	にぶい黄褐色（10YR4/3）	粘土質シルト	炭化物粒含む。周溝堆積土（１期）。人為堆積。
	25	暗褐色（10YR3/4）	粘土質シルト	地山ブロック多く含む。炭化物粒含む。SI35A掘方埋土。

北辺周溝



1：抜取溝
2：周溝堆積土

P1



1：柱抜取穴
2：貼床
3：柱痕跡
4：掘方埋土
5：住居掘方埋土

0　1m
(S=1/60)

第29図　SI35A竪穴住居跡

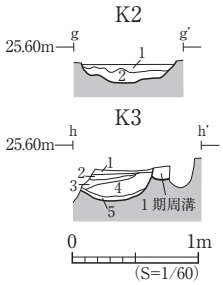
K3は１期床面で検出している。北側がSK62土坑で壊されているが、径約75cmの不整円形とみられる。深さは24cmで、断面形は逆台形である。堆積土は４層に分けられ、いずれも人為堆積である。１・３層は焼土、炭化物を多く含む粘土質シルト、２・４層は地山ブロックを多く含む粘土質シルトである。

〔その他の施設〕住居南東部の１期床面で焼面X1、土坑K4を確認している。

X1は長軸131cm、短軸66cmの不整形である。東側が低くなるように西から東へ15cmほど緩やかに傾斜しており、中央は一部赤変している。表面には炭化物片が多くみられる。

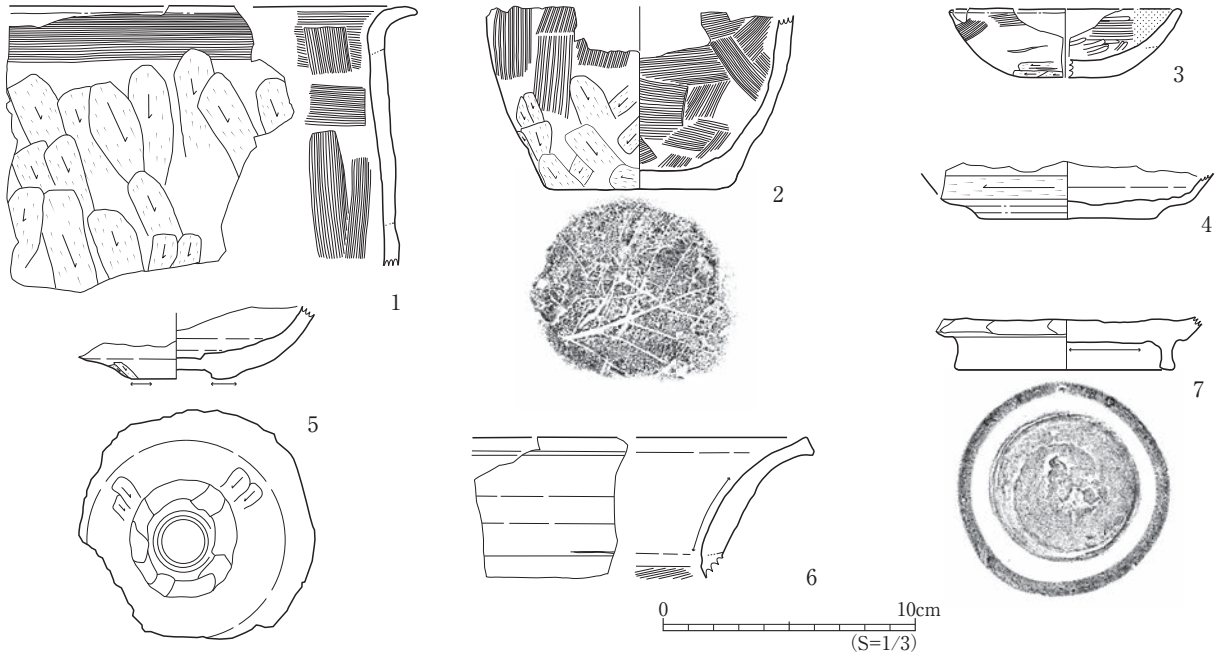
K4は径2.5mの不整円形で、深さは52cmである。断面形は逆台形である。堆積土は６層に分けられ、いずれも人為堆積である。掘方埋土を掘り込んで構築されており、住居機能時には埋め戻されている。X1の真下に位置することから、焼面の使用にあたり、除湿・水抜きの目的で構築されたと考えられる。

〔出土遺物〕貼床から転用硯（第30図７）・鉄滓、旧カマド煙道から非ロクロ調整の土師器甕（第30図１）、K2堆積土から須恵器坏（第30図４）、X1から転用砥（第30図６）、K4堆積土から非ロクロ調整の土師器甕（第30図２）、ミニチュア土器（第30図３）、転用砥（第30図５）が出土している。



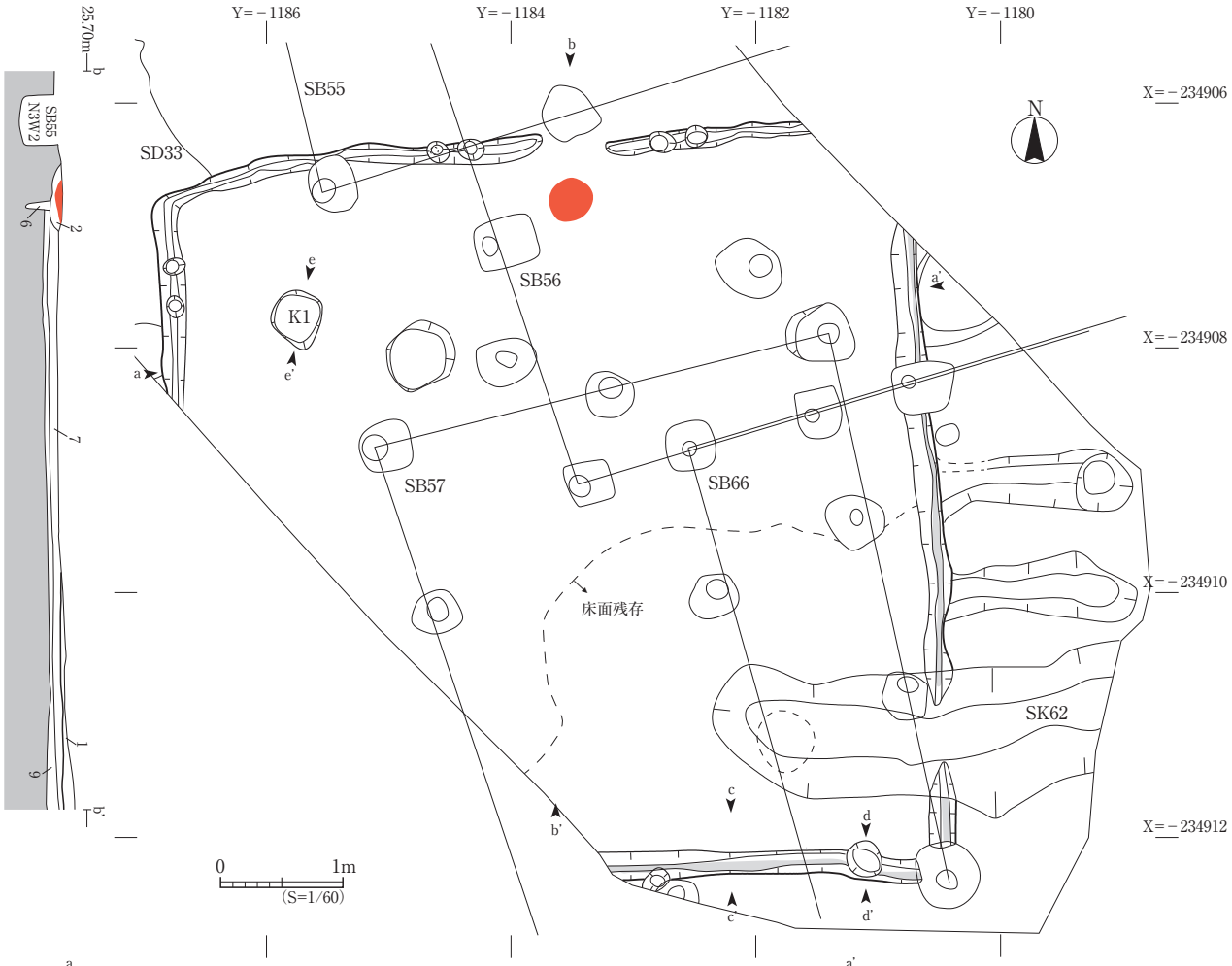
K2・K3（g−g'・h−h'）

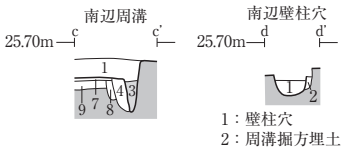
遺構	層	土　色	土　性	備　考
K2	1	黒褐色（10YR2/3）	粘土質シルト	炭化物ブロック多量に含む。焼土ブロック・地山ブロック含む。人為堆積。
	2	暗褐色（10YR3/4）	粘土質シルト	地山ブロック多く含む。炭化物粒わずかに含む。人為堆積。
K3	1	暗褐色（10YR3/3）	粘土質シルト	焼土・炭化物多く含む。人為堆積。
	2	にぶい黄褐色（10YR4/3）	粘土質シルト	炭化物まばらに含む。粘土主体。人為堆積。
	3	黒褐色（7.5YR3/2）	粘土質シルト	炭化物・焼土含む。人為堆積。
	4	暗褐色（10YR3/4）	粘土質シルト	炭化物・地山ブロック含む。人為堆積。
	5	にぶい黄褐色（10YR4/3）	粘土質シルト	炭化物粒まばらに含む。人為堆積。

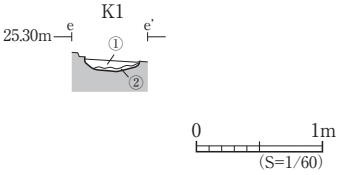


No.	器種	遺構・層	法量（cm）			特　徴	残存	写真	登録番号
			口径	底径	器高				
1	土師器　甕	旧カマド煙道・11層	—	—	—	外：ヨコナデ→ヘラケズリ　内：ヨコナデ→ヘラナデ　旧カマド煙道の構築材として使用	一部	11－14	Po60
2	土師器　甕	K4・１層	—	6.8	—	外：ハケメ→ヘラケズリ　底面：木葉痕あり　内：ヘラナデ	一部	11－13	Po59
3	ミニチュア土器	K4・１層	(9.1)	3.4	2.7	外：ヘラナデ・ヘラケズリ　内：ヘラミガキ＋黒色処理	1/4	11－16	Po61
4	須恵器　坏	K2・１層	—	(6.9)	—	外：ロクロナデ→回転ケズリ　底面：回転ヘラ切り　内：ロクロナデ	一部	11－15	Po62
5	転用砥	K4・６層	—	—	—	須恵器高坏を転用、底面磨耗	—	11－18	Po67
6	転用砥	X1焼面	—	—	—	須恵器甕口縁部を転用、内面磨耗	—	11－19	Po68
7	転用硯	貼床	—	8.6	—	須恵器壺底部を転用、体部下端を平滑に打ちかく	—	11－17	Po66

第30図　SI35A竪穴住居跡と出土土器

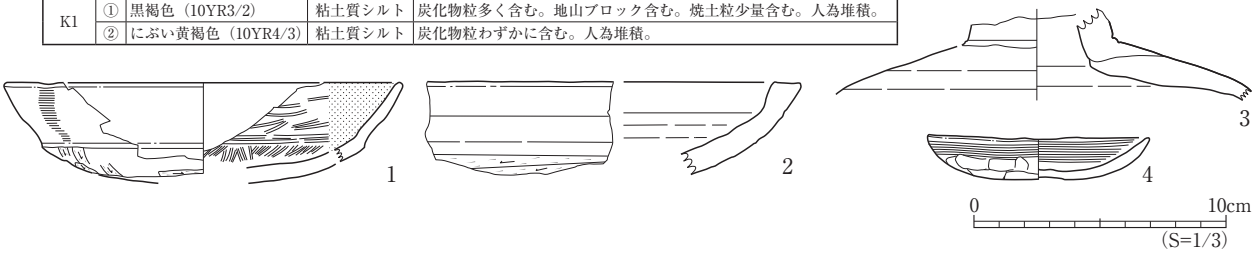






a－a'・b－b'・c－c'・e－e'

遺構	層	土　色	土　性	備　考
SI35B	1	黒褐色（10YR3/2）	粘土質シルト	地山小ブロック・焼土粒・炭化物粒少量含む。人為堆積。
	2	黒褐色（10YR2/3）	粘土質シルト	地山粒・焼土粒含む。SI35B燃焼部底面貼り直し土か。
	3	黒褐色（10YR3/2）	粘土質シルト	焼土粒・炭化物粒含む。地山ブロック少量含む。SI35B壁材痕跡。
	4	暗褐色（10YR3/3）	粘土質シルト	地山ブロック含む。焼土粒・炭化物粒少量含む。SI35B周溝掘方埋土。
	5	暗褐色（10YR3/4）	粘土質シルト	地山小ブロック含む。SI35B周溝堆積土。人為堆積。
SI35A	6	暗褐色（10YR3/4）	粘土質シルト	地山ブロック・炭化物粒含む。SI35A抜取溝。人為堆積。
	7	にぶい黄褐色（10YR4/3）	粘土質シルト	炭化物粒・焼土粒多く含む。SI35A貼床。
	8	にぶい黄褐色（10YR4/3）	粘土質シルト	炭化物粒含む。SI35A周溝堆積土。人為堆積。
	9	暗褐色（10YR3/4）	粘土質シルト	地山ブロック多く含む。炭化物粒含む。SI35A掘方埋土。
K1	①	黒褐色（10YR3/2）	粘土質シルト	炭化物粒多く含む。地山ブロック含む。焼土粒少量含む。人為堆積。
	②	にぶい黄褐色（10YR4/3）	粘土質シルト	炭化物粒わずかに含む。人為堆積。



No.	器種	層	法量（cm）			特徴	残存	写真	登録番号
			口径	底径	器高				
1	土師器　坏	堆積土	(15.7)	—	(4.1)	外：ヨコナデ→ヘラケズリ　内：ヘラミガキ＋黒色処理	1/4	11－9	Po58
2	須恵器　盤か高盤	堆積土	—	—	—	外：ロクロナデ→回転ヘラケズリ　内：ロクロナデ	一部	11－10	Po63
3	須恵器　壺	堆積土	—	—	—	内外：ロクロナデ	一部	11－11	Po64
4	かわらけ　小皿	表土	8.8	—	1.8	外：１段ナデ　内：ヘラナデ	完形	11－12	Po65

第31図　SI35B竪穴住居跡と出土土器

【SI35B竪穴住居跡】（第31図）

北東隅と南西側が調査区外に延びる。床面は南東部で残存している。

〔平面形・規模〕東西6.2m、南北6.1mで、平面形は方形とみられる。

〔方向〕東辺でみるとN－3°－Wである。

〔壁〕南辺で残存している。地山を壁としており、床面からほぼ垂直に立ち上がる。壁高は最も残りのよい南辺中央で床面から20cmある。

〔床面〕南東部で残存しており、SI35Aの床面を使用している。拡張部分については残存していないため不明である。

〔柱穴〕壁際で壁柱穴を８個検出している。柱穴は径18～28cmの不整円形で、深さは９～14cmである。堆積土は炭化物を含む暗褐色粘土質シルトである。柱痕跡は確認していない。

〔カマド〕北辺中央に付設されており、径36cmの円形の焼面のみを確認している。

〔周溝・壁材痕跡〕カマド部分を除き全周している。上幅９～25cm、下幅３～12cm、深さ６～22cmで、断面形はU字状である。堆積土は地山ブロックを含み、焼土粒、炭化物粒を少量含む暗褐色粘土質シルトで、人為堆積である。東辺・南辺では上幅３～９cm、深さ14～24cmの壁材痕跡が認められる。

〔堆積土〕堆積土は地山小ブロック、焼土粒、炭化物粒を少量含む黒褐色粘土質シルトで、人為堆積である。

〔その他の施設〕住居北西で土坑K1を確認している。径約49cmの不整円形で、深さは13cmである。断面形は皿状である。堆積土は２層に分けられ、いずれも人為堆積である。１層は炭化物粒を多く含む黒褐色粘土質シルト、２層は炭化物粒をわずかに含むにぶい黄褐色粘土質シルトである。

〔出土遺物〕堆積土から非ロクロ調整の土師器坏（第31図１）、須恵器盤または高盤（第31図２）・壺（第31図３）、表土からかわらけ小皿（第31図４）が出土している他、周溝から非ロクロ調整の土師器坏の破片が少量出土している。

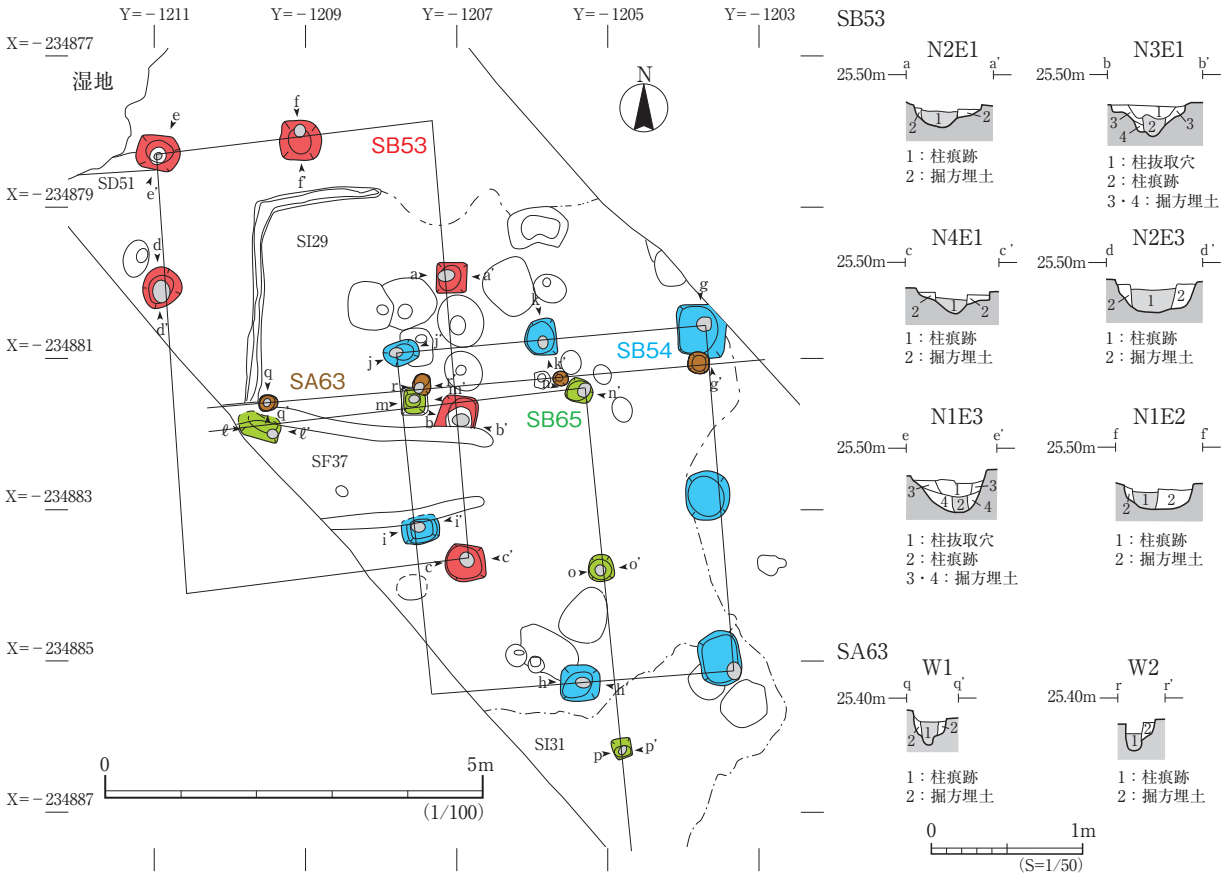
B．掘立柱建物跡・柱穴列

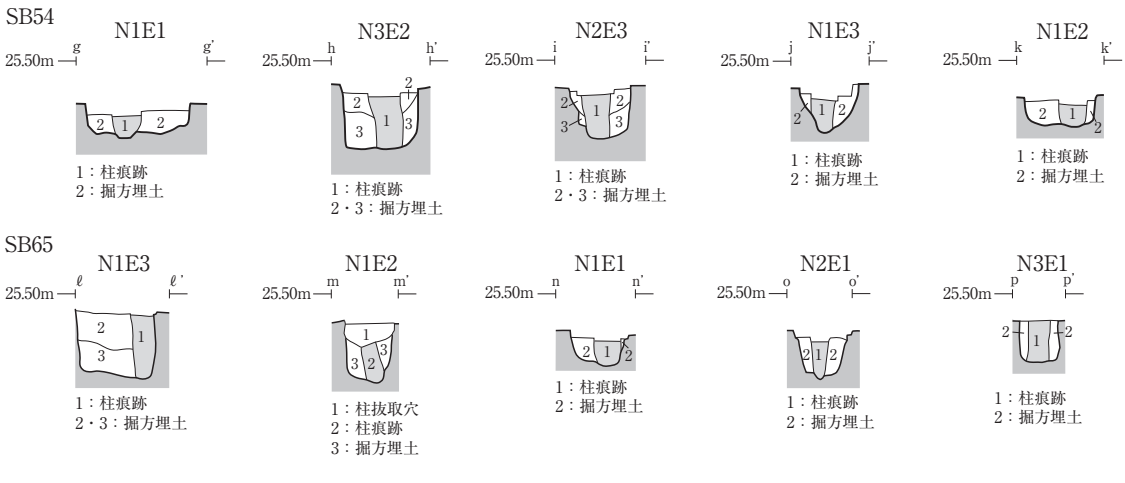
【SB53掘立柱建物跡】（第32図）

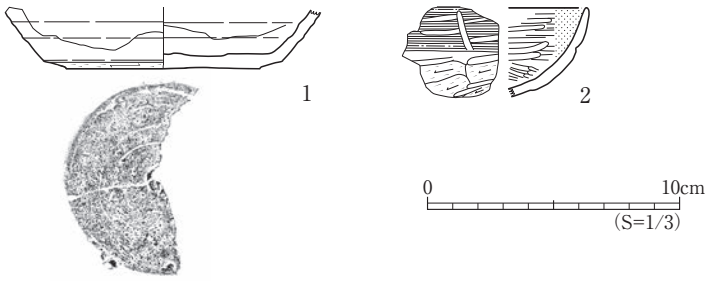
ＩB区北に位置する南北３間、東西２間の南北棟建物である。柱穴は６箇所で検出しており、全てで柱痕跡を確認し、２箇所で柱抜取穴を確認している。SI29竪穴住居跡より新しく、SF37小溝状遺構群、SD51溝跡より古い。規模は桁行が東側柱列で総長約5.6m、柱間寸法は北から（1.8m）・1.9m・1.9m、梁行が北側柱列で総長約3.8m、柱間寸法は西から1.9m・（1.9m）である。建物の方向は東側柱列でみるとN－2°－Wである。柱穴は一辺41～56cmの隅丸方形で、深さは15～28cmである。柱穴掘方埋土は暗褐色～にぶい黄褐色粘土質シルトを主体としている。柱痕跡は径17～23cmの円形である。柱痕跡から須恵器坏（第32図１）が出土している他、柱穴掘方埋土から非ロクロ調整の土師器、ロクロ調整の土師器、須恵器坏・甕の破片が少量出土している。

【SB54掘立柱建物跡】（第32図）

ＩB区北に位置する南北２間、東西２間の南北棟建物である。柱穴は７箇所で検出しており、このうち６箇所で柱痕跡を確認している。SI29・31竪穴住居跡より新しく、SA63柱穴列、SF37小溝状遺構群







No.	器種	遺構・層	法量（cm）			特　徴	残存	写真	登録番号
			口径	底径	器高				
1	須恵器　坏	SB53・N4E1柱痕跡	—	7.6	—	外：ロクロナデ→回転糸切り→回転ケズリ　内：ロクロナデ	一部	—	Po70
2	土師器　坏	SB54・N1E3掘方埋土	—	—	—	外：ヨコナデ・ヘラケズリ→ヘラミガキ　内：ヘラミガキ＋黒色処理	一部	—	Po71

第32図　SB53・54・65掘立柱建物跡、SA63柱穴列と出土土器

より古い。規模は桁行が東側柱列で総長4.6m、柱間寸法は2.3m等間、梁行が北側柱列で総長4.0m、柱間寸法は西から1.9m・2.1mである。建物の方向は東側柱列でみるとN－4°－Wである。柱穴は１辺が47～70㎝の隅丸方形で、深さは23～43㎝である。柱穴掘方埋土は黒褐色～にぶい黄褐色粘土質シルトを主体としている。柱痕跡は径16～19㎝の円形である。柱穴掘方埋土から非ロクロ調整の土師器坏（第32図２）が出土している他、ロクロ調整の土師器坏、須恵器坏・甕の破片が少量出土している。

【SB55掘立柱建物跡】（第33図）

ＩB区南に位置する東西１間以上、南北３間の建物で、東側が調査区外に延びる。柱穴は５箇所で検出しており、全てで柱痕跡を確認し、１箇所で柱抜取穴を確認している。SI35・36竪穴住居跡より新しい。規模は南側柱列で総長2.0m以上、西側柱列で総長4.9m、柱間寸法は北から1.7m・1.5m・1.7mである。建物の方向は西側柱列でみるとN－13°－Wである。柱穴は１辺が45～49㎝の隅丸方形で、深さは21～31㎝である。柱穴掘方埋土は暗褐色粘土質シルトを主体としている。柱痕跡は径10～20㎝の円形である。柱穴掘方埋土から底部が回転糸切り無調整の土師器坏、須恵器坏・甕などの破片が少量出土している。

【SB56掘立柱建物跡】（第33図）

ＩB区南に位置する東西１間以上、南北２間の建物で、東側が調査区外に延びる。柱穴は５箇所で検出しており、全てで柱痕跡を確認し、１箇所で柱抜取穴を確認している。SI35竪穴住居跡より新しい。規模は南側柱列で総長2.0m以上、西側柱列で総長4.1m、柱間寸法は北から2.0m・2.1mである。建物の方向は西側柱列でみるとN－17°－Wである。柱穴は１辺が35～43㎝の隅丸方形で、深さは14～35㎝である。柱穴掘方埋土は黒褐色・暗褐色粘土質シルトを主体としている。柱痕跡は径11～18㎝の円形である。柱穴掘方埋土から土師器、須恵器の破片や鉄滓が少量出土している。

【SB57掘立柱建物跡】（第33図）

ＩB区南に位置する南北３間以上、東西２間の南北棟建物で、西側・南側が調査区外に延びる。柱穴は７箇所で検出しており、全てで柱痕跡を確認し、２箇所で柱抜取穴を確認している。SI35竪穴住居跡より新しく、SK62土坑より古い。規模は桁行が東側柱列で総長4.6m以上、柱間寸法は北から1.5m・1.4m・1.7m、梁行が北側柱列で総長3.9m、柱間寸法は西から2.0m・1.9mである。建物の方向は東側柱列でみるとN－13°－Wである。柱穴は1辺が43～53㎝の隅丸方形・不整円形で、深さは24～41㎝である。柱穴掘方埋土は黒褐色・暗褐色粘土質シルトを主体としている。柱痕跡は径13～21㎝の円形である。柱穴掘方埋土からロクロ調整の土師器坏（第33図１）が出土している他、須恵器坏・甕などの破片が少量出土している。

【SB65掘立柱建物跡】（第32図）

ＩB区北に位置する東西２間以上、南北２間以上の建物で、西側・南側が調査区外に延びる。柱穴は５箇所で検出しており、全てで柱痕跡を確認し、１箇所で柱抜取穴を確認している。SI29・31竪穴住居跡より新しく、SA63柱穴列、SF37小溝状遺構群より古い。規模は北側柱列で総長4.2m以上、柱間寸法は東から2.3m・1.9m、東側柱列で総長4.8m以上、柱間寸法は2.4m等間である。建物の方向は東側柱列でみるとN－6°－Wである。柱穴は一辺32～55㎝の隅丸方形で、深さは24～30㎝である。柱穴掘方埋土は黒褐色・暗褐色粘土質シルトを主体としている。柱痕跡は径12～18㎝の円形である。柱穴掘方埋土から非ロクロ調整の土師器の破片が少量出土している。

No.	器種	遺構・層	法量（cm）			特　徴	残存	写真	登録番号
			口径	底径	器高				
1	土師器　坏	SB57・N2W1掘方埋土	(12.2)	(5.9)	3.1	外：(口) ロクロナデ　(体下～底) ヘラケズリ　内：ヘラミガキ＋黒色処理	一部	12－1	P072

第33図　SB55・56・57・66掘立柱建物跡と出土土器

【SB66掘立柱建物跡】（第33図）

ＩＢ区南に位置する東西１間以上、南北２間以上の建物で、東側・南側が調査区外に延びる。柱穴は４箇所で検出しており、このうち３箇所で柱痕跡を確認している。SI35竪穴住居跡より新しく、SK62土坑より古い。規模は北側柱列で総長1.9m以上、西側柱列で総長2.6m以上、柱間寸法は北から1.2m・1.4mである。建物の方向は西側柱列でみるとＮ－15°－Ｗである。柱穴は一辺40～49cmの隅丸方形で、深さは12～35cmである。柱穴掘方埋土は暗褐色粘土質シルトを主体としている。柱痕跡は径11～18cmの円形である。柱穴掘方埋土から非ロクロ調整の土師器の破片が少量出土している。

【SA63柱穴列】（第32図）

ＩＢ区北に位置する東西３間以上の柱穴列である。柱穴は４個検出しており、このうち２個で柱痕跡を確認している。SI29竪穴住居跡、SB54・65掘立柱建物跡より新しく、SF37小溝状遺構群より古い。規模は総長5.7m以上、柱間寸法は西から2.0m・1.9m・1.8mである。方向はＥ－6°－Ｎである。柱穴は径19～28cmの不整円形で、深さは22～24cmである。柱穴掘方埋土は暗褐色粘土質シルトを主体としている。柱痕跡は径10～13cmの円形である。柱穴掘方埋土から非ロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器の破片などが少量出土している。

Ｃ．小溝状遺構群

【SF37小溝状遺構群】（第26図）

ＩＢ区北に位置し、おおよそ東西方向に延びる。SI29竪穴住居跡、SB53・54・65掘立柱建物跡、SA63柱穴列より新しい。溝は２条確認しており、間隔は0.9mである。検出長は最長2.8m、上幅15～30cm、深さは12～16cmである。断面形はＵ字状である。方向はおおよそＥ－2°－Ｎである。SD44・51溝跡は規模、方向、堆積土の特徴がSF37と類似することから、一連の小溝状遺構群の可能性がある。遺物は土師器、須恵器の破片が少量出土している。

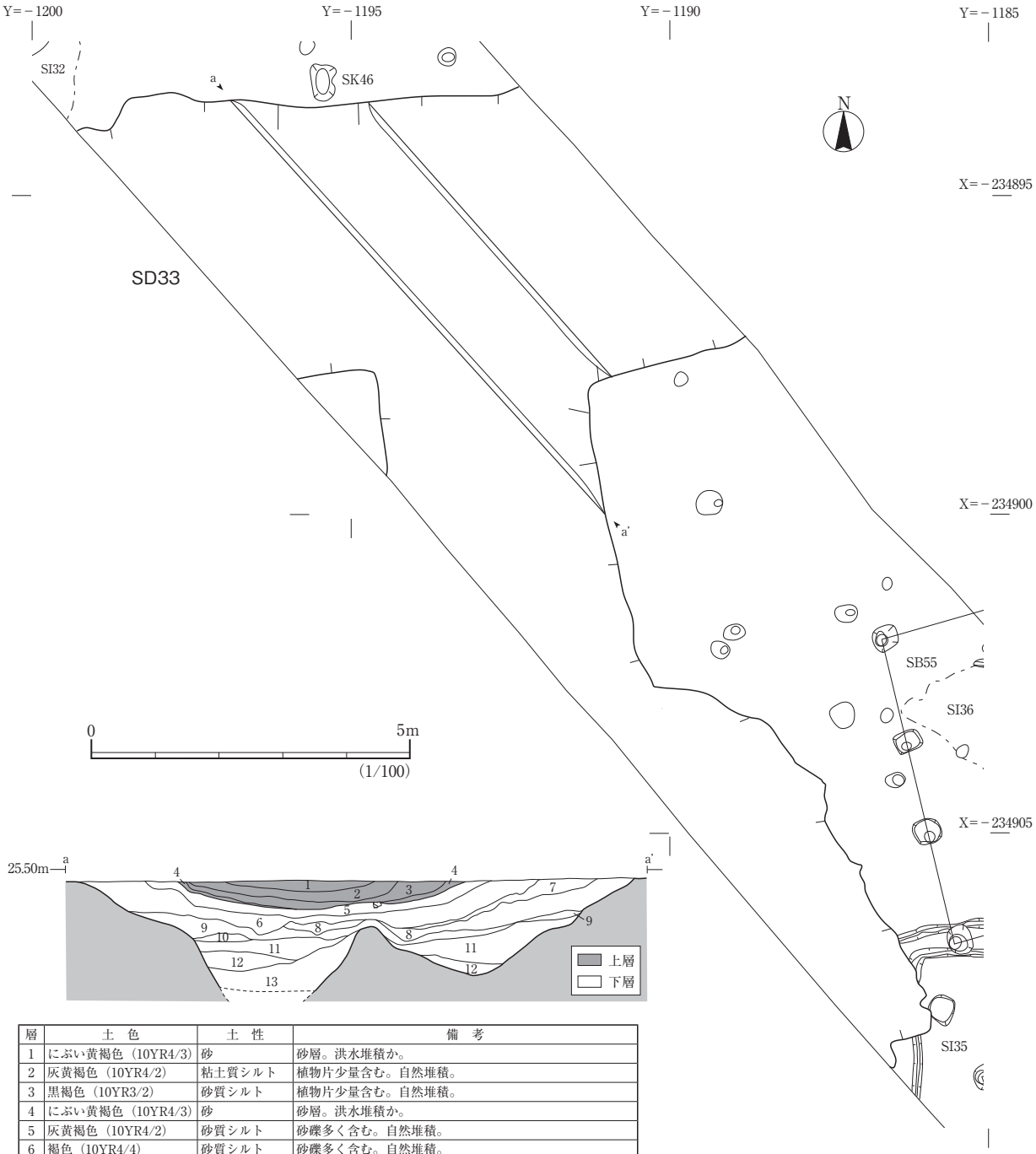
Ｄ．河川跡

【SD33河川跡】（第34図）

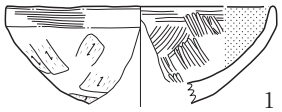
ＩＢ区中央に位置し、西流していたとみられる。SI35竪穴住居跡より古い。流路はＴ字状に分岐するものから、南側流路の埋没が進み、北側流路単一に収斂する。南北方向17.8m以上を検出しており、北側流路は上幅2.4m、深さ1.1m以上である。堆積土は全て自然堆積で、13層に分けられ、２層（上層・下層）に大別される。上層（１～４層）は北側流路単一の段階に堆積したもので、下層（５～13層）はそれ以前に堆積したものである。

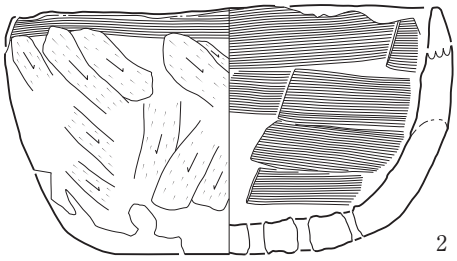
流路分岐点で、９層直下から打ち込まれた杭４本と、それに組み合う板材を検出している（写真図版６－９）。南側流路を横断する位置に設置されていることから、北側流路から南側流路へ流入する水量を調整するための施設とみられる。

遺物は、上層から非ロクロ調整の土師器坏（第34図１）、須恵器、中世陶器、下層から非ロクロ調整の土師器甑（第34図２）、ロクロ調整の土師器坏、須恵器甕、中世陶器が出土している。



層	土　色	土　性	備　考
1	にぶい黄褐色（10YR4/3）	砂	砂層。洪水堆積か。
2	灰黄褐色（10YR4/2）	粘土質シルト	植物片少量含む。自然堆積。
3	黒褐色（10YR3/2）	砂質シルト	植物片少量含む。自然堆積。
4	にぶい黄褐色（10YR4/3）	砂	砂層。洪水堆積か。
5	灰黄褐色（10YR4/2）	砂質シルト	砂礫多く含む。自然堆積。
6	褐色（10YR4/4）	砂質シルト	砂礫多く含む。自然堆積。
7	灰黄褐色（10YR4/2）	砂質シルト	砂礫少量含む。自然堆積。
8	にぶい黄褐色（10YR4/3）	粘土質シルト	砂礫多く含む。自然堆積。
9	褐灰色（10YR4/1）	粘土質シルト	樹木葉・枝を中心とする植物遺体を層状に含む。自然堆積。
10	灰色（10YR4/1）	シルト質粘土	砂礫多く含む。地山の崩落土か。自然堆積。
11	オリーブ黒（7.5Y3/2）	粘土質シルト	樹木葉・枝を中心とする植物遺体多量に含む。自然堆積。
12	オリーブ黒（7.5Y2/2）	シルト質砂	砂多く含む。植物片少量含む。自然堆積。
13	オリーブ黒（7.5Y2/1）	粘土質シルト	2～3cmの砂層と砂質シルト層の互層。自然堆積。





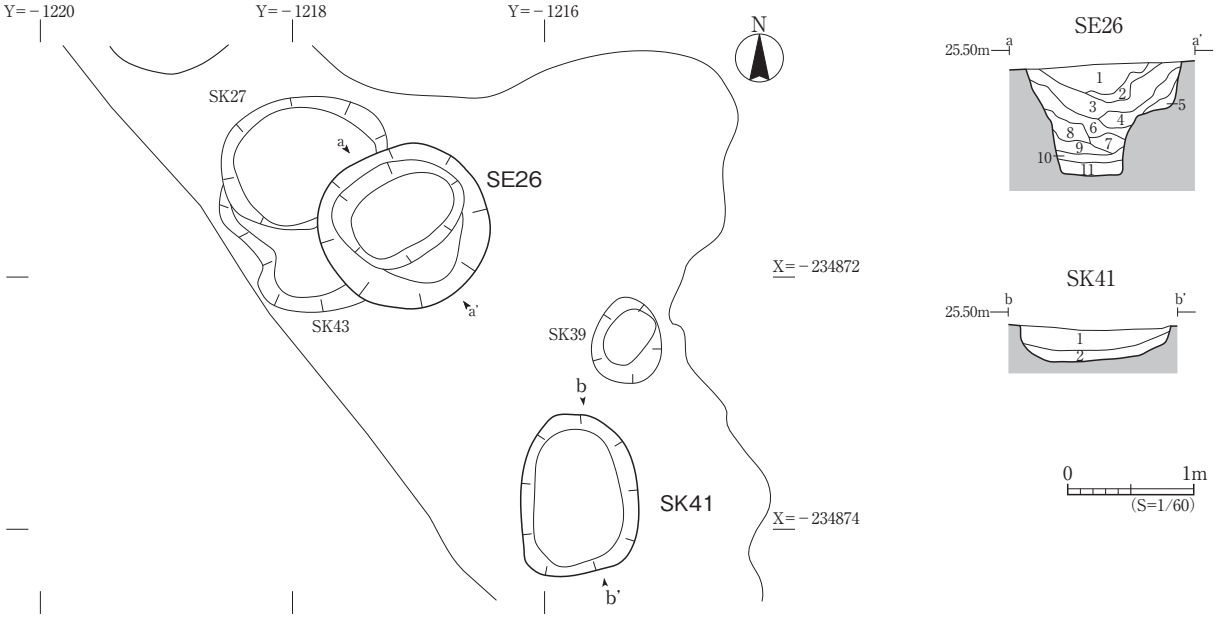
No.	器種	層	法量（cm）			特　徴	残存	写真	登録番号
			口径	底径	器高				
1	土師器　坏	堆積土上層	(10.8)	—	—	外：(口) ヨコナデ　(体～底) ヘラケズリ　内：ヘラミガキ＋黒色処理	1/2	12－6	Po73
2	土師器　甑	堆積土下層	16.6	9.5	9.9	外：ヨコナデ→ヘラケズリ　内：ヨコナデ→ヘラナデ　底部内外面穿孔	7/8	12－7	Po78

第34図　SD33河川跡と出土土器

E．井戸跡

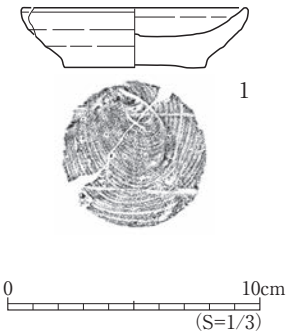
【SE26井戸跡】（第35図）

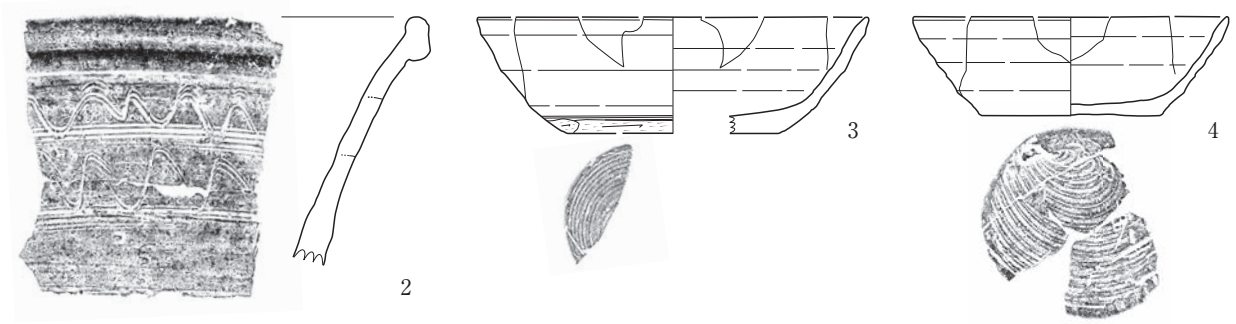
ＩＢ区北端に位置する素掘りの井戸跡である。SK27・43土坑より新しい。掘方は確認面で径131cmの不整円形、底面では長軸86cm、短軸53cmの楕円形で、深さは89cmである。断面形は逆台形で、南壁に確認面から36cmの深さで、幅30cmのテラス状の段がつく。堆積土は11層に分けられ、いずれも自然堆積である。堆積土１層から須恵器甕（第35図２）、７層からロクロ調整のかわらけ小皿（第35図１）が出土している。



SE26・SK41（a－a'・b－b'）

遺構	層	土　色	土　性	備　考
SE26	1	黒褐色（10YR3/2）	粘土質シルト	地山ブロック含む。焼土粒・炭化物粒少量含む。自然堆積。
	2	にぶい黄褐色（10YR4/3）	粘土質シルト	自然堆積。
	3	灰黄褐色（10YR4/2）	粘土質シルト	地山小ブロック含む。グライ化した粘土小ブロック少量含む。自然堆積。
	4	にぶい黄褐色（10YR4/3）	粘土質シルト	黒褐色土小ブロック・地山ブロックを含む。自然堆積。
	5	にぶい黄褐色（10YR4/3）	粘土質シルト	炭化物粒まばらに含む。自然堆積。
	6	灰黄褐色（10YR4/2）	シルト質粘土	地山小ブロック・酸化鉄多く含む。自然堆積。
	7	黒褐色（10YR3/2）	シルト質粘土	地山ブロック・酸化鉄多く含む。炭化物粒少量含む。自然堆積。
	8	オリーブ黒色（5Y3/1）	シルト質粘土	地山小ブロック含む。炭化物少量含む。自然堆積。
	9	オリーブ黒色（5Y3/1）	シルト質粘土	炭化物粒多く含む。地山小ブロック少量含む。自然堆積。
	10	明褐色（7.5YR5/8）	粘土	酸化鉄多量に含む。地山小ブロック少量含む。自然堆積。
	11	オリーブ黒色（5Y3/1）	粘土	酸化鉄含む。地山小ブロック少量含む。自然堆積。
SK41	1	灰黄褐色（10YR4/2）	粘土質シルト	炭化物多く含む。焼土粒少量含む。人為堆積。
	2	にぶい黄褐色（10YR4/3）	粘土質シルト	地山ブロック含む。人為堆積。





No.	器種	遺構・層	法量（cm）			特　徴	残存	写真	登録番号
			口径	底径	器高				
1	かわらけ　小皿	SE26・７層	(8.9)	3.6	2.4	内外：ロクロナデ　底面：回転糸切り、スノコ状圧痕	1/2	12－5	Po75
2	須恵器　甕	SE26・１層	—	—	—	外：ロクロナデ→平行沈線→櫛歯状沈線　内：ロクロナデ	一部	12－4	Po74
3	須恵器　坏	SK41・１層	(15.4)	(8.4)	4.6	外：ロクロナデ→ヘラケズリ（体下）　底面：回転糸切り（離し糸切り）　内：ロクロナデ　焼成不良	一部	12－2	Po76
4	須恵器　坏	SK41・１層	(12.5)	(7.0)	3.9	内外：ロクロナデ　底面：回転糸切り	一部	12－3	Po77

第35図　SE26井戸跡、SK41土坑と出土土器

F．土坑

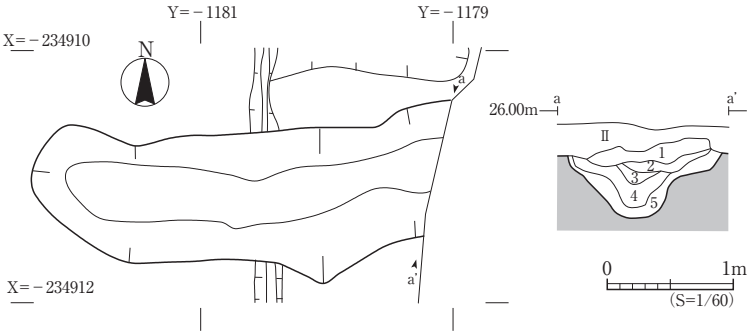
土坑は９基検出している。以下主要なもののみ記述し、その他は第３表に特徴をまとめた。

【SK41土坑】（第35図）

ＩB区北端に位置する。長軸127㎝、短軸92㎝の楕円形で、深さは30㎝である。断面形は逆台形状である。堆積土は２層に分けられ、いずれも人為堆積である。堆積土１層から須恵器坏（第35図３・４）が出土している他、ロクロ調整の土師器坏、須恵器甕の破片が少量出土している。

【SK62土坑】（第36図）

ＩB区南端に位置する。SI35竪穴住居跡、SB57・66掘立柱建物跡より新しい。東側が調査区外に延びるが、長軸3.2m以上、短軸1.0mで不整楕円形とみられる。深さは60㎝で、断面形は不整な逆台形である。堆積土は５層に分けられ、いずれも自然堆積である。堆積土から非ロクロ調整の土師器、須恵器甕、鉄滓が少量出土している。



層	土　色	土　性	備　　考
1	黒褐色（10YR3/2）	粘土質シルト	炭化物・焼土粒まばらに含む。自然堆積。
2	暗褐色（10YR3/3）	粘土質シルト	地山ブロック・炭化物少量含む。自然堆積。
3	暗褐色（10YR3/4）	粘土質シルト	地山ブロック多く含む。炭化物少量含む。自然堆積。
4	黒褐色（10YR3/2）	粘土質シルト	炭化物・地山ブロック含む。焼土粒少量含む。自然堆積。
5	暗褐色（10YR3/3）	粘土質シルト	地山ブロック多く含む。炭化物・焼土粒少量含む。自然堆積。

第36図　SK62土坑

(3) Ⅱ区

検出された遺構には、溝跡１条、河川跡２条、ピットなどがあり、土師器、須恵器、中世陶器、漆器などが出土している。遺構の確認面は全て地山面である。以下、主要なものについて説明する。

A．溝跡

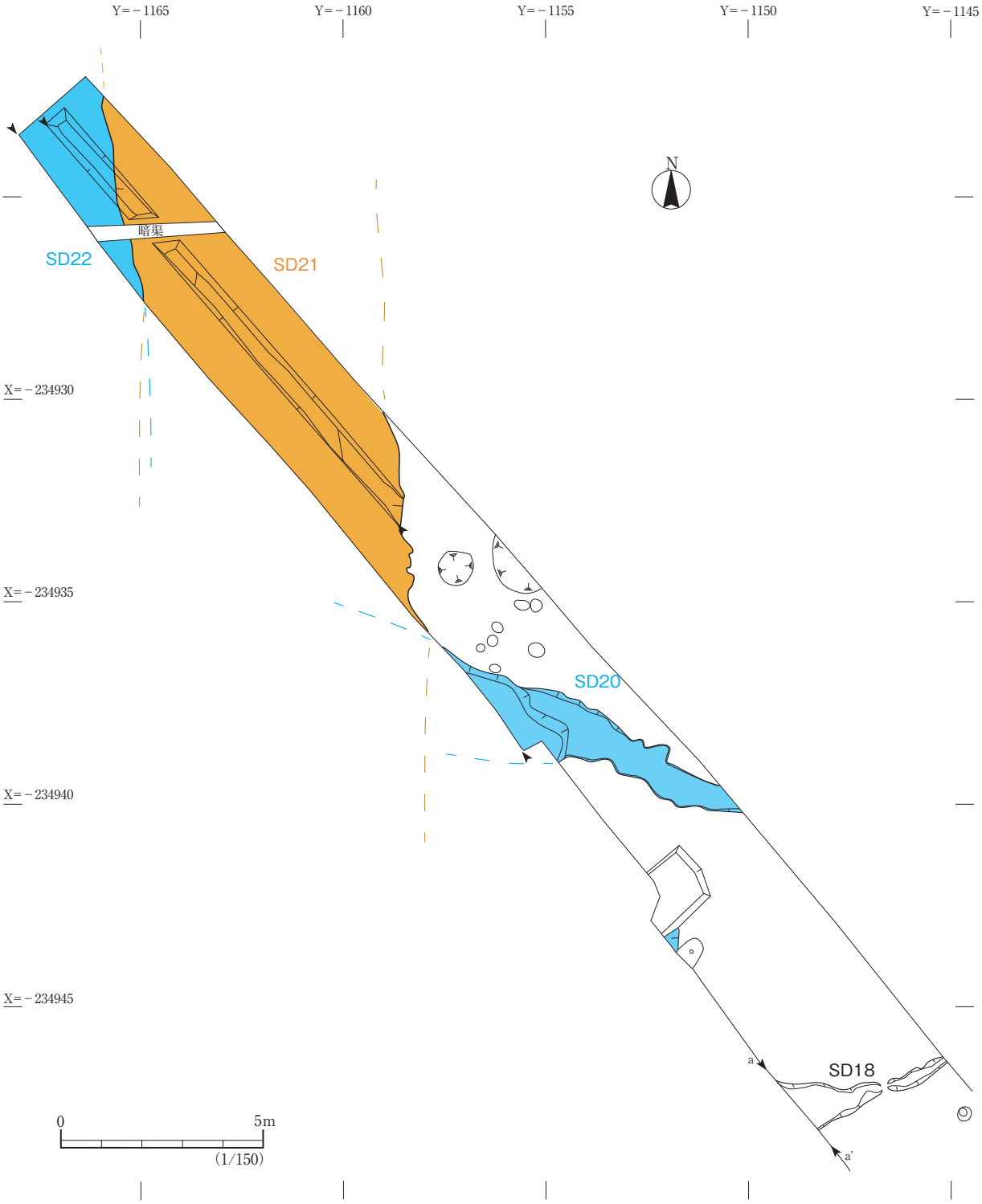
【SD18溝跡】（第37図）

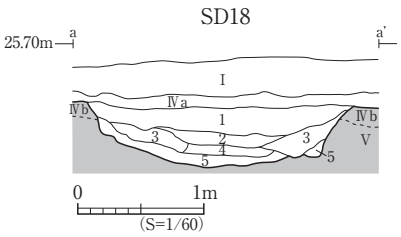
Ⅱ区南を東西方向に延びる溝で、残りが悪く中央が一部とぎれる。検出長約6.0mで、北東～南西方向に続く。他の遺構との重複関係はないが、SD22河川跡の氾濫を起源とするとみられる基本層Ⅳb層を掘り込んでいる。上幅32～65㎝、深さ16㎝で、断面形は逆台形である。堆積土は５層に分けられ、いずれも自然堆積である。堆積土から非ロクロ調整の土師器坏、須恵器甕・蓋の破片が少量出土している。

B．河川跡

【SD20・22河川跡】（第37・38図）

Ⅱ区北端・中央部に位置する河川跡で、堆積土の特徴や流路方向からSD20・22河川跡は一連のものであり、蛇行しながら北流していたとみられる。SD21河川跡より古い。検出した部分では東西方向2.2m以上、南北方向5.5m以上で、深さは1.2m以上である。堆積土は10層に分けられ、いずれも自然堆積である。SD20堆積土からミニチュア土器（第38図１）、須恵器高台坏（第38図２）が出土して

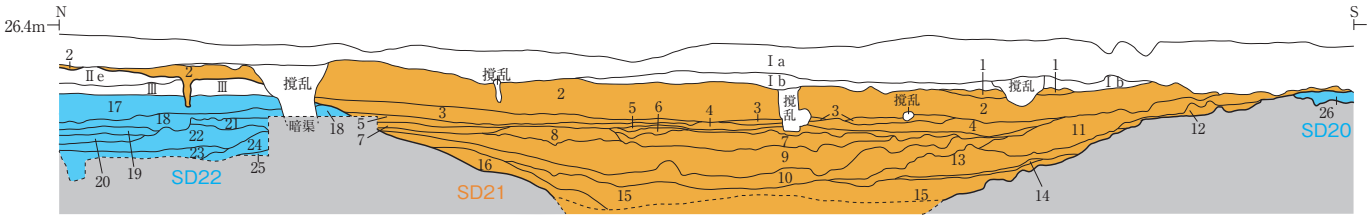




SD18（a—a'）

層	土　色	土　性	備　考
1	褐灰色（10YR4/1）	シルト	地山ブロック含む。炭化物粒少量含む。自然堆積。
2	褐灰色（10YR4/1）	シルト	炭化物粒含む。地山小ブロック少量含む。自然堆積。
3	黒褐色（10YR3/1）	粘土質シルト	炭化物含む。地山小ブロック少量含む。自然堆積。
4	褐灰色（10YR5/1）	シルト	地山ブロック多く含む。炭化物含む。自然堆積。
5	にぶい黄褐色（10YR5/3）	粘土質シルト	地山土（Ⅴ層）主体。炭化物少量含む。

第37図　SD18溝跡、SD20・21・22河川跡

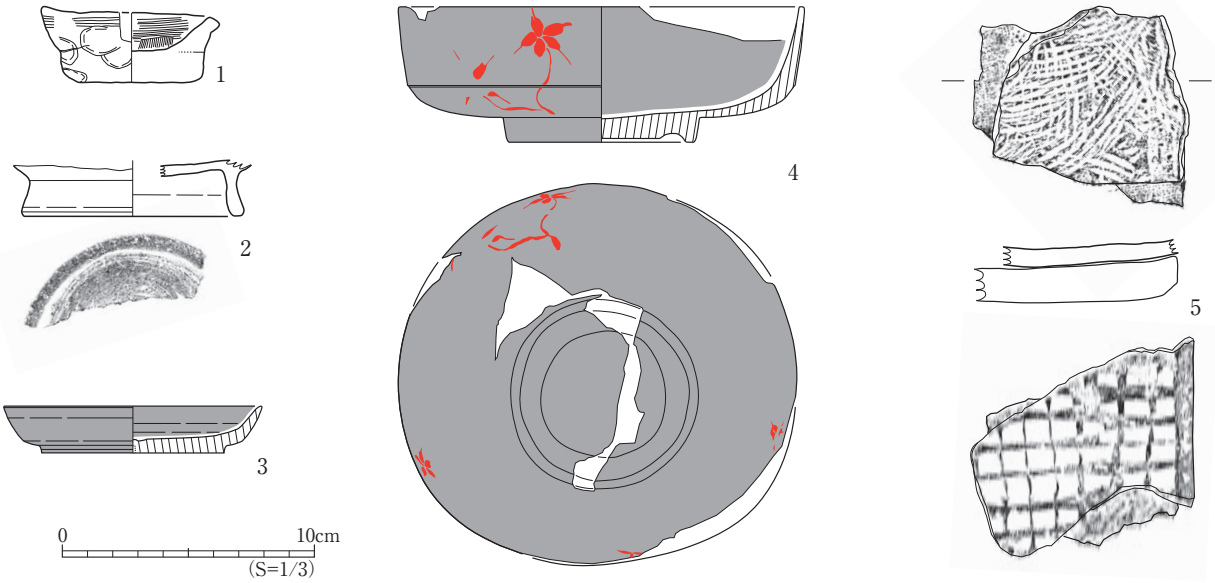


＊サブトレンチ・調査区西壁の断面を合成して作成

0　5m
(1/100)

SD20・21・22

遺構	層	土　色	土　性	備　考
SD21	1	黄灰色（2.5Y5/1）	粘土質シルト	細砂ブロック含む。炭化物少量含む。自然堆積。
	2	灰黄褐色（10YR4/2）	シルト質粘土	細砂ブロック・炭化物片・小礫多く含む。自然堆積。
	3	黄灰色（2.5Y4/1）	シルト質粘土	小礫多量に含む。黒褐色シルト質粘土小ブロックを含む。自然堆積。
	4	黄灰色（2.5Y5/1）	シルト質粘土	酸化鉄多く含む。黒褐色シルト質粘土小ブロック・小礫を含む。自然堆積。
	5	灰色（5Y4/1）	粘土	炭化物含む。地山小ブロック・小礫少量含む。自然堆積。
	6	オリーブ黒色（5Y3/1）	粘土	暗オリーブ灰色粘土ブロック含む。自然堆積。
	7	灰色（10Y4/1）	粘土	オリーブ黒色粘土ブロック含む。小礫・炭化物・スクモ少量含む。自然堆積。
	8	灰色（10Y4/1）	粘土	小礫少量含む。自然堆積。
	9	灰色（7.5Y4/1）	粘土	オリーブ黒色粘土中ブロック・砂・小礫多く含む。自然堆積。
	10	黒褐色（2.5Y3/2）	粘土	スクモ多く含む。自然堆積。
	11	黄灰色（2.5Y5/1）	シルト質粘土	黄灰色粘土小ブロック・12層起源の小ブロック・酸化鉄多く含む。炭化物小礫少量含む。自然堆積。
	12	灰黄色（2.5Y6/2）	シルト質粘土	黄灰色粘土小ブロック・酸化鉄含む。自然堆積。
	13	灰色（7.5Y4/1）	粘土	小礫含む。層下部に砂少量含む。スクモ極少量含む。自然堆積。
	14	オリーブ黒色（5Y3/1）	粘土	スクモ層。自然堆積。
	15	オリーブ黒色（10Y3/1）	粘土	スクモ多く含む。地山ブロック・下部に砂少量含む。自然堆積。
	16	灰色（5Y4/1）	砂質シルト	下部に砂を層状に含む。自然堆積。
SD22	17	灰黄褐色（10YR5/2）	シルト質粘土	酸化鉄多く含む。炭化物粒・片含む。自然堆積。
	18	灰黄褐色（10YR4/2）	シルト質粘土	酸化鉄多く含む。炭化物粒・片含む。自然堆積。
	19	黄灰色（2.5Y5/1）	シルト質粘土	酸化鉄多く含む。炭化物粒・片少量含む。自然堆積。
	20	オリーブ灰色（2.5GY5/1）	粘土	炭化物片少量含む。自然堆積。
	21	褐灰色（10YR5/1）	シルト質粘土	酸化鉄非常に多く含む。褐灰色小ブロックを少量含む。自然堆積。
	22	灰黄褐色（10YR5/2）	粘土質シルト	酸化鉄多く含む。自然堆積。
	23	黄灰色（2.5Y4/1）	シルト質粘土	植物遺体多く含む。細砂ブロック含む。水性堆積。
	24	灰黄褐色（10YR5/2）	粘土質シルト	細砂多く含む。水性堆積。
	25	灰黄色（2.5Y4/1）	シルト質粘土	植物遺体多く含む。粗砂と互層になる。水性堆積。
SD20	26	褐灰色（10YR5/1）	シルト質粘土	黒褐色粘土小ブロック・地山粒～小ブロック・炭化物粒少量含む。自然堆積。



No.	器種	遺構・層	法　量			特　徴	残存	写真	登録番号
			口径	底径	器高				
1	ミニチュア土器	SD20・堆積土	7.0	4.1	3.0	外：ヘラナデ→指オサエ　内：ヘラナデ	5/6	12－8	Po50
2	須恵器　高台坏	SD20・堆積土	—	(8.7)	—	外：回転糸切り→高台貼付→ロクロナデ　内：ロクロナデ	一部	12－9	Po51
3	漆器　小皿	SD21・堆積土下層	10.2	7.2	1.6	内外：黒色漆塗り　底面にロクロ爪痕跡あり。	完形	12－10	W02
4	漆器　椀	SD21・堆積土下層	(16.0)	(7.4)	(5.4)	外：黒色漆塗り→赤色漆絵　内：黒色漆塗り	1/3	—	W01
5	須恵器　甕	遺構確認面	—	—	—	外：平行叩き目　内：当て具痕　焼台の平瓦片（凸面に正格子叩き目、凹面に布目痕）が融着。	破片	12－11	Po52

第38図　SD20・21・22河川跡とその他の出土遺物

いる他、SD22堆積土から土師器、須恵器の破片が少量出土している。

【SD21河川跡】（第37・38図）

Ⅱ区北側に位置し南北方向に延びる河川跡で、北流していたとみられる。SD20・SD22河川跡より新しい。検出した部分では東西幅5.2m以上、南北の流路方向12.6m以上、深さは1.8m以上である。堆積土は全て自然堆積で、16層に分けられ、２層（上層・下層）に大別される。上層（１～４層）は地山主体の黄灰色～灰黄褐色シルト質粘土である。下層（５～16層）は灰色粘土層とスクモを含む黒褐色・オリーブ黒色粘土層の互層となっている。堆積土下層から、漆器椀（第38図４、写真図版７－７）・小皿（第38図３）、中世陶器が出土している他、堆積土上層から土師器、須恵器の破片が少量出土している。

Ｃ．その他の出土遺物

確認調査時に、調査区北側の遺構確認の段階で、須恵器甕の底部破片（第38図５）が出土している。外面には焼台とみられる平瓦片が融着している。平瓦片は厚さ1.3～1.5㎝で、凸面に1辺が８～11㎜の正格子叩き目、凹面に布目痕が認められる。

第３表　土抗属性表

遺構	位置	平面形	規模（m）	深さ（cm）	断面形	堆積土	出土遺物	備　考	図番号	
									平面	断面
SK13	ⅠA区	不整円形	径0.9	25	逆台形	人為堆積	須恵器・鉄滓	SK13→SF2、廃棄土坑	21	21
SK14	ⅠA区	不整楕円形	1.4×1.3	22	皿状	人為堆積	非ロクロ土師器・須恵器・鉄鏃	廃棄土坑	22	22
SK15	ⅠA区	—	1.2以上×0.7以上	50	逆台形	人為堆積	非ロクロ土師器	SI8→SK15→SF2	22	22
SK23	ⅠA区	—	1.5以上×0.9以上	56	逆台形	人為堆積	非ロクロ土師器・須恵器	SI10→SK23→SF2、廃棄土坑	22	22
SK24	ⅠA区	—	1.7以上×1.4以上	89	逆台形	１・２層人為堆積、３層自然堆積	非ロクロ土師器	SK24→SF2→SD1、廃棄土坑	24	24
SK27	ⅠB区	楕円形	1.3×1.1	34	逆台形	人為堆積	土師器	SK43→SK27→SE26	35	—
SK38	ⅠB区	不整円形	径1.8	40	箱形	自然堆積	なし		5	—
SK39	ⅠB区	不整円形	径0.6	17	逆台形	自然堆積	土師器		35	—
SK40	ⅠB区	—	1.4以上×0.4以上	52	逆台形	人為堆積	なし		5	—
SK41	ⅠB区	楕円形	1.3×0.9	30	逆台形	人為堆積	ロクロ土師器・須恵器	廃棄土坑	35	35
SK43	ⅠB区	—	1.1以上×0.5以上	22	逆台形	自然堆積	なし	SK43→SK27→SE26	35	—
SK45	ⅠB区	—	1.0以上	47	逆台形	自然堆積	非ロクロ・ロクロ土師器・須恵器	SI32→SK45→SD44	28	—
SK46	ⅠB区	不整楕円形	0.6×0.3	21	逆台形	自然堆積	須恵器		34	—
SK59	ⅠA区	—	1.5以上×1.3以上	26	皿状	人為堆積	非ロクロ土師器・須恵器	SK59→SF2、廃棄土坑	24	24
SK62	ⅠB区	楕円形	3.2以上×1.0	60	逆台形	自然堆積	非ロクロ土師器・須恵器・鉄滓	SI35→SB57・66→SK62	36	36

第４章　総括

今回の調査で出土した遺物、検出した遺構について検討し、遺構の年代や変遷、遺跡の性格などについてまとめる。

１．遺物

出土した遺物は、土師器、須恵器、中世陶器、かわらけ、漆器、石製品、鉄製品などであり、大半が非ロクロ調整の土師器、須恵器である。第４表は、遺構から出土した遺物の出土状況を示したもので、SI5竪穴住居跡、SK23土坑から比較的まとまった量の土器が出土している。ここでは、出土土器の内容について記述し、土器の特徴が類似する一括資料との比較から年代的な位置付けを行う。

第４表　各遺構の遺物出土状況

遺構	図示点数	非ロクロ調整の土師器						ロクロ調整の土師器坏	須恵器											かわらけ	鉄鏃	漆器
		坏	高坏	鉢	甕	甑	ミニチュア		坏	高台坏	盤・高盤	高坏	蓋	甕	壺	瓶	円面硯	転用硯	転用砥			
SI4	1	1																				
SI5	17	4		2	2					1			3		2	1	2					
SI7	1	1																				
SI8	1										1											
SI9	1				1																	
SI11	7	1		1	2	2					1											
SI12	1			1																		
SI29	4				2		1								1							
SI31	1	1																				
SI35A	7				2		1		1									1	2			
SI35B	4	1									1				1					1		
SB53	1								1													
SB54	1	1																				
SB57	1							1														
SB61	1												1									
SE26	2													1						1		
SK14	4	1											2								1	
SK23	11	1			6	1				2			1									
SK24	1				1																	
SK41	2								2													
SK59	1											1										
SD20	2						1			1												
SD21	2																					2
SD33	1					1																
SF2	2	1	1																			

(1) SI5竪穴住居跡出土土器（第８・９図）

土器はK1、堆積土、掘方埋土から出土している。K1出土土器と堆積土出土土器は接合関係が認められること、掘方埋土出土土器とK1・堆積土出土土器の特徴に差異が認められないことから、K1・堆積土・掘方埋土出土土器をまとめて扱うこととする。出土した土器は非ロクロ調整の土師器坏（第８図１～４）・鉢（第８図５・６）・甕（第８図７・８）、須恵器高台坏（第９図９）・蓋（第９図10～12）・壺（第９図13・15）・瓶（第９図14）・円面硯（第９図16・17）である。

土師器坏はいずれも内面にヘラミガキ・黒色処理が施されており、外面に段・沈線などの区切りをもつもの（１・３・４）と、屈曲をもたないもの（２）がある。底部は丸底で、口縁部形態は直線的もしくは内彎気味の外傾である。外面の器面調整は口縁部がヨコナデ、体部から底部がヘラケズリのものが主体で、全体がヘラミガキのもの（１）がある。土師器鉢は、体部がやや丸みをもって立ち上がり口縁部で外傾するもの（６）と、体部に膨らみをもち口縁部は直立気味に立ち上がるもの（５）がある。器面調整は口縁部の内外面がヨコナデ、体部外面はハケメ後にヘラケズリ、内面はヘラナデである。土師器甕

は長胴形のもの（7）と胴張り形のもの（8）がある。いずれも器面調整は口縁部の内外面はヨコナデ、胴部外面はハケメ、内面はヘラナデである。

須恵器高台坏（9）は体部と底部の境が明瞭で、体部から口縁部が直立する。底部と高台の接地面がほぼ同じ位置にあり、底部は切り離し後に回転ヘラケズリ調整されている。須恵器蓋は内面にカエリのあるもの（11・12）とないもの（10）がある。内面にカエリのあるものはカエリが小さく、つまみは扁平な宝珠形である。内面にカエリのないものは、口縁端部が屈曲し斜め下方に折れ曲がり、つまみは扁平な宝珠形で、器形や胎土の特徴から静岡県湖西窯跡群の製品とみられる。須恵器壺は破片資料であるが、長頸壺とみられる肩部が屈曲するもの（15）と丸底で胴下部にヘラケズリが施されるもの（13）がある。須恵器瓶（14）は口頸部の破片資料で、頸部は細く立ち上がり口縁部が外反して大きく開き、口縁部と頸部の境に沈線がめぐる。須恵器円面硯は、脚部が端部にかけてやや開き、方形の透かしを6個有するもの（16）と縦位の細長い透かしを有するもの（17）がある。後者は、蹄脚硯をモデルに製作されたものとみられる。

土師器はその器形や器面調整から、栗囲式（氏家1957）の範疇に含まれるものである。村田晃一氏による宮城県中・南部における古墳時代後期から奈良時代の編年（村田2007）と比較すると、坏の外面に段や屈曲をもつものともたないものがあること、有段丸底坏の内面に屈曲がなく、口縁部が外反するものがないことから、5段階の特徴に共通する。村田編年の5段階は7世紀末～8世紀初頭に位置付けられている。また、類似する特徴をもつ一括資料としては仙台市南小泉遺跡SI1竪穴住居跡出土土器（仙台市教育委員会2003）、長町駅東遺跡SI33竪穴住居跡出土土器（仙台市教育委員会2008）が挙げられ、これらは7世紀末～8世紀初頭に位置付けられている。

須恵器の類例を生産遺跡に求めると、福島県相馬市善光寺遺跡（福島県教育員会1988）が挙げられる。高台坏（9）は善光寺4型式の坏Hに対応すると考えられる。内面にカエリのある蓋（11・12）は善光寺4型式の坏蓋Cと法量・器面調整が類似するが、坏蓋Cのカエリは大きく、相違点もみられる。方形の透かしを6個有する円面硯（16）は、善光寺4型式の基準資料とされている2号B窯跡出土円面硯に器形・法量・器面調整が類似する。善光寺4型式は、坏・蓋を中心とする近畿・東海地方の各編年との比較から、7世紀後葉から末葉に位置付けられている（註1）。この他、湖西窯跡群の製品とみられる内面にカエリのない蓋（10）は、後藤建一氏による湖西編年（後藤1987）Ⅳ期第2小期の坏蓋Adに対応し、8世紀初頭頃に位置付けられている。

以上、土師器、須恵器の検討から、SI5出土土器の年代は、7世紀後葉～8世紀初頭に収まるものと考えられる。

（2）SK23土坑出土土器（第23図）

土器は堆積土1・2・4層から出土している。堆積土はいずれも人為堆積であり、各層から出土した土器は相互に接合関係が認められることから、まとめて扱うこととする。出土した土器は非ロクロ調整の土師器坏（第23図1）・甕（第23図2～6・8）・甑（第23図7）、須恵器高台坏（第23図9・10）・蓋（第23図11）である。

土師器坏（1）は体部内外面に屈曲をもたず、口縁はやや内彎気味に外傾する。底部は丸底である。外面の器面調整は、口縁部はヨコナデ後に部分的に最終調整の粗いヘラミガキ、体部はヘラケズリである。内面はヘラミガキ・黒色処理が施される。土師器甕は長胴形で、胴下部にやや膨らみをもつ大型のもの（6）がある。器面調整は口縁部の内外面はヨコナデ、胴部外面はハケメ後に胴下部にヘラ

ケズリが主体で、部分的にヘラミガキを施すもの（８）がある。胴部内面はヘラナデである。土師器甑（７）は無底式のもので、胴部の器面調整は、内外面ともに最終調整がヘラミガキである。

須恵器高台坏（９・10）は体部と底部の境が明瞭で、体部から口縁部が直線的に外傾・直立する。須恵器蓋（11）は内面にカエリのないもので、天井部からやや外反気味に口縁部に移行し、口縁端部は屈曲し下方に折れ曲がる。つまみは扁平な宝珠形である。

土師器は破片資料が多く、器形や器面調整の特徴を捉えられるものが少ない。村田編年（村田2007）と比較すると、坏の内外面に屈曲をもたないこと、無底式の甑を伴うことから、４段階の後半から５段階にあたると考えられる。４段階は７世紀中頃から後半、５段階は７世紀末～８世紀初頭に位置付けられている。

須恵器の類例を生産遺跡に求めると、善光寺遺跡、仙台市大蓮寺窯跡（仙台市教育委員会1993）が挙げられる。高台坏は善光寺４型式の坏Ｈに対応すると考えられる。大蓮寺窯跡出土須恵器は５号窯跡とその灰原である１号灰原・１号溝跡の出土土器を中心にＡ群・Ｂ群に分類されており、SK23出土高台坏は器形・器面調整の特徴がＡ群と類似するが、Ａ群の蓋は内面にカエリのあるものを主体とする点で相違がある。Ｂ群をみると、蓋は器形・器面調整の特徴がSK23出土の蓋と類似するが、口径が18.5～22.2cmと大型な点で違いがみられる。また、蓋とセットになる高台坏は底部と体部の境が不明瞭で、口径も大きい。SK23出土の須恵器高台坏・蓋はＡ群とＢ群の中間的な様相を示しているとみられる。Ａ群は７世紀末葉～８世紀初頭、Ｂ群は８世紀初頭～前葉に位置付けられている。

以上、土師器、須恵器の検討から、SK23出土土器の年代は、７世紀後葉～８世紀初頭に収まるものと考えられる。

２．遺構

(1) 遺構の年代と特徴

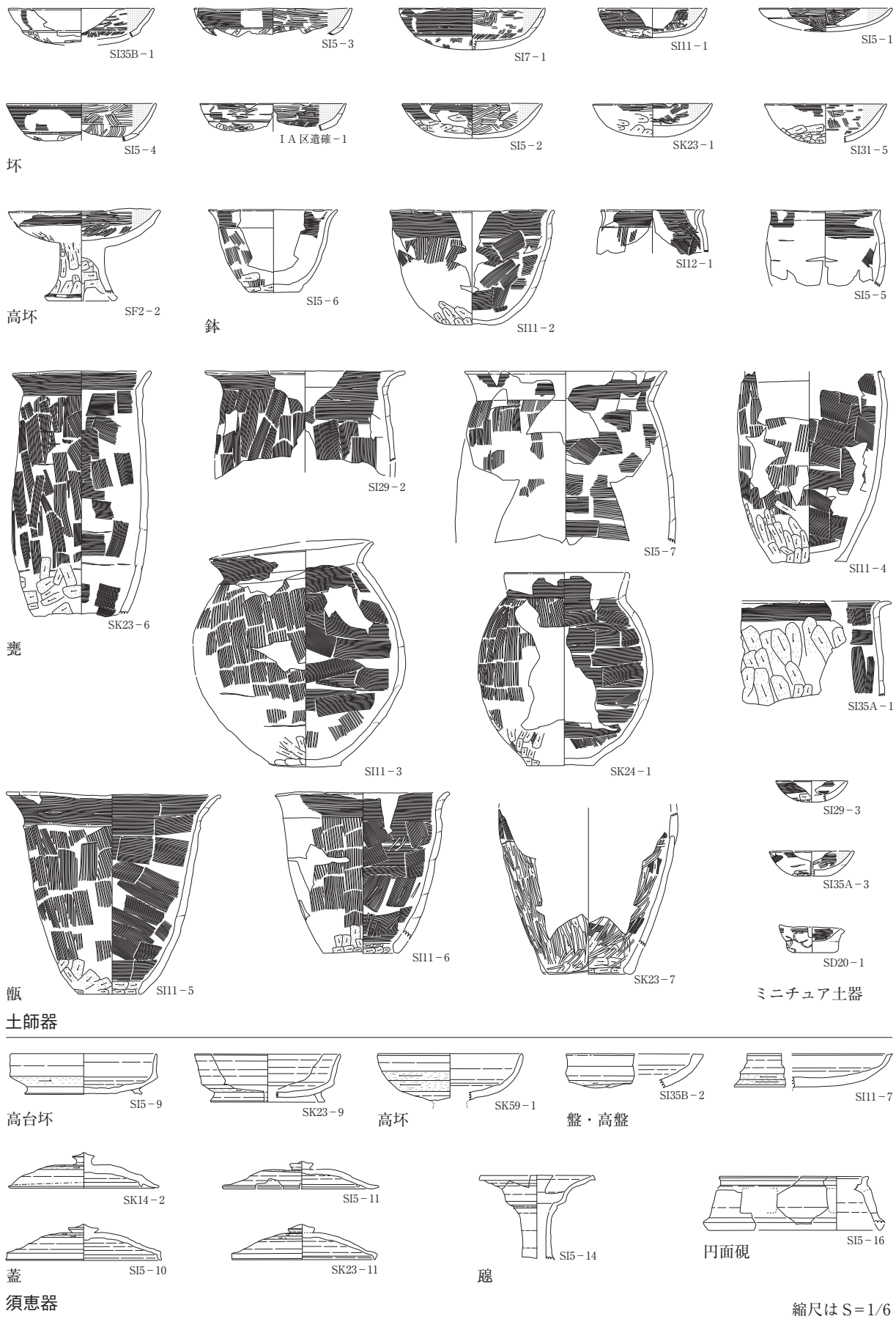
出土遺物の年代や遺構の重複関係などをもとに、各遺構の年代を検討し、その特徴について述べる。

Ａ．竪穴住居跡

①年代

前節の遺構出土土器の検討から、SI5は７世紀後葉～８世紀初頭に位置付けられる。この他の住居については、遺物の出土量が少なく個別に年代を検討することができないが、SI4・7・9・11・12・29・31・35A・35B出土土師器は、SI5、SK23出土土師器と類似する特徴をもつことから、概ね７世紀後葉～８世紀初頭に収まるものと考えられる。

SI8は、SI7・9との重複関係（SI7→SI8→SI9）から、７世紀後葉～８世紀初頭に位置付けられる。SI10・32は年代が特定できる遺物が出土していないが、SI10はSI9・SK23より古く、SI32はSI31より古いこと、調査区内で７世紀後葉より古い遺物が出土していないことから、同様の時期とみられる。SI36は遺物が出土していないが、SB55建物跡より古いこと、遺構の分布が他の住居と同様であることから、他の住居と同時期と考えたい。



縮尺はＳ＝1/6

第39図　７世紀後葉～８世紀初頭の主な土器

第５表　竪穴住居跡属性表

遺構	平面形	規模（東西m・南北m）	方向	床面の残存	床面	主柱穴	周溝	カマドの位置	貯蔵穴	主な重複関係	その他
SI4	隅丸方形	3.9・3.8	N－2°－E	西半	掘方埋土	(3)	なし	東辺中央	中央東・カマド左	SI7→SI4	
SI5	不整方形	3.5以上・3.9	N－4°－W	全体	掘方埋土	(3)	全周	—	—		土坑１
SI7	—	5.5以上・4.4以上	—	×	掘方埋土	(1)	—	—	—	SI7→SI8→SI9	土坑１
SI8	—	3.5以上・2.1以上	E－5°－N	×	掘方埋土	(1)	北辺で残存	—	—	SI7→SI8→SI9	土坑１
SI9	—	4.3以上・4.1	N－6°－W	北東以外	掘方埋土・貼床	なし	全周	北辺東	北東隅・カマド右	SI8・SI10→SI9	床下土坑１
SI10	—	3.3以上・5.1以上	—	×	掘方埋土	(1)	—	—	—	SI10→SI9	
SI11	隅丸方形	4.7・4.6	—	×	掘方埋土	4	北辺・南辺で残存	—	—		土坑４
SI12	不整方形	3.9・3.8	N－9°－W	南西以外	掘方埋土・貼床	4	全周	—	なし		
SI29	方形か	6.3以上・6.8	N－3°－W	×	掘方埋土	(2)	北西で残存	北辺中央	中央北・カマド右	SI32→SI31→SI29	焼面１・床下土坑４
SI31	—	3.8以上・2.6以上	—	×	掘方埋土	—	あり	—	—	SI32→SI31→SI29	
SI32	—	2.9以上・4.0以上	—	×	掘方埋土	—	あり	—	—	SI32→SI31→SI29	埋戻し
SI35A	方形	5.6・5.6	N－3°－W	南東	掘方埋土・貼床	(2)	全周（抜取溝）	東辺南寄り（旧） 東辺中央（新）	南東・カマド右 中央東・カマド左	SI35A→SI35B	焼面１・土坑１
SI35B	方形	6.1・6.2	N－3°－W	南東	SI35A床面・地山？	壁柱穴	全周（壁材痕）	北辺中央	—	SI35A→SI35B	埋戻し・土抗１
SI36	—	—	—	×	掘方埋土	—	北辺で残存	—	—		土坑１

②特徴

Ⅰ区で14軒の竪穴住居跡が検出されており、その特徴を第５表にまとめた。調査区が幅約６ｍと狭いため、全体を検出できたものはない。また、床面が残存しておらず、掘方埋土のみを検出したものが多い。住居はⅠ区中央の湿地、ⅠB区中央のSD33河川跡を挟んで、ⅠA区、ⅠB区北、ⅠB区南の３箇所に概ねまとまっている。重複関係にあるものが多く、最大で５軒の重複関係が認められる。住居の方向はほぼ真北方向を基調とする。規模は長辺が約3.9～6.8mの間に収まり、４～5.5m前後のものが主体である。

主柱穴は住居平面形の対角線上に４個を配置するのが基本形で、壁柱穴のみで構成されるものが１軒ある（SI35B）。床は基本的に掘方埋土の上面である。貼床が認められるものが３軒あり、SI35Aでは、床面全面の嵩上げやカマド前面を中心とした部分的な補修を行っている。周溝は大半の住居で検出されており、カマド部分を除いて壁の直下をめぐる。周溝内の壁側に沿って壁材痕跡が確認される例（SI35B）があり、その他も周溝の堆積土が人為堆積であることから、周溝は主に壁材の据え方であったと考えられる。

カマドは５軒で検出したが、いずれもカマド本体は残存していない。カマドは住居の北辺・東辺に付設され、煙道はいずれも長く延びる構造のものである。貯蔵穴はカマドの右もしくは左に設けられる。SI35Aでは、貯蔵穴の位置が床面の嵩上げに伴い、カマドの右から左に移動している。この他、掘方埋土を掘り込んで構築され、住居機能時には人為的に埋め戻された土坑が４軒で検出されている。その機能については不明な点が多いが、SI35AのK4はX1焼面の真下に位置することから、除湿・水抜きの目的で構築されたと考えられる。また、貼床される例（SI9・SI35A）は、住居機能時に沈下した床面を補修した痕跡であると推測される。

Ｂ．掘立柱建物跡

①年代

検出した掘立柱建物跡の柱穴は、掘方の平面形が隅丸方形を主体とし、一辺40～50cm前後の規模のものが多い（第６表）。また、柱穴の埋土は基本層Ⅴ層主体で、古代に属するものと考えられる。SB57柱穴掘方埋土から出土したロクロ調整の土師器坏（第33図１）は、口縁部から体部にかけて内彎する。底部の切り離し技法は不明で、体下部から底部に手持ちヘラケズリの再調整が施されている。

第６表　掘立柱建物跡属性表

遺構	位置	規模		棟方向	総長（m）／測定柱列／柱間寸法（m）						方向	柱穴の平面規模（cm）	備考
		東西	南北		東西			南北					
SB19	ⅠA区中央	２間以上	２間	—	4.2以上	北	2.1等間	4.0	東	2.0等間	N－9°－W	一辺40～62	SI9・SI11→SB19
SB25	ⅠA区中央	１間	１間	—	1.8	北	1.8	1.5	西	1.5	N－9°－W	一辺42～48	SI8→SI9→SB25
SB53	ⅠB区中央	２間	３間	南北棟	3.8	北	1.9・(1.9)	5.6	東	(1.8)・1.9・1.9	N－2°－W	一辺41～56	SI35→SB53→SD51・SF37
SB54	ⅠB区中央	２間	２間	南北棟	4.0	北	1.9・2.1	4.6	東	2.3等間	N－4°－W	一辺47～70	SI31→SI29→SB54→SA63→SF37
SB55	ⅠB区南	１間以上	３間	—	2.0以上	南	2.0	4.9以上	西	1.7・1.5・1.7	N－13°－W	一辺45～49	SI35・36→SB55
SB56	ⅠB区南	１間以上	２間	—	2.0以上	南	2.0	4.1	西	2.0・2.1	N－17°－W	一辺35～43	SI35→SB56
SB57	ⅠB区南	２間	３間以上	南北棟	3.9	北	2.0・1.9	4.6以上	東	1.5・1.4・1.7	N－13°－W	一辺43～53	SI35→SB57→SK62
SB60	ⅠA区北	２間以上	３間以上	—	2.2以上	北	2.2	6.7以上	東	2.3・2.1・2.3	N－6°－W	径24～40	SB60→SB61
SB61	ⅠA区北	１間以上	２間以上	—	2.2以上	北	2.2	3.7以上	東	1.5・2.2	N－3°－W	一辺49～68	SB60→SB61
SB65	ⅠB区中央	２間以上	２間以上	—	4.2以上	北	2.3・1.9	4.8以上	東	2.4等間	N－6°－W	一辺32～55	SI29・31→SB65→SA63→SF37
SB66	ⅠB区南	１間以上	２間以上	—	1.9以上	北	1.9	2.6以上	西	1.2・1.4	N－15°－W	一辺40～49	SI35→SB66→SK62

内面はヘラミガキ・黒色処理が施されている。この土師器坏は表杉ノ入式（氏家1957）の範疇に含まれるもので、角田郡山遺跡SK134土壙・SD105溝跡出土土器（角田市教育委員会2002）に類例があり、その年代から９世紀中頃に位置付けられると考えられる。また、SB53・54・55でも柱穴掘方埋土からロクロ調整の土師器の小片が出土している。これらの出土遺物の年代と竪穴住居跡やSF2小溝状遺構群との重複関係から、建物跡の年代はおおよそ９世紀以降と推測される。

②特徴

Ⅰ区で側柱建物跡が11棟検出されている。調査区の幅が狭いため、規模がわかるものは３棟に限られる。建物跡の方向は、北で西に２～17°偏り、ⅠB区南端に位置するSB55・56・57・66は13～17°とやや偏りが大きい。建物跡は、SB53・54・65、SB56・57・66の位置関係から、少なくとも３時期の変遷が想定される。このうち、SB55・57は西側柱列の柱筋が揃うことから、同時期に存在した可能性が考えられる。また、柱穴の重複関係からSB60はSB61より古い。

Ｃ．小溝状遺構群

SF2は堆積土に中世以降の旧表土とみられる基本層Ⅲ層が含まれないこと、出土遺物が古代のものに限られることから、古代に属すると考えられ、竪穴住居跡、掘立柱建物跡より新しいことから、古代でもおおよそ10世紀以降に属すると推測される。

SF37は基本層Ⅲ層を掘り込んでいることから、中世以降と考えられる。

Ｄ．河川跡

SD20・22は基本層Ⅲ層に覆われることから、古代に属すると考えられる。SD33は堆積土から中世陶器の破片が出土していることから、中世以降に位置付けられると考えられる。

SD21は、堆積土下層で漆器小皿・椀（第38図３・４）が出土している。漆器椀は体部下半に稜がつく「一文字腰」と呼ばれるもので、外面に赤色漆で漆絵が描かれている。このような特徴の漆器椀は仙台領内で、17世紀後半に出現し、18世紀以降に一般的になると指摘されていることから（関根1998）、SD21の年代は18世紀以降と考えられる。

Ｅ．井戸跡

SE26は堆積土７層からロクロ調整のかわらけ小皿（第35図１）が出土している。底部の切り離し

技法は回転糸切り無調整で、スノコ状圧痕が認められる。大古町遺跡SE2井戸跡出土土器（丸森町教育委員会2000）、仙台市中野高柳遺跡SX1397遺物包含層中・下層出土土器（宮城県教育委員会2006）に類例があり、その年代から13世紀代に位置付けられると考えられる。

Ｆ．土坑

前節の遺構出土土器の検討から、SK23は７世紀後葉～８世紀初頭に位置付けられる。SK13・14・24・59は堆積土からSI5・SK23出土土器と類似する特徴をもつ土器が出土していることから、概ね７世紀後葉～８世紀初頭に収まるものと考えられる。これらの土坑は、いずれも人為堆積で、廃棄土坑として利用されたとみられる。

SK41出土須恵器坏（第35図３・４）は、体部が緩やかに立ち上がる椀形のもので、口縁部は外傾する。底径／口径比は約0.55で、口径に対して底径が小さい。底部は、回転糸切り後に体部下端に手持ちヘラケズリによる再調整を施すものと、回転糸切り無調整がある。石巻市関ノ入遺跡11号窯跡出土土器（河南町教育委員会2004）に類例がみられ、その年代から９世紀前葉に位置付けられると考えられる。

SK15はSI9竪穴住居跡より古く、SF2小溝状遺構群より新しいことから、８世紀前葉以降の古代に属すると考えられる。SK27・43は、SE26井戸跡より古く、堆積土が基本層Ｖ層主体であることから、古代に属するものと考えられる。SK38・45・62は堆積土の特徴から、中世以降に属するとみられる。

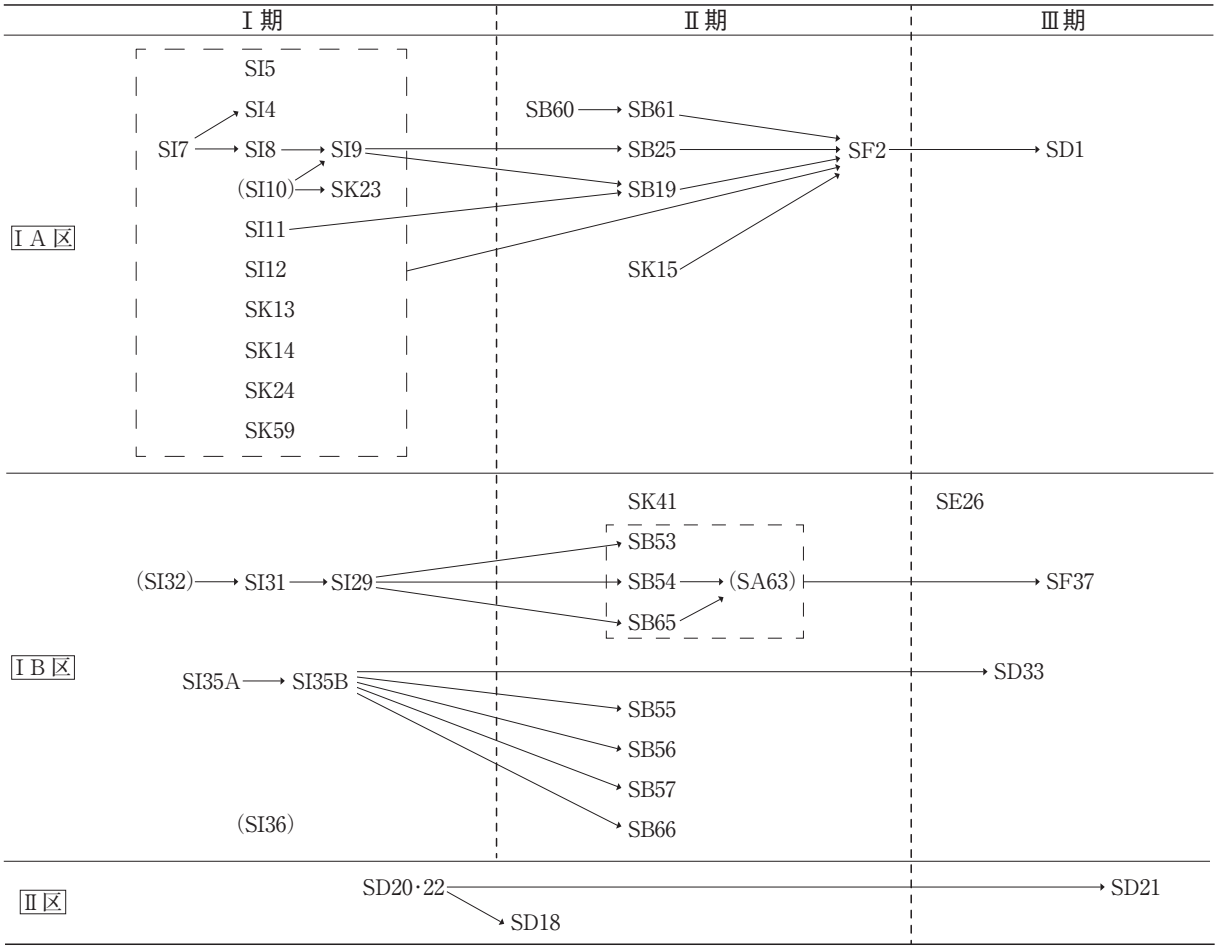
(2) 遺構の変遷

前項で検討した各遺構の年代は、Ⅰ期：７世紀後葉～８世紀初頭、Ⅱ期：９世紀以降の古代、Ⅲ期：中世～近世の大別３時期に分けることができる。主な遺構の年代と重複関係を第40図に示した。

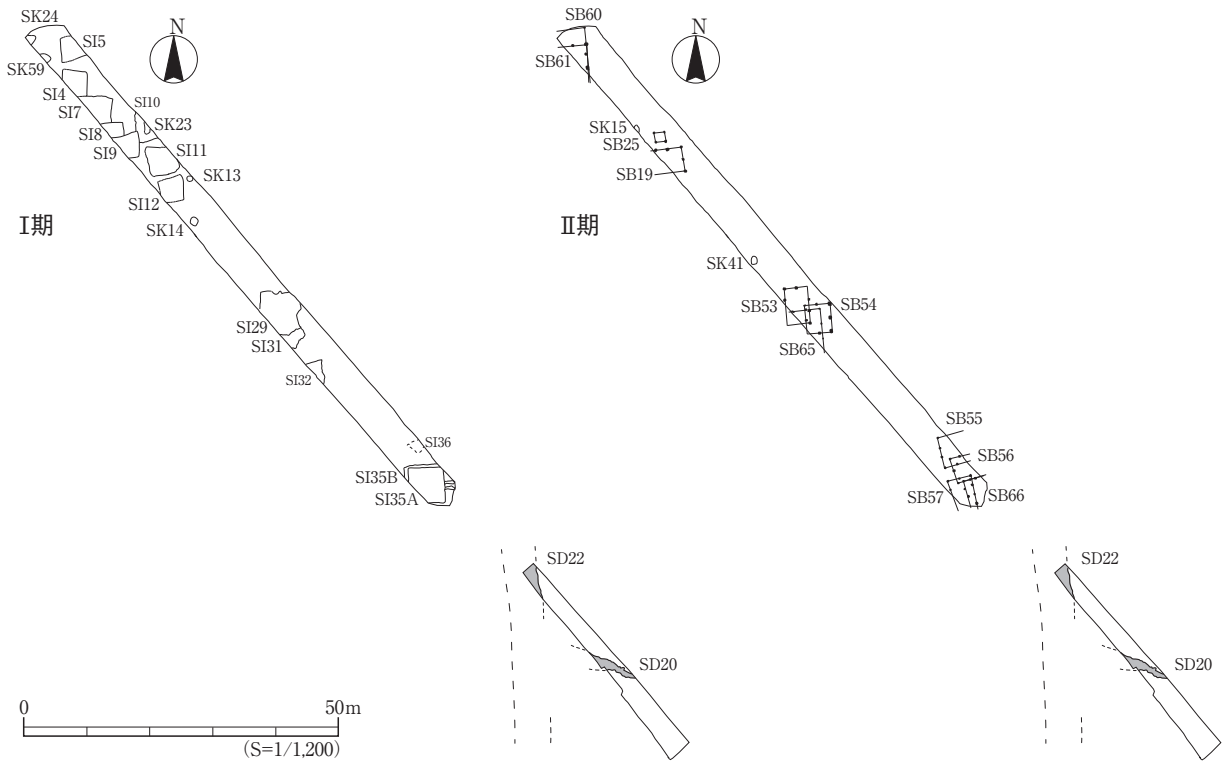
Ⅰ期（７世紀後葉～８世紀初頭）には、竪穴住居跡14軒（SI4・５・７・８・９・10・11・12・29・31・32・35A・35B・36）、土坑５基（SK13・14・23・24・59）が該当し、いずれもⅠ区に分布する（第41図）。SK23はSI10の廃絶後の窪みを利用して構築されているが、この他の土坑と住居には重複関係は認められない。方向をほぼ真北に合わせる住居群が短期間に営まれ、土坑は住居に隣接する廃棄場所として機能したとみられる。また、SI35A、SK13から鉄滓が出土しており、周辺に鍛冶にかかわる遺構が存在した可能性もある。

Ⅱ期（９世紀以降の古代）には、掘立柱建物跡11棟（SB19・25・53・54・55・56・57・60・61・65・66）、小溝状遺構群１面（SF2）、土坑２基（SK15・41）が該当する。Ⅰ区に掘立柱建物跡で構成される集落が営まれており（第41図）、建物跡の方向は真北方向からやや西に偏する。規則的な配置は認められず、建物相互の位置関係から、３時期以上の変遷が想定される。

建物跡の廃絶後には、ⅠA区のほぼ全面にSF2小溝状遺構群が分布しており、居住域から耕作域への土地利用の変化が認められる。耕作痕跡とみられる溝跡の方向はおおよそ南北方向である。本遺跡の南東約400ｍに位置する中平遺跡でも、平安時代とみられる小溝状遺構群が検出されている（宮城県教育委員会1978・1979）。当時期に雉子尾川右岸に形成された本遺跡周辺の沖積低地が耕作域として利用されたことがわかる。



第40図　主な遺構の遺構期と重複関係



第41図　Ⅰ期・Ⅱ期の主な遺構の分布

Ⅲ期（中世～近世）にはSE26井戸跡、SD21・33河川跡、SF37小溝状遺構群が該当する。SE26は堆積土から出土したロクロかわらけの年代から13世紀代に位置付けられるが、同時期の建物が特定できなかったため、集落の実態は不明である。また、SD21は、堆積土から出土した漆器椀の年代から、18世紀以降に位置付けられる。

(3) ７世紀後葉～８世紀初頭の集落について

前節でⅠ期に位置付けた遺構群は、竪穴住居跡と土坑で構成される７世紀後葉～８世紀初頭の短期間に営まれた集落である。Ⅱ区北端に位置するSD22河川跡より東では住居はみられず、西に広がると考えられ、SD22河川跡が集落の東端を区画している可能性もある。Ⅰ区に14軒の竪穴住居跡が検出され、特に北西部では住居が密集し、重複が多く認められる。規模は長辺が約3.9～6.8mの間に収まるとみられ、４～5.5m前後のものが主体となる。方向は南北方向が概ね真北を向く傾向が認められる。カマド構造が明らかなものは、本体が住居内部にあり、煙道が住居外に長く延びる在地型（註２）のものである。

同時期の集落としては、蔵王町十郎田遺跡（蔵王町教育委員会2011）、仙台市長町東遺跡（仙台市教育委員会2007・2008）、西台畑遺跡（仙台市教育委員会2010・2011）、大和町一里塚遺跡（宮城県教育委員会1999、大和町教育委員会2003）などで、竪穴住居跡が狭い範囲に密集し重複する状況が認められる。これらは、材木塀と大溝で囲繞された「囲郭集落」（村田2002・2005・2009）で、隣接または重複する位置に後続して官衙が造営されたことが知られている（註３）。囲郭集落は、律令支配を前提として、官衙の設置や維持を目的とした移民を伴う集落と考えられている。Ⅰ期集落とこれらの集落を比較すると、狭い範囲で多数の竪穴住居跡が密集して重複が多く認められることの他、竪穴住居跡の方向に規則性が認められること、在地型のカマドを主体とすること、集落が河川に隣接していることが共通しているが、Ⅰ期集落の東端をSD22河川跡が区画している可能性があるものの、囲繞施設について不明な点で相違もある。

Ⅰ期集落の出土遺物は、在地の土師器が主体で、一定量の須恵器が伴う。土師器の中には関東系土師器（第30図１）がわずかに認められ、在地の土師器と併用されている。須恵器の大半は在地製品であるが、湖西窯跡群の製品とみられる蓋（註４）が認められる。また、竪穴住居跡から円面硯や転用硯が出土しており、文字に係る構成員が集落内に存在したことがわかる（田中2008）。

上記の囲郭集落と遺物の面から比較すると、本遺跡では出土量がわずかな関東系土師器が囲郭集落ではまとまって出土しており、やや違いがみられる。ただし、上述のとおり、規模や方向に規則性のある竪穴住居跡が狭い範囲に密集する状況は、同時期の囲郭集落と共通することから、Ⅰ期集落は一定の規制のもとに計画的に形成されたことが考えられる。また、円面硯を含む一定量の須恵器が存在することから、官衙との関連がうかがえる。

本遺跡が位置する角田盆地周辺は、大化の改新以前に伊久国造、大化５年（649年）に評が設置され、653～654年頃の陸奥国設置と同時にその領域になったと考えられている（今泉2005a・2005b）。７世紀半ばに仙台平野に城柵とされる郡山遺跡Ⅰ期官衙、694～700年頃には陸奥国府とされる郡山遺跡Ⅱ期官衙が設置されたことから（仙台市教育委員会2005）、７世紀後葉から８世紀初頭頃には、角田盆

地周辺は律令政府の安定した統治下に置かれていたと考えられる。

角田盆地に置かれた地方官衙とされる遺跡が、本遺跡の約６km北に位置する角田郡山遺跡である。遺跡南部の郡山地区では、東西約260m、南北約190mを区画する大溝内部で、掘込地業・壺地業を伴う礎石建物跡７棟や掘立柱建物跡６棟が東西方向３列に配置された倉庫群が発見され、この一帯が伊具郡衙の正倉院と位置付けられている（齋藤2009）。また、倉庫群の約500m北の品濃地区では、床束や間仕切りをもつ掘立柱建物跡を中心とする計画的に配置された４棟の建物群が発見され、館などの施設と推定されている（角田市教育委員会2008・2009・2011）。倉庫群は総柱掘立式から礎石式への建物構造の変化が明らかになっており（齋藤2009）、複弁六葉蓮華文軒丸瓦（註５）や桶巻き作りの平瓦が出土していることから、７世紀末葉から８世紀初頭に創建された瓦葺きの倉が想定されている（大橋2012）。平瓦は、凸面に正格子叩き目、凹面に布目痕がみられるものが主体で、本遺跡出土の須恵器壺に融着した焼台の平瓦片と特徴が類似する。本遺跡のⅠ期集落が出現し、存続した時期は、角田郡山遺跡に伊具郡衙が置かれ律令支配が進められた時期と重なり、関わりが想定されるが、今回の発掘調査では、集落の一部の確認にとどまることから、これ以上の検討は行うことができない。Ⅰ期集落の性格や、角田郡山遺跡など伊具郡内の周辺遺跡との関わりについては、今後の調査を待って検討したい。

３．まとめ

卯月沢遺跡は、阿武隈川の支流である雉子尾川と丘陵の間の沖積低地に立地している。遺跡の時期は飛鳥時代から近世にわたるが、主体は７世紀後葉から８世紀初頭である。以下要点をまとめる。

・７世紀後葉から８世紀初頭（Ⅰ期）の遺構には、竪穴住居14軒、土坑５基があり、集落が営まれていた。規模や方向に規則性がある竪穴住居跡が密集しており、重複も多く認められることから、集落は一定の規制のもとに計画的に形成されたと考えられる。

・Ⅰ期の遺物には、非ロクロ調整の土師器、須恵器、砥石、鉄鏃、鉄滓がある。土器類は土師器が主体で、須恵器が一定量伴う。土師器は在地のものが大半であるが、関東系土師器がわずかに伴う。須恵器は在地製品が主体で、湖西窯跡の製品とみられる搬入品が認められる。円面硯を含む須恵器が一定量存在することから、官衙との関連がうかがえる。また、鉄滓が少量出土しており、鍛冶にかかわる遺構が周辺に存在する可能性がある。

・今回の発掘調査では、集落の一部の確認にとどまったが、丸森町や角田市では当該期の集落の調査事例は少なく、古代伊具郡の歴史を考える上で貴重な資料である。

・平安時代の遺構には掘立柱建物跡11棟、小溝状遺構群１面、土坑２基があり、ロクロ調整の土師器、須恵器が出土している。９世紀以降に掘立柱建物跡で構成される集落が出現するが、おおよそ10世紀以降には耕作域となっており、土地利用の変化が認められる。

・中世の主な遺構は井戸跡１基である。井戸跡からはロクロ調整のかわらけ小皿が出土しており、13世紀代に位置付けられる。同時期の建物が特定できなかったため、集落の実態は不明である。

・近世の主な遺構は河川跡１条で、漆器椀・小皿が出土しており、18世紀以降に位置付けられる。

註１　近年陶邑編年の再検討が進められ、それらの地方への波及が一様ではないことが指摘されている。善光寺４型式については、７世紀第４四半期後半から一部８世紀初頭に位置付ける年代観も示されている（藤木2012）。

註２　村田晃一氏によるカマドの分類（村田2000）によると、この時期のカマドは、カマド本体が住居内部にあり長い煙道をもつものが在地型、カマド本体が住居外部に突出し短い煙道をもつものと、カマド本体が住居外部に突出し長い煙道を持つものが関東型に大別される。

註３　十郎田遺跡周辺では官衙の存在は未確定であるが、都遺跡、窪田遺跡、新城館跡で７世紀末～８世紀前半頃の建物跡や区画施設が確認されており、周辺地域の調査成果や歴史的動向から、都遺跡に官衙施設（柴田郡衙）が想定されている（蔵王町教育委員会2011）。

註４　宮城県域における湖西窯跡製品の須恵器の分布状況とそのあり方を検討した佐藤敏幸・大久保弥生氏の論考（佐藤・大久保2007）では、墳墓以外の出土遺跡が、東松島市赤井遺跡、大崎市権現山遺跡・南小林遺跡・名生館官衙遺跡・鍋田囲遺跡、名取市清水遺跡の拠点的集落あるいは官衙に限られ、律令国家直接の機関である仙台市郡山遺跡で出土していないことから、古墳時代からの地方氏族間のネットワークが流通の基盤になっている可能性が指摘されている。

註５　角田郡山遺跡出土の複弁六葉蓮華文軒丸瓦については、陸奥国安積郡衙と推定されている福島県郡山市清水台遺跡出土瓦との瓦当文様の類似性が指摘されており、年代や瓦当文様の祖型について検討されている（佐川2012、眞保2012など）。また、瓦の生産窯としては、遺跡の東に広がる低丘陵地帯に位置する峯窯跡、今泉窯跡、川前窯跡（角田市教育委員会1996）などが知られている。

引用文献

今泉隆雄　2005a「文献資料からみた７世紀の陸奥南部」『日本考古学協会2005年度福島大会シンポジウム資料集』

今泉隆雄　2005b「古代国家と郡山遺跡」『郡山遺跡発掘調査報告書―総括編（1）―』仙台市文化財調査報告書第283集

氏家和典　1957「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第14輯

大橋泰夫　2012「宮城県角田郡山遺跡（陸奥国伊具郡衙）」『古代日本における法倉の研究』平成21年度～平成23年度科学研究補助金研究成果報告書

角田市教育委員会　1996『宮城県角田市川前窯跡発掘調査報告書』角田市文化財調査報告書第18集

角田市教育委員会　2002『角田郡山遺跡Ⅹほか』角田市文化財調査報告書27集

角田市教育委員会　2008『市内遺跡発掘調査―品濃遺跡調査概報―』角田市文化財調査報告書第34集

角田市教育委員会　2009『市内遺跡発掘調査―角田郡山遺跡調査概報―』角田市文化財調査報告書第35集

角田市教育委員会　2011『市内遺跡発掘調査―角田郡山遺跡調査概報―』角田市文化財調査報告書第38集

河南町教育委員会　2004『関ノ入遺跡』河南町文化財調査報告書第13集

後藤建一　1989「湖西古窯跡群の須恵器と窯構造」『静岡県の窯業遺跡』静岡県文化財調査報告書第42集

齋藤彰裕　2009「宮城県角田郡山遺跡」『日本古代の郡衙遺跡』条里制・古代都市研究会編　雄山閣

蔵王町教育委員会　2011『十郎田遺跡１―経営体育成基盤整備事業（県営ほ場整備事業）に伴う緊急発掘調査―』蔵王町文化財調査報告書第13集

佐川正敏　2012「寺院と瓦生産からみた律令国家形成期の陸奥国」『古代社会と地域間交流Ⅱ―寺院・官衙・瓦からみた関東と東北―』六一書房

佐藤敏幸・大久保弥生　2007「宮城県の湖西窯産須恵器」『宮城考古学』第９号　宮城県考古学会

志間泰治　1954「宮城県伊具郡金山町台町古墳群調査概報」『歴史』第７叢　東北史学会

志間泰治　1955「宮城県伊具郡丸森町台町古墳群調査概報　第２叢」

志間泰治　1961「宮城県伊具郡丸森町台町古墳群調査概報　第３叢」『東北考古学』第２号

眞保昌弘　2012「陸奥国南部を中心とした川原寺系鐙瓦の展開とその意義」『古代社会と地域間交流Ⅱ―寺院・官衙・瓦からみた関東と東北―』六一書房

仙台市教育委員会　1993『大蓮寺窯跡―第２・３次発掘調査報告書―』仙台市文化財調査報告書168集

仙台市教育委員会　2003「Ⅺ南小泉遺跡（第38次）発掘調査報告書」『国分寺東遺跡他発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第266集

仙台市教育委員会　2005『郡山遺跡発掘調査報告書―総括編（1）―』仙台市文化財調査報告書第283集

仙台市教育委員会　2007『長町駅東遺跡第４次調査―仙台市あすと長町土地区画整理事業関係遺跡発掘調査報告書Ⅰ―』仙台市文化財調査報告書第315集

仙台市教育委員会　2008『長町駅東遺跡第１・２次調査―仙台市あすと長町土地区画整理事業関係遺跡発掘調査報告書Ⅱ―』仙台市文化財調査報告書第324集
仙台市教育委員会　2010『西台畑遺跡第１・２次調査―仙台市あすと長町土地区画整理事業関係遺跡発掘調査報告書Ⅲ―』仙台市文化財調査報告書第359集
仙台市教育委員会　2011『西台畑遺跡第３次調査―仙台市あすと長町土地区画整理事業関係遺跡発掘調査報告書Ⅳ―』仙台市文化財調査報告書第388集
関根達人　1998「木製品・漆器」『東北大学埋蔵文化財調査年報９』東北大学埋蔵文化財調査研究センター
大和町教育委員会　2003『一里塚遺跡―吉岡東官衙遺跡―』大和町文化財調査報告書第12集
田中広明　2008『豪族のくらし　古墳時代～平安時代』すいれん舎
福島県教育委員会　1988「善光寺遺跡」『国道113号バイパス遺跡調査報告Ⅳ』福島県文化財調査報告書第192集
藤木　海　2012「瓦からみた陸奥南部の寺院造営と坂東―山王廃寺系軒先瓦の文様と技術系譜―」『古代社会と地域間交流Ⅱ―寺院・官衙・瓦からみた関東と東北―』六一書房
丸森町教育委員会　1968『七夕遺跡調査報告書』
丸森町教育委員会　2000『大古町遺跡―第１次・第２次調査概報―建設省桜づつみ事業に伴う発掘調査』丸森町文化財調査報告書第16集
丸森町教育委員会　2003『大古町遺跡―国道113号線舘矢間バイパス工事に伴う発掘調査報告書Ⅰ―』丸森町文化財調査報告書第17集
丸森町教育委員会　2004『大古町遺跡―国道113号線舘矢間バイパス工事に伴う発掘調査報告書Ⅱ―』丸森町文化財調査報告書第18集
宮城県教育委員会　1978「中平遺跡」『宮城県文化財発掘調査略報（昭和53年度分）』宮城県文化財調査報告書第57集
宮城県教育委員会　1979「中平遺跡」『宮城県ほ場整備関連　遺跡詳細分布調査報告書（昭和53年度）』宮城県文化財調査報告書第58集
宮城県教育委員会　1980「石神遺跡」『宮城県圃場整備関連　遺跡詳細分布調査報告書（昭和54年度）』宮城県文化財調査報告書第64集
宮城県教育委員会　1991「台町古墳群」『舘南囲遺跡ほか』宮城県文化財調査報告書第144集
宮城県教育委員会　1992「伊手遺跡」『金鋳神遺跡ほか』宮城県文化財調査報告書第150集
宮城県教育委員会　1999『一里塚遺跡』宮城県文化財調査報告書第179集
宮城県教育委員会　2006『中野高柳遺跡Ⅳ―宮城県仙台港後背地土地区画整理事業関連遺跡調査報告書Ⅳ―』宮城県文化財調査報告書第204集
村田晃一　2000「飛鳥・奈良時代の陸奥北辺―移民の時代―」『宮城考古学』第２号　宮城県考古学会
村田晃一　2002「７世紀集落研究の一視点（1）」『宮城考古学』第４号　宮城県考古学会
村田晃一　2005「７・８世紀における陸奥北辺の様相―宮城県域を中心として―」『日本考古学協会2005年度福島大会シンポジウム資料集』
村田晃一　2007「第Ⅱ章　東北・北海道における６～８世紀の土器変遷と地域の相互関係　ｖ．宮城県中部から南部」『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』（平成15年度～平成18年度科学研究補助金研究成果報告書）
村田晃一　2009「律令国家形成期の陸奥北辺経営と坂東―在地土師器・関東系土師器・囲郭集落の検討から―」『古代社会と地域間交流』六一書房

写　真　図　版

1．卯月沢遺跡遠景（北西から）

2．ＩＡ区全景（北西から）

3．SI4 竪穴住居跡（西から）

4．SI4　カマド縦断面（南から）

写真図版 1

1．SI5 竪穴住居跡（南から）

2．SI7 竪穴住居跡（南から）

3．SI8 竪穴住居跡（南から）

4．SI9 竪穴住居跡（南から）

5．SI10 竪穴住居跡・SK23 土坑検出状況（南から）

6．SK23 土坑（南から）

7．SI11 竪穴住居跡（西から）

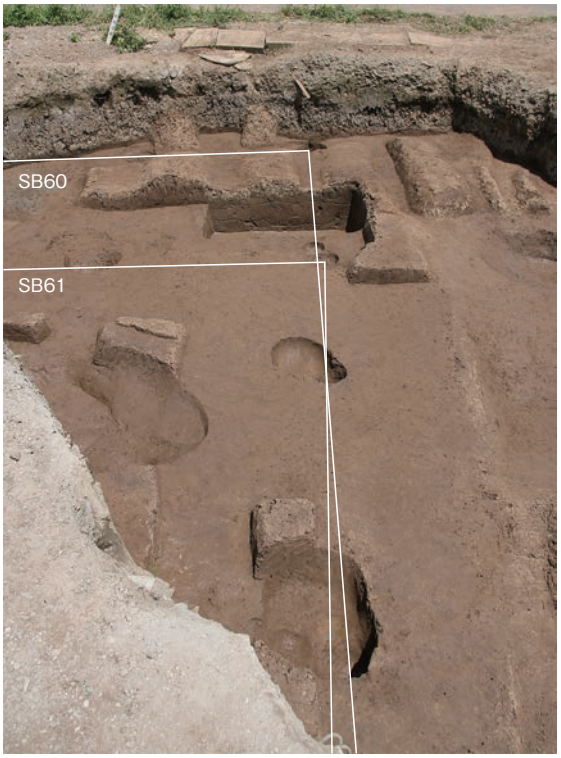
8．SI11　K2 遺物出土状況（西から）

写真図版２

1．SI12 竪穴住居跡（南から）

2．SI12　P2 主柱穴断面（東から）

3．SB19 建物跡 N1E2 断面（東から）



4．SB60・61 掘立柱建物跡（南から）

5．SB60　N2E1 断面（南から）

6．SB61　N2E1 柱穴断面（南から）

7．SF２小溝状遺構群（南東から）

8．SK13 土坑断面（南から）

9．SK14 土坑断面（東から）

写真図版３

1．SK24 土坑（東から）

2．SK59 土坑（東から）

3．ⅠB 区全景（北から）

4．SI29・31 竪穴住居跡検出状況（南から）

5．SI29　K1 断面（南から）

6．SI29　K2・K3 断面（西から）

7．SI32 竪穴住居跡検出状況（北から）

写真図版 4

1．SI35 竪穴住居跡完掘状況（南から）

2．SI35A　K2 断面（西から）

3．SI35A　K3 断面（西から）

4．SI35A　新・旧カマド（西から）

5．SI35A　旧カマド煙道土器出土状況（西から）

6．SI35A　新カマド断面（南から）

7．SI35A　X1 焼面（東から）

8．SI35A　K4 断面（北から）

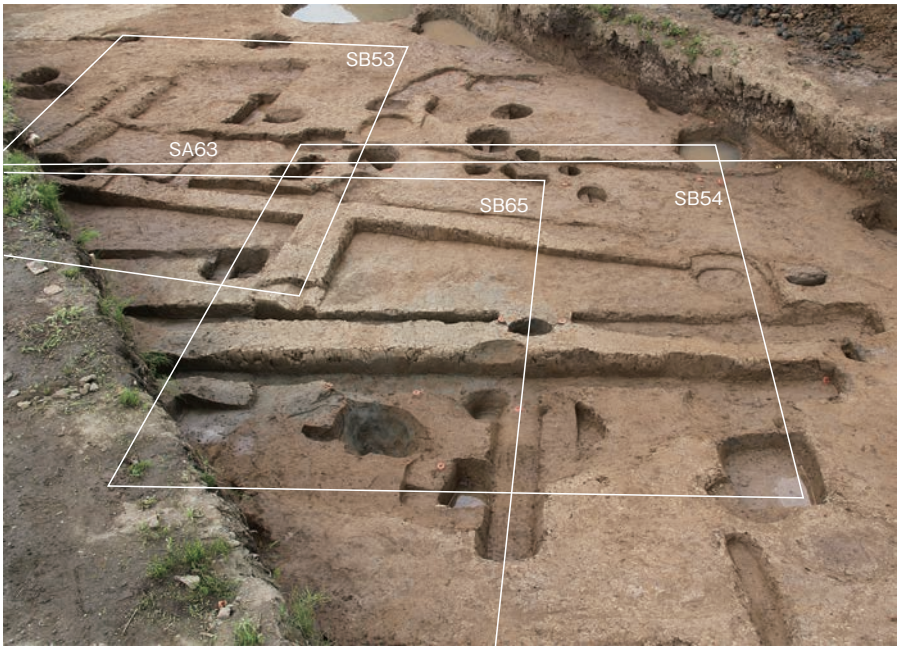
9．SI35A 抜取溝（西から）

10．SI35A　P1 主柱穴根巻石（北から）

11．SI35B　K1 断面（南から）

12．SI35B 壁穴柱（西から）

写真図版５



1. SB53・54・65 掘立柱建物跡、SA63 柱穴列（南から）

2. SB55・56・57・66 掘立柱建物跡（南から）

3. SB53　N4E1 土器出土状況（北西から）

4. SB54　N1E3 柱穴断面（南から）

5. SB56　N3W1 柱穴断面（北から）

6. SB57　N1W3 柱穴断面（東から）

7. SB66　N1W1 柱穴断面（南から）

8. SD33 河川跡断面（東から）

9. SD33　灌漑施設検出状況（南東から）

写真図版 6

1．SI36 竪穴住居跡（西から）

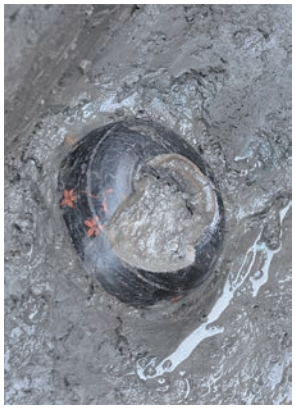
2．SE26 井戸跡断面（東から）

3．SK41 土坑（北西から）

4．SK62 土坑（西から）

5. Ⅱ区全景（北西から）

6．SD18 溝跡（東から）



7．SD21 河川跡堆積土下層
漆器椀出土状況（南東から）

8．SD21・22 河川跡断面（北東から）

写真図版７

写真図版８　SI4・5竪穴住居跡出土土器

1：SI7, 2：SI8, 3：SI9
4－11：SI11（縮尺 1/3）

写真図版９　SI7・8・9・11竪穴住居跡出土遺物

1：SI12, 2：SB61, 3･4：SF2
5－7：SK14, 8－18：SK23（縮尺 1/3）

写真図版10　SI12、SB61、SF2、SK14・23出土遺物

写真図版11　SK24・59、ⅠA区遺構確認面、SI29・31・35A・35B出土遺物

７世紀後葉から８世紀初頭の主な土器

写真図版12　SB57、SK41、SE26、SD20・21・33出土遺物と７世紀後葉～８世紀初頭の主な土器

報　告　書　抄　録

ふりがな	うづきさわいせき
書名	卯月沢遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	宮城県文化財調査報告書
シリーズ番号	第232集
著者名	古田和誠
編集機関	宮城県教育委員会
所在地	〒980－8423　宮城県仙台市青葉区本町3－8－1　TEL 022－211－3685
発行年月日	西暦2013年３月25日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	世界測地系 北緯	世界測地系 東経	調査期間	調査面積	調査原因
卯月沢遺跡（うづきさわ）	伊具郡丸森町（いぐぐんまるもりまち） 大内字卯月沢（おおうちあざうづきさわ）	04341	10151	37度 53分 01秒	140度 49分 10秒	確認調査 2011.01.27 ～02.04 2011.04.18 ～04.20	260㎡	国道113号大内 自歩道設置工事
						本発掘調査 2011.11.07 ～2012.03.16 2012.04.09 ～06.13	730㎡	国道113号大内 自歩道設置工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
卯月沢遺跡	集落	飛鳥時代	竪穴住居跡・土坑	土師器・須恵器 鉄鏃・石製品	７世紀後葉～８世紀初頭の竪穴住居跡14軒。
	集落・田畑	平安時代	掘立柱建物跡 小溝状遺構群・土坑	土師器・須恵器	
	集落・散布地	中世～近世	井戸跡・河川跡 小溝状遺構群	かわらけ 中世陶器・漆器	

要約

卯月沢遺跡は、伊具郡丸森町大内字卯月沢に所在し、阿武隈川の支流である雉子尾川と丘陵の間の沖積低地に位置する。調査の結果、飛鳥時代～近世の遺構・遺物を発見した。

７世紀後葉～８世紀初頭では、竪穴住居跡14軒、土坑５基を検出しており、土師器、須恵器、鉄鏃、鉄滓などが出土している。住居は規模や方向に規則性があり、狭い範囲に密集し、重複も多く認められる。円面硯を含む須恵器が一定量存在することから、官衙との関連がうかがわれる。今回の調査では集落の一部の確認にとどまったが、伊具郡内ではこの時期の集落の調査事例が少なく、良好な資料といえる。

平安時代では、掘立柱建物跡11棟、小溝状遺構群１面、土坑２基などを検出しており、土師器、須恵器が出土している。掘立柱建物跡で構成される集落の廃絶後には、耕作域として利用されており、土地利用の変化が認められる。

中世～近世では、井戸跡１基、河川跡２条、小溝状遺構群１面などを検出しており、かわらけ、中世陶器、漆器が出土している。井戸跡は出土遺物から13世紀代に位置付けられたが、同時期の建物が特定できなかったため、集落の実態は不明である。

宮城県文化財調査報告書第232集

卯月沢遺跡

平成25年３月20日印刷
平成25年３月25日発行

発　行　宮城県教育委員会
仙台市青葉区本町三丁目８番１号